佐賀県文化財調査報告書第151集

佐賀県内遺跡確認調査報告書20

2002年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第151集

佐賀県内遺跡確認調査報告書20

2002年3月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

図版１　浜玉町：小山田古墳全景（南から）

図版２　東脊振村：石動四本松遺跡４区ＳＤ211溝状遺構（ＳＴ217前方後円墳周溝）全景（東から）

口絵２

図版３　嘉瀬川ダム建設事業：大野代官所跡正面石垣

図版４　佐賀市:佐賀城本丸跡西側石垣（北から）

はじめに

この報告書は、佐賀県内で実施される、農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業、その他国・県所管の公共事業の施工に先立ち実施した、埋蔵文化財の確認調査の結果をまとめたものです。

本県には埋蔵文化財が多数存在しており、県教育委員会では、これらの貴重な文化財の保護と農業等を営む方々の生活基盤を整備する事業との調整を図るため、文化財の確認調査と記録の保存を進めております。

今回、農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業、その他国・県所管の公共事業の施工地区について文化財確認調査を行った結果、縄文時代から近世にわたる各時代の遺跡が確認され、ここにその成果の一端を紹介するものです。

本書を、文化財を県民の共有財産として大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたって、文化庁、九州農政局をはじめ国・県各事業の関係機関、各市町村教育委員会・農林担当課、並びに地元関係各位の深い御理解と御協力をいただき、心からお礼申し上げます。

平成14年３月31日

佐賀県教育委員会
教育長　松尾正廣

例　　言

1．本書は国庫補助（県内遺跡確認調査事業）を受け、平成12年度に確認調査を実施した佐賀県農林業基盤整備事業、佐賀郡富士町内で計画されている嘉瀬川ダム建設事業、及びその他国・県所管の公共事業に伴う文化財確認調査報告書である。

2．本書に掲載されている内容のうち農林業基盤整備事業に伴う文化財確認調査概要報告については、平成12年度までは「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書」として刊行してきたが、今回、新たに嘉瀬川ダム建設事業、及びその他国・県所管の公共事業に伴う確認調査概要報告についても所収することから、本書の名称を「佐賀県内遺跡確認調査報告書」と改めることとした。なお、シリーズ番号については平成12年度刊行の前掲報告書に引き続いて「20」とした。

3．調査は市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が行った。

4．トレンチ（試掘坑）位置図作成、遺構の実測、写真撮影は調査員が行った。また、遺構実測図作成の一部・地形測量図作成・空中写真撮影作業については委託により実施した。

5．遺物の整理・製図・報告書作成作業は、佐賀県文化課（神埼八子事務所）で行った。

・遺物整理 …… 田中 ハルミ

・遺物整理、遺物実測、製図 …… 一番ケ瀬 富士子・江島 美恵子・上瀧 光子・山口 美佐子

・製　　図 …… 三好 文子

6．本書の執筆は下記の分担で行った。

Ⅰ、Ⅱ［〔3〕－(1) を除く］、Ⅲ …… 市川 浩文（佐賀県教育委員会）

Ⅱ－〔3〕－(1) …… 西田 和己（佐賀県教育委員会）

Ⅳ－1 …… 太田　睦（中原町教育委員会）

Ⅳ－2 …… 三代 俊行（佐賀市教育委員会）

Ⅳ－3 …… 前田 達男（佐賀市教育委員会）

Ⅳ－4 …… 岩永 雅彦（多久市教育委員会）

Ⅳ－5 …… 島内 浩輔（伊万里市教育委員会）

Ⅳ－6 …… 中尾 修二（浜玉町教育委員会）

Ⅳ－7 …… 草場 誠司（唐津市教育委員会）

7．本書に用いた方位は、原則として座標北とし、磁北を用いた場合はその旨を記した。

8．挿図中の■は遺構・遺物が確認されたトレンチ、□は遺構・遺物が確認されなかったトレンチを示す。ただし、遺物の出土が表土層からのみであった場合は□で表す。

9．本書「Ⅱ．平成12年度文化財確認調査」の内容は調査員から提出された調査結果報告を基に編集者がまとめている。Ⅱの報告及びⅣの各担当者の原稿のうち、「土壙」や「……跡」の表記等については統一を図り、また一部表現を変えたところがある。これらの文責は編集者に帰す。

10．本書の編集は市川が行った。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
1．平成12年度農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査 …… 1
(1) 農林業基盤整備事業等に係る協議 …… 1
(2) 文化財確認調査 …… 1
(3) 農林業基盤整備事業等と文化財保護に関する協議 …… 1
2．平成11・12年度嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査 …… 2
3．平成12年度その他公共事業に係る文化財確認調査 …… 2
4．調査組織 …… 7

Ⅱ．平成12年度文化財確認調査の概要 …… 9
[1] 農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査 …… 9
1．佐賀東部地区の調査 …… 9
(1) 中原町 …… 9
(2) 東脊振村 …… 13
(3) 背振村 …… 61
2．佐賀西部地区の調査 …… 63
(1) 佐賀市 …… 63
(2) 多久市 …… 66
(3) 小城町 …… 66
3．佐賀南部地区の調査 …… 69
(1) 太良町 …… 69
4．佐賀北部地区の調査 …… 69
(1) 相知町 …… 69
(2) 浜玉町 …… 73
(3) 厳木町 …… 91
5．佐賀上場地区の調査 …… 94
(1) 北波多村 …… 94
(2) 玄海町 …… 96
[2] 嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査 …… 97
[3] その他公共事業に係る文化財確認調査 …… 105
(1) 佐賀市 …… 105
(2) 上峰町 …… 113
(3) 東脊振村 …… 115
(4) 肥前町 …… 116

Ⅲ．まとめ ……119

Ⅳ．附編　平成12年度農林業基盤整備事業に伴う発掘調査の概要……121
1．鷹取山遺跡５・６区（中原町）……122
2．石土井遺跡３・４・５・６区（佐賀市）……124
3．上九郎遺跡２区（佐賀市）……126
4．八ツ溝遺跡（多久市）……128
5．小木原遺跡（伊万里市）……130
6．大岩西遺跡Ａ・Ｂ区（浜玉町）……132
7．川頭遺跡（唐津市）……134

挿図目次

図１　平成12年度県内遺跡確認調査地区及び農林業基盤整備事業に伴う発掘調査地区位置図……３・４
図２　佐賀東部地区調査地位置図……10
図３　中原町：九千部山横断線トレンチ配置図……11
図４　東脊振村：九千部山横断線調査区位置図……12
図５　九千部山横断線調査区地形測量図……14
図６　表採及びトレンチ出土遺物……15
図７　筑前街道推定路線図……17
図８　東脊振村：石動四本松遺跡４区位置図……19
図９　東脊振村：佐賀東部地区トレンチ配置図……21
図10　石動四本松遺跡４区遺構配置図……23・24
図11　ＳＤ211溝跡埴輪出土状況……25・26
図12　№１トレンチ土層図……27
図13　ＳＢ214竪穴住居跡……30
図14　№５トレンチ土層図……31
図15　ＳＤ213溝跡埴輪出土状況……32
図16　埴輪各部名称図……33
図17　出土埴輪実測図①……35
図18　出土埴輪実測図②……36
図19　出土埴輪実測図③……37
図20　出土埴輪実測図④……38
図21　出土埴輪実測図⑤……39
図22　出土埴輪実測図⑥……40
図23　出土埴輪実測図⑦……41
図24　出土埴輪実測図⑧……43
図25　出土埴輪実測図⑨……44
図26　円筒埴輪タガ部の形状各種……44
図27　出土須恵器・土師器実測図……45
図28　ＳＴ217前方後円墳墳形復元図……48
図29　ＳＴ217古墳周辺地籍・地割図……49
図30　佐賀西部地区調査地位置図……62
図31　佐賀市：金立東部地区トレンチ配置図……64
図32　小城町：佐賀西部導水路トレンチ配置図……65
図33　佐賀南部地区調査地位置図……67
図34　太良町：多良岳２期地区トレンチ配置図……68
図35　佐賀北部地区調査地位置図……70
図36　相知町：帆柱地区炭窯……71
図37　浜玉町：小山田古墳位置図……74
図38　小山田古墳周辺地形図……75・76
図39　小山田古墳墳丘測量図……79・80
図40　小山田古墳墳丘トレンチ配置図……81
図41　小山田古墳墳丘断面図・土層図……82
図42　小山田古墳墳頂部トレンチ平面図・土層図……83・84
図43　厳木町：浦川内地区トレンチ配置図……92
図44　佐賀上場地区調査地位置図……93
図45　北波多村：上場Ⅲ期地区トレンチ配置図……95

図46　嘉瀬川ダム建設予定地範囲図 ……98
図47　嘉瀬川ダム建設予定地確認調査実施地区位置図1 ……99
図48　嘉瀬川ダム建設予定地確認調査実施地区位置図2 ……100
図49　大野代官所跡周辺地形測量図 ……102
図50　ダムサイト付近石積遺構周辺地形測量図 ……103
図51　その他公共事業に係る文化財確認調査実施地区 ……106
図52　佐賀市：佐賀城本丸跡トレンチ配置図 ……108
図53　佐賀城本丸跡西側石垣木樋1 ……109
図54　佐賀城本丸跡西側石垣木樋2 ……110
図55　上峰町：自衛隊目達原補給処トレンチ配置図 ……114
図56　肥前町：県道鷹島肥前線トレンチ配置図 ……117
図57　鷹取山遺跡5・6区位置図 ……122
図58　石土井遺跡3・4・5・6区位置図 ……124
図59　上九郎遺跡2区位置図 ……126
図60　八ツ溝遺跡位置図 ……128
図61　八ツ溝遺跡出土遺物 ……129
図62　小木原遺跡位置図 ……130
図63　大岩西遺跡A・B区位置図 ……132
図64　川頭遺跡位置図 ……134

図版目次

図版1　浜玉町：小山田古墳全景 ……口絵1
図版2　東脊振村：石動四本松遺跡4区SD211全景 ……口絵1
図版3　嘉瀬川ダム：大野代官所跡正面石垣 ……口絵2
図版4　佐賀市：佐賀城本丸跡西側石垣 ……口絵2
図版5　九千部山横断線（東脊振村） ……15
図版6　石動四本松遺跡4区① ……53
図版7　石動四本松遺跡4区② ……54
図版8　石動四本松遺跡4区③ ……55
図版9　石動四本松遺跡4区④ ……56
図版10　石動四本松遺跡4区⑤ ……57
図版11　石動四本松遺跡4区⑥ ……58
図版12　石動四本松遺跡4区⑦ ……59
図版13　石動四本松遺跡4区⑧ ……60
図版14　小山田古墳① ……87
図版15　小山田古墳② ……88
図版16　小山田古墳③ ……89
図版17　佐賀城本丸跡① ……111
図版18　佐賀城本丸跡② ……112
図版19　鷹取山遺跡5・6区 ……123
図版20　石土井遺跡3・4・5・6区 ……125
図版21　上九郎遺跡2区 ……127
図版22　八ツ溝遺跡 ……129
図版23　小木原遺跡 ……131
図版24　大岩西遺跡A・B区 ……133
図版25　川頭遺跡 ……135

表 目 次

表1　佐賀県内遺跡確認調査地区（平成12年度実施） ……5・6
表2　石動四本松遺跡4区出土埴輪観察表 ……50～53
表3　平成12年度農林業基盤整備事業等に伴う発掘調査一覧表 ……121

報　告　書　抄　録

ふりがな	さがけんないいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	佐賀県内遺跡確認調査報告書20
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第151集
編集者名	市川　浩文
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840－8570　佐賀県佐賀市城内１丁目１－59　　ＴＥＬ．0952（24）2111
発行年月日	2002年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積 （確認調査） ha	調査原因
佐賀県農業基盤整備事業地区内遺跡 嘉瀬川ダム建設予定地内遺跡 その他公共事業予定地内遺跡	佐賀県内					20000401 ～ 20010331	193.4ha	農業基盤整備事業 嘉瀬川ダム建設事業 その他公共事業

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐賀県農業基盤整備地区内遺跡 嘉瀬川ダム建設予定地内遺跡 その他公共事業予定地内遺跡	集落 墓地 古墳 城郭 窯跡	縄文時代 ～ 近世	集落遺構 古墳 炭窯 石垣 木樋 山城関連遺構 水田関連遺構 等	土器 石器 陶磁器 埴輪	確認調査報告のほかに平成12年度に農林業基盤整備事業に伴い実施された７遺跡の調査概要を所収。

Ⅰ．　調査に至る経過

１．平成12年度農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査

(1)　農林業基盤整備事業等に係る協議

例年、次年度の農林業基盤整備事業については、県農林部と県教育委員会が締結した「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項（昭和53年４月１日締結、昭和59年４月１日一部改正）」に基づき、文化財確認調査の有無等について協議を実施している。平成13年度農林業基盤整備事業施工地区のうち、予備調査（分布・試掘・確認調査）が必要となった地区は、佐賀東部地区（鳥栖市・基山町・中原町・北茂安町・上峰町・東脊振村・脊振村・神埼町・三田川町・三瀬村）18.4ha、佐賀西部地区（佐賀市・多久市・富士町・大和町・川副町・久保田町・三日月町・小城町・三日月町・牛津町・芦刈町）62.8ha、佐賀南部地区（武雄市・鹿島市・有明町・塩田町・太良町・嬉野町・大町町・北方町）25.1ha、佐賀北部地区（伊万里市・有田町・西有田町・相知町・七山村・浜玉町・厳木町・北波多村）30.5ha、佐賀上場地区（唐津市・玄海町・肥前町）9.3haの合計146.1haである。施工主体は、県農林部・農村農地整備局所管の県営、市町村所管の団体営事業等に区分される。また、九州農政局筑後川下流農業水利事務所所管の筑後川下流用水事業に伴う協議（佐賀市・大和町・神埼町・牛津町・小城町）、佐賀中部農地防災事業所所管の農業用水関係事業に伴う協議（佐賀市・三日月町・牛津町・芦刈町）もなされた。

(2)　文化財確認調査

協議した施工計画について現地踏査などの結果をもとに検討を行い、文化財確認調査が必要と認められた地区（表１）を決定した。これを受け、当該市町村教育委員会・農林担当課、県農林部・農村農地整備局、九州農政局との第１回目の「平成13年度農林業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」を県教育委員会が主催して10月17日に開催し、文化財確認調査の時期など円滑な実施について協議した。

文化財確認調査は原則として稲刈り終了から麦の作付けまでの期間（10月下旬～12月上旬）までの間に行ったが、地区によっては上物の状況等により、年度末までずれ込む箇所もあった。

確認調査は原則として、２ｍ×２ｍのトレンチ（試掘坑）を20ｍ間隔で碁盤目状に、また農道・林道等、調査対象地区が狭い場合はほぼ等間隔に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、範囲などを調査した。

(3)　農林業基盤整備事業等と文化財保護に関する協議

確認調査を実施した結果、佐賀東部地区で3,700㎡、佐賀西部地区で128,560㎡、佐賀南部地区では０㎡、佐賀北部地区で1,900㎡、佐賀上場地区で500㎡の合計134,660㎡の遺跡の広がりが確認された。内容としては弥生時代～近世の集落、弥生時代の甕棺墓地、古墳時代前期～中期の大型円墳、古墳時代後期の前方後円墳を確認した他、特筆すべきものとして近代以降の炭窯の調査を行った。平成12年12月18日には「平成13年度農林業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第２回協議会」を開催し、確認調査の結果をもとに、文化財の保存について工事計画との調整を計った。このうちほ場整備等においては盛土による保存、農道・林道・用排水路等については路線の変更により遺跡の保存に努めたが、設計変更によっても保存が不可能なものについては、協議の上、工事実施前に記録保存の措置を取ることとした。この結果、平成13年度以降に本発掘調査を実施することとなったのは、佐賀東部地区で1,000㎡（神埼町）、佐賀西部地区で12,309㎡（佐賀市・小城町・三日月町）、佐賀上場地区（唐津市）で2,800㎡の合計16,109㎡である。また確認調査の結果遺構が確認されたものの、工事計画における設計変更

等により遺跡の保存を図ったものとしては、東脊振村佐賀東部地区（古墳時代後期の前方後円墳）・浜玉町ひれふり地区（古墳時代前期～中期の大型円墳）など計約2,000㎡である。この他、東脊振村九千部山横断線施工地区では中世以降の古道（800㎡）、相知町帆柱地区では近代以降の炭窯（100㎡）を確認したが、遺構の内容を鑑み、確認調査の範囲で記録保存を実施している。

２．平成11・12年度嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査

嘉瀬川ダムは嘉瀬川水系嘉瀬川に計画されている多目的ダムであり、その開発対象地全体が佐賀郡富士町内に含まれ、事業主体は国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所である。ダムサイトは佐賀郡富士町大字小副川（左岸）・畑瀬（右岸）の標高約205ｍの川床部分に設置されるもので、この地点より上流部の標高約304ｍ等高線で囲まれる約2.7㎢が最大湛水地区（水没地区）となる。この水没地区内には西畑瀬・東畑瀬・鷹ノ羽・小ケ倉・栗並・馬場・大串・大野・中原等の集落の全部または一部が含まれる他、ダム関連開発（代替地開発・道路整備・土捨場）などにより、多くの埋蔵文化財・民俗資料等が破壊・水没することが予想された。このうち、民俗・民俗芸能・建築物・石造物・文書資料については「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（米倉利昭 委員長［長崎純心大学人文学部教授］）」によって平成８～10年度にかけて学術調査が実施され、平成11年度には「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」[1]としてその成果がまとめられている。

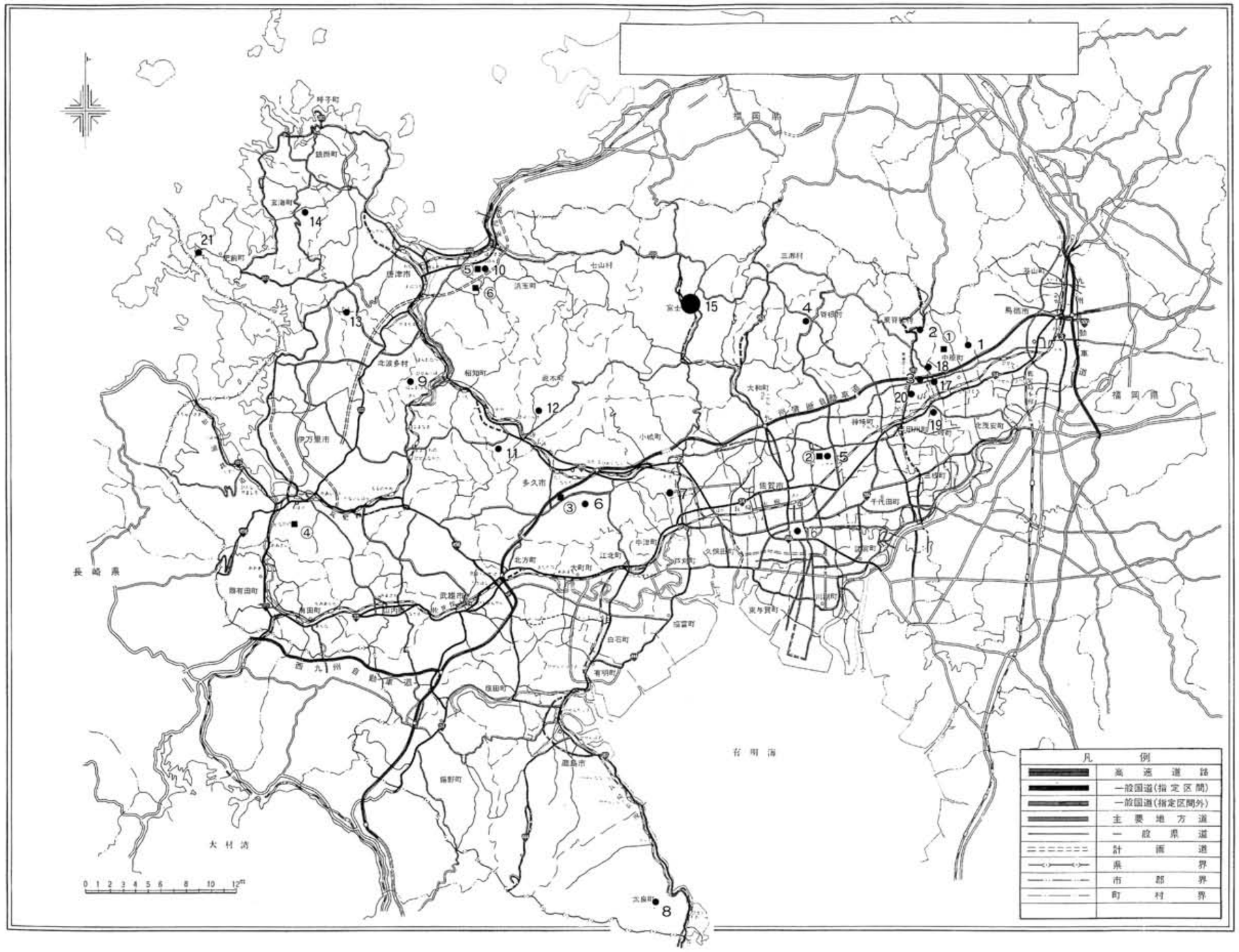
一方で埋蔵文化財については、富士町での過去の調査データがほとんどないため、事業実施に伴って埋蔵文化財にどの程度影響を及ぼすのかという点について早急に把握する必要が生じた。確認調査の実施にあたっては、平成10年度までは富士町教育委員会が調査主体となっていたが、事業量の増加を鑑み、平成11年度からは佐賀県教育委員会が調査主体となり、県内遺跡文化財確認調査費（国庫補助事業）により実施している。平成11年度は嘉瀬川ダムの開発対象面積404haのうち、水没地を中心とした約90haを、また12年度は約44.8haを調査対象に確認調査を行った。また、平成11年度にはダム建設に伴う国道323号付替工事により、大野地区に所在する大野代官所跡に工事の影響が及ぶおそれが生じたため、大野代官所の内容確認及び範囲確認を目的として周辺地形測量を委託により実施した。また、平成12年度には小副川地区のダムサイト予定地付近において、新たに近世期の水田遺構に関連すると思われる大規模な石積遺構が確認されたことから、遺構の内容及び範囲を把握するために周辺地形測量を委託により実施した。

註１）嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会編 2000「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」　富士町教育委員会

３．その他公共事業に伴う文化財確認調査

農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業以外の国・県主体の公共事業について、平成12年度は三養基郡上峰町、神埼郡東脊振村、佐賀市、東松浦郡肥前町の１市２町１村における各事業に伴い確認調査を実施した。このうち、上峰町では県道鳥栖・川久保線改良工事（0.48ha）、県道富士・中原三瀬線改良工事（0.14ha）、自衛隊目達原補給処内における施設建設（1.2ha）の３地区において、東脊振村では国道385号拡幅工事（650㎡）について、佐賀市では佐賀城公園造成（500㎡）について、また肥前町では鷹島肥前線橋梁工事（0.37ha）に伴いそれぞれ確認調査を行った。

確認調査の結果、東脊振村における国道385号拡幅工事に伴う調査では弥生～古墳時代にかけての溝跡・杭列等からなる水田関連遺構が検出され、約2.0haに及ぶ遺跡の広がりが確認された（三津前田遺跡）。このうち、工事の影響が及ぶ範囲については、遺跡の内容・残存状況等を鑑み、確認調査の範囲で記録保存を行った。また、



確認調査地区	**農林業基盤整備事業**
	佐賀東部地区
	1．中原町（九千部山横断線）
	2．東脊振村（九千部山横断線）
	3．東脊振村（佐賀東部地区）
	4．脊振村（背振地区）
	佐賀西部地区
	5．佐賀市（金立東部地区）
	6．多久市（瓦川内地区）
	7．小城町（佐賀西部導水路）
	佐賀南部地区
	8．太良町（多良岳２期地区）
	佐賀北部地区
	9．相知町（帆柱地区）
	10．浜玉町（ひれふり地区）
	11．厳木町（浪瀬地区）
	12．厳木町（浦川内地区）
	佐賀上場地区
	13．北波多村（釜蓋地区）
	14．玄海町（上場Ⅳ期地区）
	嘉瀬川ダム建設事業
	15．富士町（嘉瀬川ダム）
	その他公共事業
	16．佐賀市（佐賀城公園）
	17．上峰町（県道川久保鳥栖線）
	18．上峰町（県道中原三瀬線）
	19．上峰町（目達原補給処）
	20．東脊振村（国道385号）
	21．肥前町（鷹島架橋）

発掘調査遺跡	①鷹取山遺跡５・６区
	②石土井遺跡３・４・５・６区
	上九郎遺跡２区
	③八ツ溝遺跡
	④小木原遺跡
	⑤大岩西遺跡Ａ・Ｂ区
	⑥川頭遺跡

図１　平成12年度県内遺跡確認調査地区及び農林業基盤整備事業に伴う発掘調査地区位置図

表１　佐賀県内遺跡確認調査地区（平成12年度実施）

【農林業基盤整備事業に伴う文化財確認調査地区】

地　区	市町村名	工事地区名	所　在　地	確認調査対象	調　査　結　果	担当者	備　考
佐賀東部地区	中原町	九千部山横断線	三養基郡中原町大字簑原	延長　200m	古道	太田	周知外
	東脊振村	九千部山横断線	神埼郡東脊振村大字松隈字九瀬谷	0.6ha	古道、土師器杯、須恵器甕	市川	筑前街道（尾立の坂）
	東脊振村	佐賀東部	神埼郡東脊振村大字石動字四本松	延長　1,800m	古墳時代後期の前方後円墳、中期の竪穴住居跡	市川・古川	石動四本松遺跡
	脊振村	脊振	神埼郡脊振村大字服巻字苗代田	延長　340m	中世～近世の土師器片	武谷	大作遺跡隣接地
佐賀西部地区	佐賀市	金立東部	佐賀市金立町大字薬師丸字四本柳ほか	19.0ha	弥生時代～中世の集落跡	木島・西田	上九郎遺跡ほか
	多久市	瓦川内	多久市南多久町大字長尾字瓦川内	4.0ha	サヌカイト剥片、遺構なし	岩永・古川・市川	周知外
	小城町	佐賀西部導水路	小城郡小城町大字畑田字轡ケ里	0.4ha	弥生時代～中世の小穴・土坑	古庄	久蘇遺跡
佐賀南部地区	太良町	多良岳２期	藤津郡太良町大字大浦字長川良	路床工　480m	遺構・遺物なし	市川	周知外
佐賀北部地区	相知町	帆柱	相知町大字佐里字国有林	延長　400m	近代以降の炭窯	黒田・徳富・古川	未周知
	浜玉町	ひれふり	浜玉町大字横田下字鳥越ほか	12.5ha	古墳時代前期～中期の円墳	市川	小山田古墳
	厳木町	浪瀬	東松浦郡厳木町大字浪瀬	1.3ha	黒曜石、近代以降の染付・瓦、遺構なし	坂井・市川	周知外
	厳木町	浦川内	東松浦郡厳木町大字浦川内	1.9ha	小穴、近世以降の陶磁器	坂井・市川	周知外
佐賀上場地区	玄海町	寺の上（上場Ⅳ期）	東松浦郡玄海町大字寺ノ上	0.52ha	遺構・遺物なし	有光	寺の上遺跡
	北波多村	釜蓋（上場Ⅲ期）	東松浦郡北波多村大字成渕字釜蓋	8.0ha	黒曜石、近代陶磁器、遺構なし	陣内	未周知

【その他公共事業に伴う文化財確認調査地区】

地　区	市町村名	工事地区名	所　在　地	確認調査対象	調　査　結　果	担当者	備　考
佐賀東部地区	上峰町	県道鳥栖・川久保線	三養基郡上峰町大字堤	0.48ha	遺構・遺物なし	原田	屋形原遺跡
		県道富士・中原三瀬線	三養基郡上峰町大字堤	0.14ha	遺構・遺物なし	原田	周知外
		自衛隊目達原補給処	三養基郡上峰町大字坊所	1.2ha	遺構・遺物なし	原田	目達原古墳群
	東脊振村	国道385号拡幅	神埼郡東脊振村大字三津	650㎡	溝状遺構・杭列、弥生～古墳時代の土器	久保	三津前田遺跡
佐賀西部地区	佐賀市	佐賀城公園造成	佐賀市城内２丁目	500㎡	石垣・木樋・石組水路、瓦・陶磁器	西田・五島	佐賀城跡
佐賀上場地区	肥前町	鷹島肥前線橋梁	東松浦郡肥前町大字星賀乙	0.37ha	遺構なし、陶器片１	藤井	周知外

佐賀市の佐賀城公園造成に伴う内容確認調査は公園計画との調整を図ることを目的としたもので、主に佐賀城本丸跡西側石垣下部構造についての把握を試みた。その結果、石垣下部より新たに木樋や胴木を検出した他、土塁の規模や櫓台の構造についても調査を実施した。

4．調査組織

平成12年度

調査主体　佐賀県教育委員会

総　括

局　長　佛坂　勝男　県文化財課課長

次　長　大橋　康二　県文化財課参事　　東島　桂子　県文化財課副課長　　東中川忠美　県文化財課副課長

庶　務

津野　建夫　県文化課庶務係専門員　　相川ミエ子　県文化課庶務係主査

毎熊　　近　県文化課庶務係主事　　陶山　　優　県文化課庶務係主事

調　査

調査総括　西田　和己　県文化財課管理・指導班企画調整主査

徳富　則久　県文化財課管理・指導班企画調整主査

松尾　吉高　県文化財課調査班企画調整主査

調査主任　市川　浩文　県文化財課管理・指導班文化財保護主事

調査員　樋口　秀信　県文化財課調査班主査

五島　昌也　県文化財課管理・指導班主査

武谷　和彦　県文化財課管理・指導班文化財保護主事

古川　直樹　県文化財課管理・指導班指導主事

木島　慎治　佐賀市教育委員会　　西田　　巌　佐賀市教育委員会

岩永　雅彦　多久市教育委員会　　久保　伸洋　東脊振村教育委員会

太田　　睦　中原町教育委員会　　原田　大介　上峰町教育委員会

古庄　秀樹　小城町教育委員会　　坂井　清春　厳木町教育委員会

黒田　裕一　相知町教育委員会　　陣内　康光　北波多村教育委員会

藤井　浩司　肥前町教育委員会　　有光　宏之　玄海町教育委員会

調査協力　佐賀市教育委員会　　富士町教育委員会　　小城町教育委員会

唐津市教育委員会　　三田川町教育委員会　　三日月町教育委員会

鳥栖市教育委員会　　千代田町教育委員会　　牛津町教育委員会

多久市教育委員会　　東脊振村教育委員会　　芦刈町教育委員会

伊万里市教育委員会　　脊振村教育委員会　　浜玉町教育委員会

武雄市教育委員会　　三瀬村教育委員会　　厳木町教育委員会

鹿島市教育委員会　　基山町教育委員会　　相知町教育委員会

川副町教育委員会　　中原町教育委員会　　北波多村教育委員会

久保田町教育委員会　北茂安町教育委員会　肥前町教育委員会
大和町教育委員会　上峰町教育委員会　玄海町教育委員会
鎮西町教育委員会　北方町教育委員会　太良町教育委員会
有田町教育委員会　大町町教育委員会　塩田町教育委員会
西有田町教育委員会　有明町教育委員会　嬉野町教育委員会

（農林業基盤整備事業）

九州農政局筑後川下流農業水利事務所
九州農政局佐賀中部農地防災事業所
佐賀中部農林事務所
鳥栖農林事務所
武雄農林事務所
鹿島農林事務所
伊万里農林事務所
唐津農林事務所
各市町村農林担当課

（その他公共事業）

陸上自衛隊目達原駐屯地九州補給処
佐賀土木事務所
唐津土木事務所
鳥栖土木事務所

（嘉瀬川ダム建設事業）

国土交通省九州地方建設局
嘉瀬川ダム工事事務所

地元各位

調査指導　北野　隆　熊本大学工学部環境システム工学科教授

II．平成12年度文化財確認調査の概要

［1］農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査

1．佐賀東部地区の調査

(1) 中原町

調査対象地区名　広域基幹林道九千部山横断線

調査対象地遺跡名　周 知 外

調査対象地所在地　三養基郡中原町大字蓑原

調査対象面積　延長 200m（2,000㎡）

調査対象地区の立地　脊振山系のうち、鳥栖市及び福岡県那珂川町との境にあたる石谷山（標高754.4m）から南に派生する山陵尾根上の標高約300～320mの範囲に位置し、この尾根上の稜線が鳥栖市の市町境となっている。山稜尾根筋は狭く平坦地に乏しく、東西方向は比較的急峻な斜面となっている。現況は山林である。

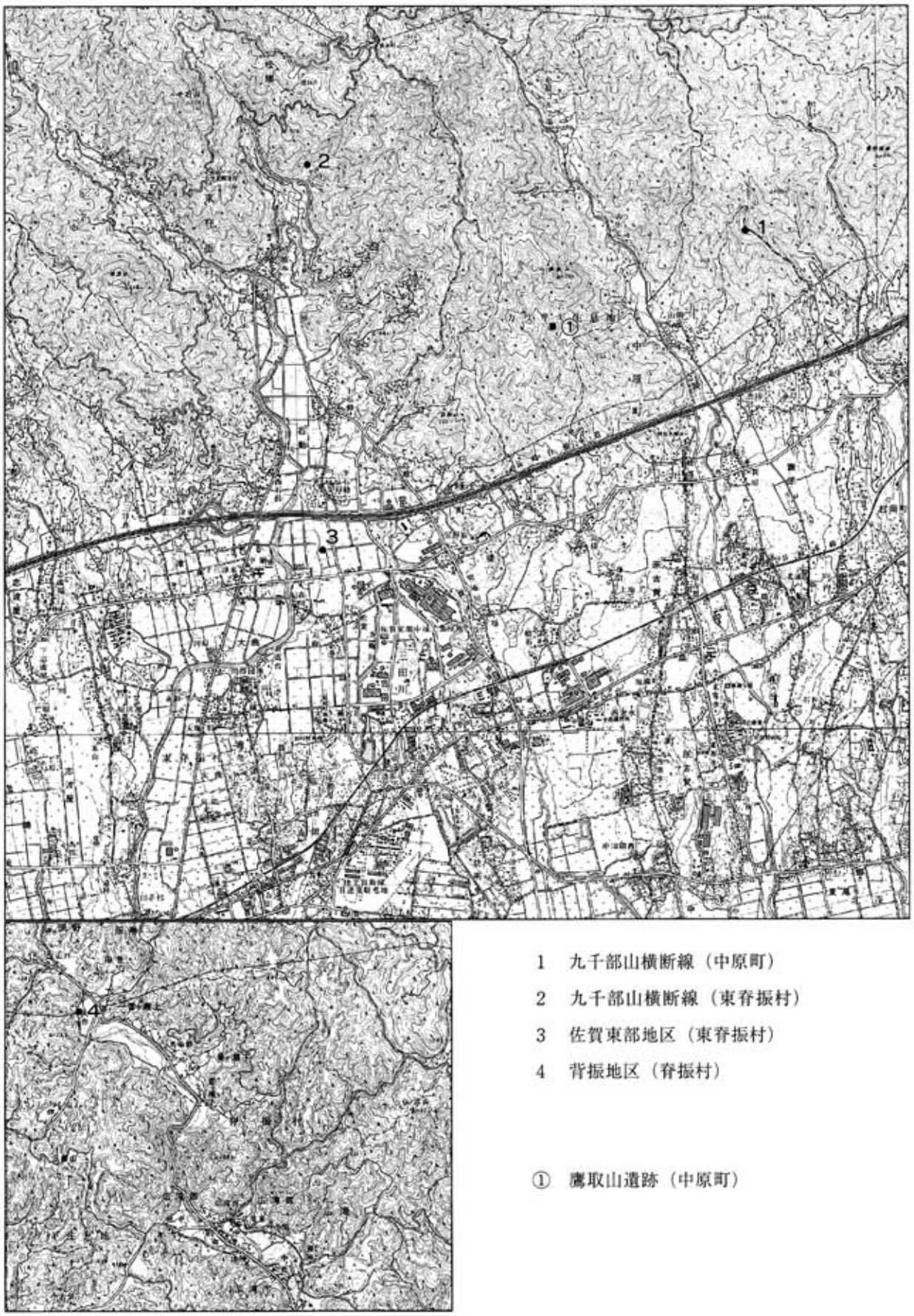
周辺の遺跡及び内容　調査対象地周辺では遺跡の存在は知られておらず、城・砦跡等の伝承も聞かれないが、広域な踏査は実施されておらず、文化財の有無について十分把握されていないのが現状である。

九千部山横断線に伴う発掘調査としては、本調査対象地がある山稜と寒水川を挟んで西側に対峙する鷹取山南麓において、平成10～12年度に中原町教育委員会によって鷹取山遺跡Ⅰ～Ⅵ区の調査が実施されている。このうち、平成11年度に実施された鷹取山遺跡Ⅲ区・Ⅳ区では中世山城である鷹取山城に関連すると思われる通路・土塁・焼土壙等が確認されている。また平成12年度の鷹取山遺跡Ⅴ区・Ⅵ区の調査では、Ⅴ区より土壙・小穴・溝状遺構が、またⅥ区では通路及び人工的な平坦面が検出されている。いずれも、鷹取山山頂（403.5m）を中心とした戦国期の山城、鷹取山城に関連する遺構と考えられる。

また、平成10年度に発掘調査が実施された鷹取山遺跡Ⅰ区では８～９世紀にかけての土壙・焼土壙・通路状遺構及び大規模な造成面が確認されているが、標高220m以上の高所における当該期の遺構としては稀有な例と言える。その性格としては祭祀あるいは烽火関連の遺跡が想定されるものの今のところ不明であるが、従来発掘調査が行われなかった山間地での調査成果が増えつつあり興味深い。

調査方法及び内容　調査は林道本線のほか、土羽・切土部分を対象に行った。調査開始前の踏査では古墳及び山城に関連する土塁・堀・曲輪等については全く観察されなかったが、山裾から尾根上に向かって延びる切通し状の道が続いているのが確認された。この切通し状の道は、中原町側の谷部からＳ字状に周り込みながら斜面を登り、尾根筋まで出た後は、町市境と重複しながら尾根上を北側に走っている。確認調査にあたっては、道の性格・時期について明らかにするため、道筋について計７本のトレンチを設定し、人力にて掘削を行った。調査の結果、№４，６，７トレンチで現況より深い掘り込みが確認され、現在が埋没した状態であり、当初はかなり掘り窪めてあったことが明らかとなった一方、№５トレンチでは人為的に盛土を行い、道に沿って土塁状の高まりを作っていることが確認された。しかし、各トレンチでも出土遺物は検出されず、町石（ちょういし）等の石塔類についても発見されなかった。

所　　見　確認調査を実施した範囲ではこの切り通し状の道の性格・時期等についての手掛かりとなる資料は得られなかった。また、調査対象地と石谷山の間では寺院・神社がかつて存在していたとする伝承等も知られてお



1　九千部山横断線（中原町）

2　九千部山横断線（東脊振村）

3　佐賀東部地区（東脊振村）

4　背振地区（脊振村）

①　鷹取山遺跡（中原町）

図2　佐賀東部地区調査地位置図（1/50,000）

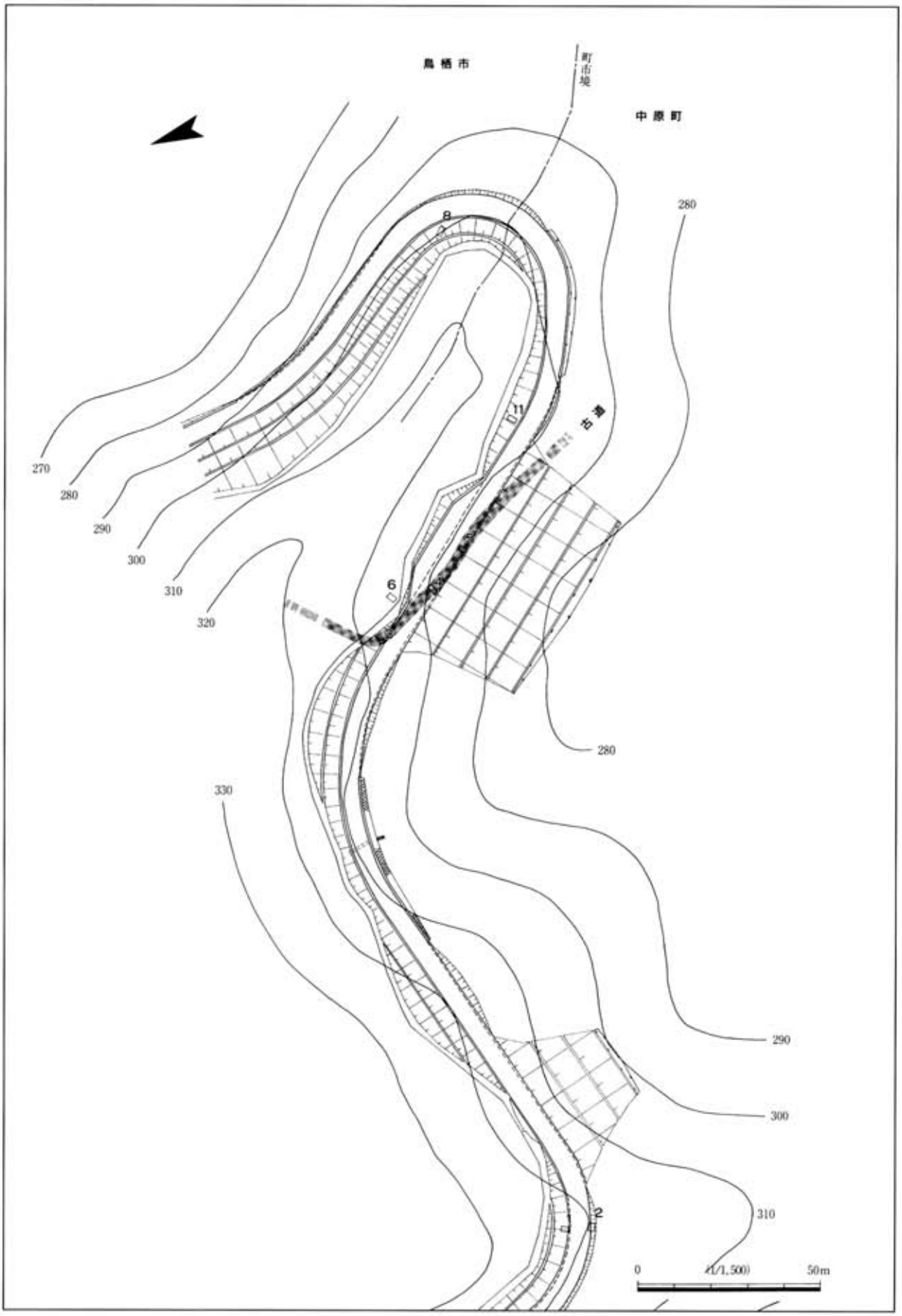
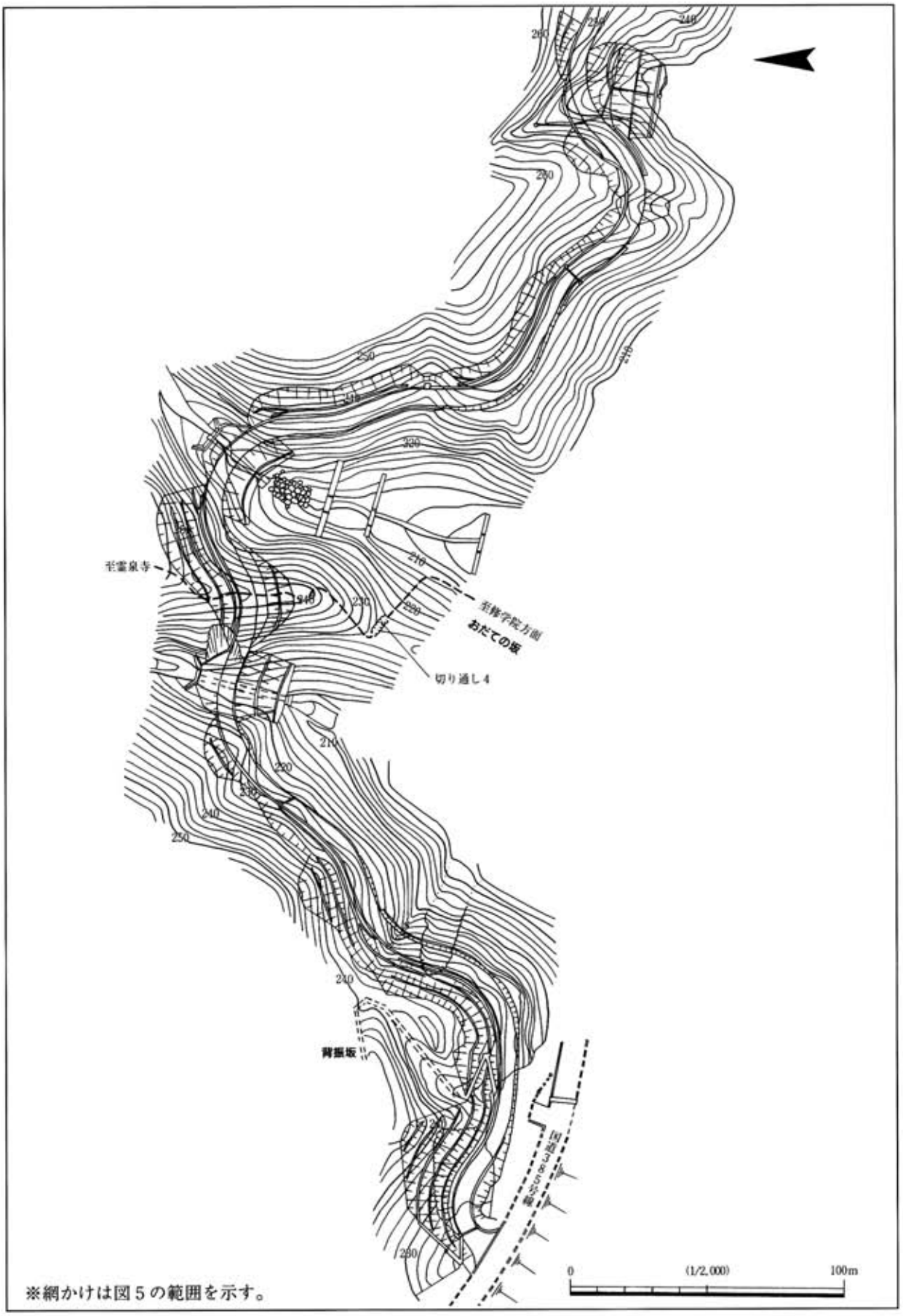


図３　中原町：九千部山横断線トレンチ配置図



※網かけは図５の範囲を示す。

図４　東脊振村：九千部山横断線調査区位置図

らず、参道としての位置付けも現段階では考えられない。ただ、この尾根筋は旧三養基郡と三根郡の郡境にあたり、郡境を示す道とも想定できないこともない。いずれにしても広域な踏査を実施した上で判断を行う必要があろう。

(2) 東脊振村

調査対象地区名　広域基幹林道九千部山横断線

調査対象地遺跡名　筑前街道（尾立の坂）

調査対象地所在地　神埼郡東脊振村大字松隈字九瀬谷

調査対象面積　0.6ha

調査対象地区の立地　対象地は東脊振村の北部、蛤岳（862.8m）から南東側に派生して延びる丘陵地帯から、田手川によって開析された扇状地性平野へと続く尾根上標高約230～250mの地点である。周辺部は急峻な尾根と深い谷の連続する山間地であり、通常の集落遺跡等が存在し得る平坦地は皆無であるが、今回の調査地点から北方約1kmには古代末から近世にかけての山岳密教寺院「霊仙寺跡（りょうせんじ、背振山中宮跡）」が位置している。

周辺の遺跡及び内容　脊振山は古くから霊山とされ広く信仰を集めており、山岳仏教に関連する遺跡が各所に分布しているが、特に霊仙寺は脊振山における台密系仏僧・修験者の活動の最大拠点であったとされている。昭和53・54年度には重要遺跡確認調査により、遺跡の内容・範囲の確認を目的として確認調査が実施され[1]、坊跡と思われる礎石建物跡・経塚・墓地などの遺構や、瓦経・陶製経筒・和鏡・蔵骨器などの輸入陶磁器が多数出土している。出土遺物の時期幅は12世紀中頃～13世紀末までのものが中心であったが、文献資料から推し量れば、ほぼ13～14世紀が霊仙寺を中心とした脊振山全体の活動が最も盛んな頃であったと考えられる。南北朝期以降から中世末期にかけては、度重なる兵火や所領没収により一時荒廃を極めたが、近世初頭より鍋島家の庇護のもと復興し、脊振山下宮として「修学院」が現在の坂本の集落に開かれている。

肥前側より修学院・霊仙寺を経て、坂本峠を介して筑前側へ至るルートとして、『正保四年肥前一国絵図』には「筑前街道」が記載されているが、これに該当するであろう現在まで残る山越え路として、「背振坂」及び「尾立（おだて）の坂」と呼称される古道が知られている。両者は霊仙寺へと続く東西に対峙した2つの尾根上を走る道で、いずれも道路が整備される最近まで小川内の集落へと続く日常生活道として利用されていたという。このうち、西側に位置する背振坂については、九千部山横断線により分断されることから平成6年度に確認調査と地形測量が実施され、切り通し状の通路についてトレンチ調査を実施したほか、「町石（ちょういし）」と呼ばれる道標が確認されている[2]。なお、この際今回の調査対象地である尾立の坂も含めて「筑前街道」として古道の周知化を図っている。なお、対象地の現況は全体が杉林及び雑木林である。

調査方法及び内容　調査対象地は南北に延びる痩せ尾根で、広域林道はこの尾根を東西約65mで開削するものである。現況では尾根上を南北に通路（道）が走っており、通路の形態に合わせ、便宜的に北側より、**切り通し1**、**尾根すじ上の通路**、**切り通し2**、**犬走り状通路**、**切り通し3**と呼称した。また、調査対象地外であるが、切り通し3から約20m程尾根を下った地点には、東側の谷部斜面に向かって尾根上から中世山城の竪掘のように、約30mの長さで真っ直ぐに延びる切り通し（**切り通し4**）が見られる。

切り通し4から直角に折れて尾根すじのやや南寄りを登ってきた通路は、尾根の傾斜が緩やかになる地点で花崗岩の露頭にぶつかるため、この露頭を西側から迂回するように**切り通し3**を経て尾根すじの西寄りに抜ける。

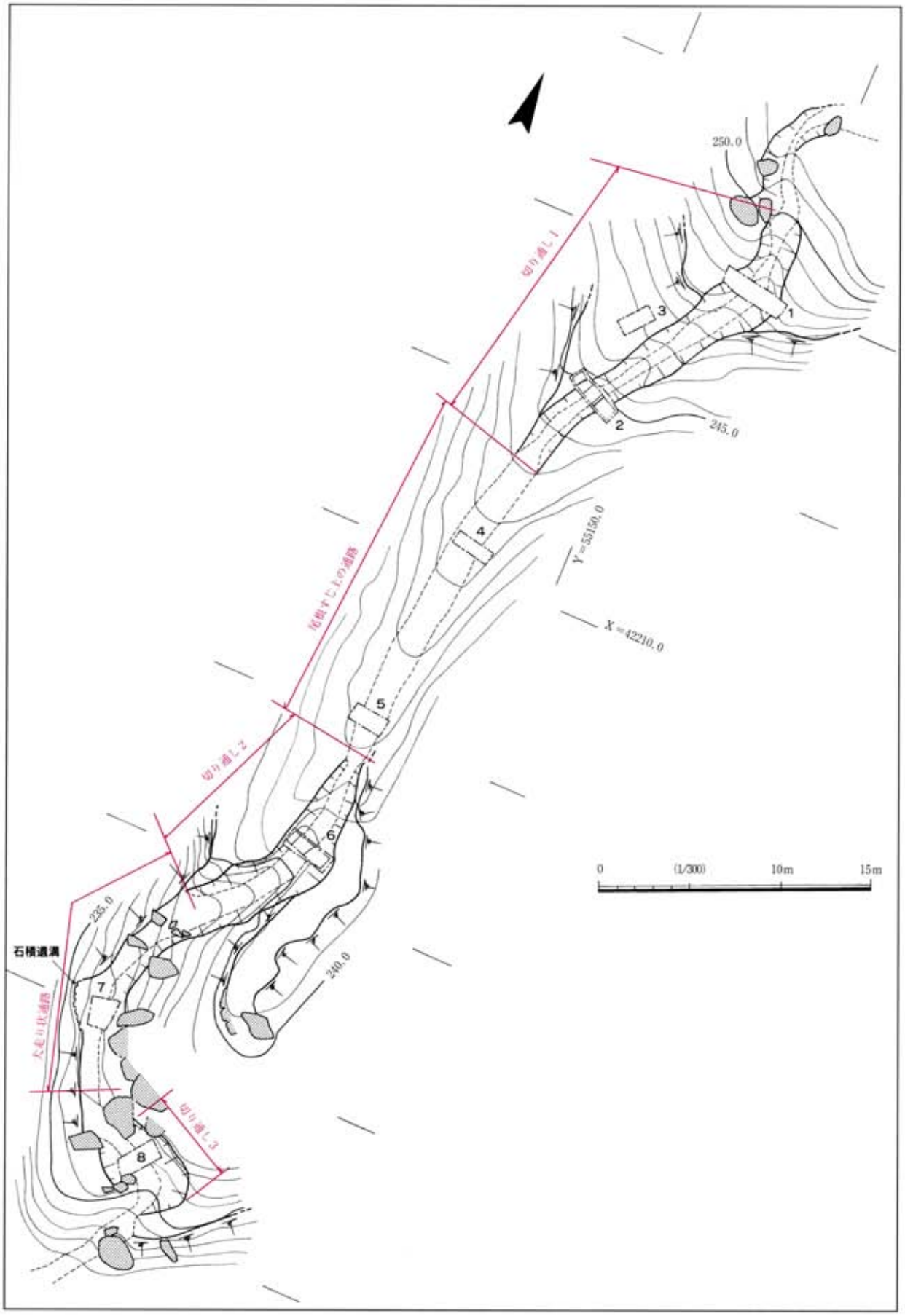


図5　九千部山横断線調査区地形測量図

調査対象地近景（西より）

切り通し１（南より）

屋根すじ上通路（北より）

切り通し２（北より）

切り通し３（東より）

No.1トレンチ北壁掘り込み検出状況

背振坂に残る町石（五町石）

図版５　九千部山横断線（東脊振村）

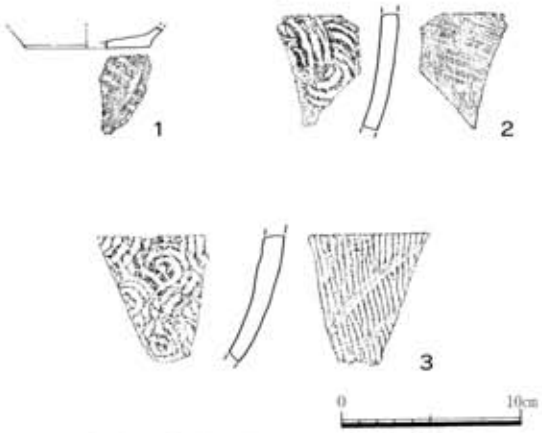


図６　表採及びトレンチ出土遺物

その後急峻な斜面に僅かな幅の平坦地を設けた**犬走り状通路**をつたって、**切り通し２**を経て尾根上に至るが、この**切り通し２**については露頭を避けながら尾根上にスムーズに登るために設けられたものと推定される。**尾根すじ上の通路**としたものは特に掘り込み等を伴うものではないが、幅1.5～1.7m程の平坦地となっており、通路として歩きやすいように整形されているようである。

尾根すじ上の通路から北側にかけては徐々に勾配が急になり、再び花崗岩の露頭へと続くが、通路は掘り込みを伴いながら緩やかな傾斜をもって登って行き（**切り通し１**）、岩盤露頭に西側を迂回しながら尾根すじを辿ってさらに北方の山中へ延びて行く。

このように通路は急峻な斜面や岩盤露頭をうまく避けながら造られており、多くの荷物を抱えて登ることを考慮して、急な登り下りにならないような導線が考えられたものと思われる。

調査にあたっては、通路の構築法、造られた時期等の手掛かりを得ることを目的として８箇所に試掘坑を設定し、人力により掘り下げを行なった。また、工事実施により開削を受ける範囲の通路について、1／100の地形測量を実施した。

通路上に設定したトレンチのうち、各切り通しに配置した№１，２，６，８トレンチでは現況より深い掘り込みが見られ、このうち**切り通し１**に配置した№１トレンチでは地表面から－0.5m、№２トレンチでは－0.6m程掘り込まれていたことが明らかとなった。掘り込みは断面逆台形で、底面での幅は№１トレンチで約1.1m、№2トレンチでは約0.9mとなるが、**切り通し２・３**の底面では約１～1.5m、**尾根すじ上通路**では約1.5m、**犬走り状通路**では約1.5m幅が通路面として想定され、通路の平均的な幅としてほぼ1～1.5m程度が考えられる。№１，２トレンチでは掘り込みの両側に地山を掘削した土を左右に盛り上げて土塁状に高めてあるが、現在見られる掘り込みのラインはこの盛土を切っており、掘り込みが複数回行なわれたものと考えられる。**切り通し２**には№６トレンチを設定したが、この付近は現況でも深さ1.5m以上の切り通しとなっており、土層断面観察の結果、掘り込んだ際の排土のほとんどを谷側に盛り上げているようである。また、**切り通し３**は深さ２m近くを測り、当初は花崗岩露頭を打ち欠いているものと予想されたが、№８トレンチにおいて観察した結果、花崗岩露頭と露頭の間に見られる軟質の花崗岩風化土を選んで掘り下げていることが明らかとなっている。

一方、**尾根すじ上の通路**に設定した№４，５トレンチでは掘り込み・盛土等は観察されなかったが、尾根すじ上全体が一定幅で平坦面をなしており、通行しやすいよう、人為的に平坦に整えているものと考えられる。また、**切り通し２・３**を繋ぐ部分は傾斜面に段を設けて通路としているが（**犬走り状通路**）、通路幅を確保するためか、一部谷側に３段程の低い石積みを築いて盛土を行なっているようである。

出土遺物については、山間地ということもあり確認できる可能性については低いものと予想していたが、トレンチ調査の結果、№４トレンチで土師器小皿片１点、№８トレンチで須恵器甕の破片２点が表土中から出土した他、№５トレンチ付近で須恵器甕の破片１点が表採されている。図６の**１**は№４トレンチ出土の土師器小皿片で、復元底径7.0cm、残存器高1.2cm、底部底面は糸切り離しで、色調は黄橙色を呈し、胎土は精製されている。13～14世紀前半の所産。**２，３**は須恵器の甕胴部片と思われ、**２**が№８トレンチ出土、**３**が№５トレンチ付近表採である。いずれも外面は平行叩き目、内面には青海波文の当て具痕を摺り消さずに残している。色調は暗灰色、胎土中に砂粒を少量含んでいる。６世紀後半～７世紀の所産。

所　見　トレンチ調査の結果、切り通し部分では現況通路底面よりさらに深い掘り込みが観察され、掘り直しが行なわれていることも明らかとなった。こういった掘り込みを設けた理由としては、周辺の地形の傾斜が急にきつくなる部分において、登り道の勾配を出来るだけ押さえるための工夫と考えられる。また、切り通しを設け

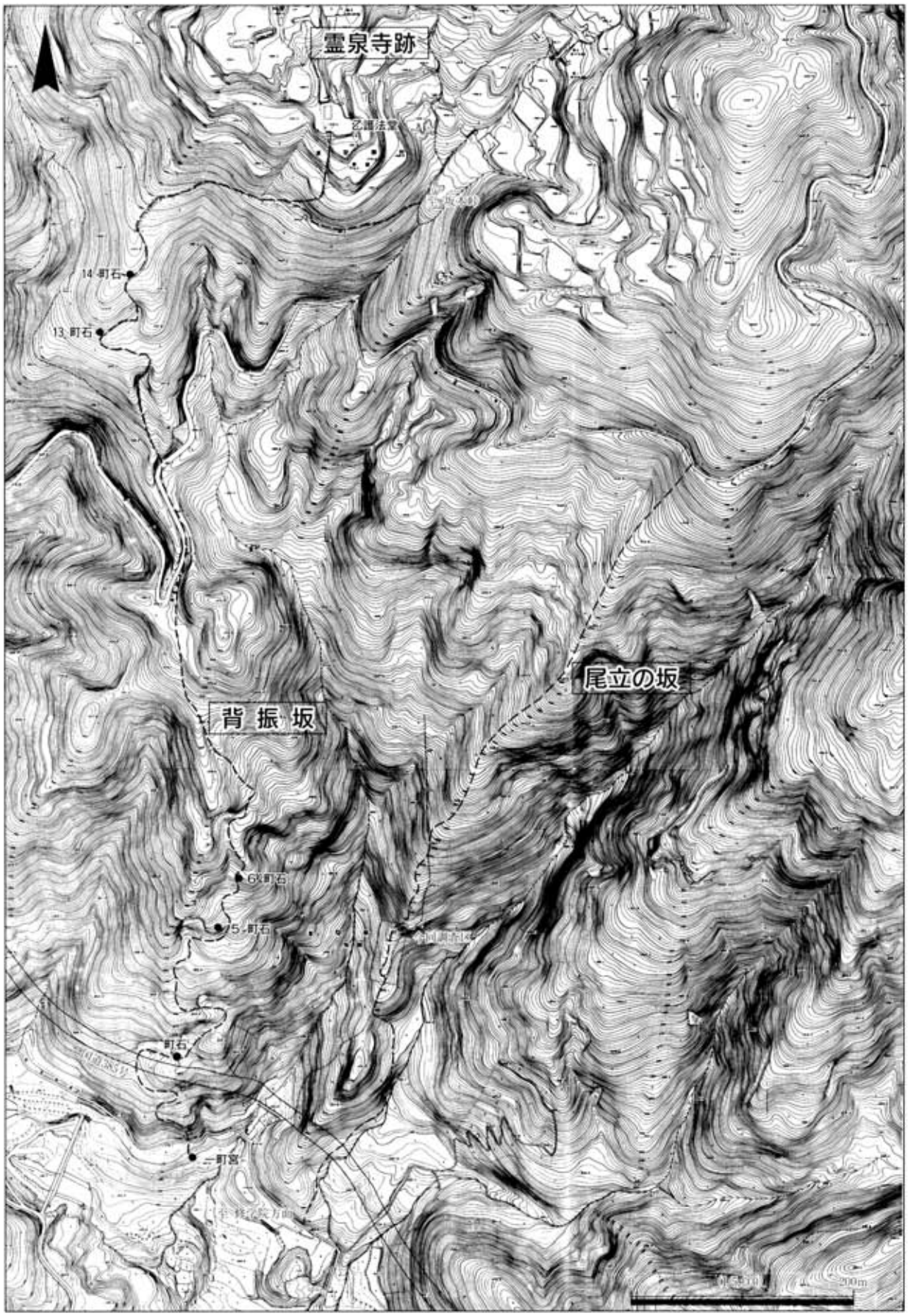


図7　筑前街道推定路線図　（※東脊振村教育委員会作成図に一部加筆）

る際も、花崗岩露頭を避け、掘り易い花崗岩風化土壌を選んで開削しており、ルートの選定にあたっては、負担の出来るだけ少ない場所を通るよう、配慮がなされている。このような切り通しは「背振坂」においても多く見られるが、「背振坂」の切り通しはかなり大規模で、大きなところでは、深さ約３ｍ、上端の幅約10ｍ、切り通し底面の幅約５ｍで、往来の人が楽にすれ違うことができる程の幅を持つ。

出土遺物のうち、土師器小皿については霊仙寺が最も栄えた時期の所産であり時期的に齟齬はないが、表土からの出土であり、掘り込みが行われた時期を直接的に示すものではない。しかし、当該地において中世段階の活動の痕跡を確認できたことにより、この尾根上が霊仙寺、あるいは背振山、筑前へのルートのひとつとして利用されていた可能性が指摘できる。前述のとおり、切り通しでは掘り込みが複数回行なわれたことが想像され、掘り直しなどの改修を繰り返しながら現代に至るまで使用されてきたものであろう。ただ、今回、調査区外についても、一部踏査を実施したが、町石や石仏等については確認できなかった。町石の筑前街道（背振坂）への設置は、修学院の文書、あるいは町石の銘文から寛永10年（1633）と推定され、少なくとも霊仙寺の復興がなされた近世初頭以降については背振坂の方が筑前街道の主要ルートとして機能していたものと思われる。特に霊仙寺への参道としての導線を考えた場合には、背振坂の方が、護法善神を祭る乙護法堂の前面を介して、中宮の中心的坊であった水上（みなかみ）坊に続く最短の道程であり、また前述したように切り通し等の規模は背振坂の方が格段に大きいことからも、尾立の坂については近世期においては裏道的な用途が主であったと想像される。しかし、その一方、坂本峠を越えて筑前へと抜ける際には尾立の坂の方が明らかに近道であり、国道385号が整備される前までは尾立の坂の方が頻繁に往来があったという。また、天正７年（1579）には多くの龍造寺勢の陣馬が大内勢との戦のため坂本峠を越えたとされており、そのルートとして尾立の坂を登って行ったことは想像に難くない。恐らくは「背振坂」、「尾立の坂」共に時代毎の多寡はあれど、肥前と筑前を結ぶ道として絶えず利用され、近世期には霊仙寺への参道としての性格から「背振坂」へのみ町石が置かれたものと考えられよう。

なお、今回の確認調査では古墳時代後期の須恵器甕が採集されている。当該地付近では古墳は認められないため、採集等の生業に伴うものとも思われるが、生活色の強い土師器ではなく須恵器である点や、花崗岩の露頭周辺で確認されていることから、祭祀的な意味合いも考える必要があろう。

註１）田平徳栄 1980　『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会

２）西田和己 編1996　『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書14』　佐賀県文化財調査報告書第130集　佐賀県教育委員会

調査対象地区名　県営かんがい排水事業　佐賀東部地区

調査対象地遺跡名　石動（いしなり）四本松遺跡４区

調査対象地所在地　神埼郡東脊振村大字石動字四本松

調査対象面積　延長 1,800ｍ（調査面積 180㎡）

調査対象地区の立地　田手川によって形成された河岸段丘上、標高35～36ｍに位置し、現況は昭和60年代前半に実施されたほ場整備に伴い、段丘上全体が水田化されている。地理学上では中位段丘上にあたり、調査対象地のすぐ西側は比高差７ｍをもって一段低く低位段丘となっており、反対に東側では背振山系の丘陵地帯から連続する高位段丘が走り、鳥栖・川久保線を越えて二塚山遺跡の立地する低丘陵地帯へと続いている。対象地周辺の耕地化は近世以前に遡り、段丘上の旧地形についてはほとんど明らかではない。

周辺の遺跡及び内容　対象地は佐賀平野における地域区分で見ると、城原川・田手川の二つの大きな河川流域に

図８　東脊振村：石動四本松遺跡４区位置図（上図1/50,000、下図1/10,000）

あり、律令期には神埼・三根郡に含まれる。この城原川・田手川流域は佐賀平野の中でも遺跡の分布密度が非常に高い地域のひとつであり、特に弥生時代から古墳時代にかけての重要遺跡が各所に見られる。地勢的には平野部へと伸びる低位・中位段丘上に吉野ヶ里遺跡をはじめとする主に弥生時代の大規模集落や古墳時代の前方後円墳が立地し、九州横断自動車道から北側の背振山系南麓丘陵部では径10m前後の群集墳が標高200mを越える付近まで見られるが、その他、段丘間の扇状地性低地上や、国道385号より南の沖積低地内の砂礫帯上でも当該期の遺跡は広く展開している。

古墳時代における城原川・田手川流域の様相について概要を述べると、まず古墳時代初頭には、吉野ケ里段丘上や田手川右岸域の丘陵地帯において、前方後方形周溝墓（吉野ヶ里遺跡）や低墳丘墓（西一本杉遺跡）が畿内系二重口縁壺を伴って見られる。その後、前期においては明確な首長墓は見られず、４世紀末頃に至って墳長24mの前方後円墳朝日ＳＴ06古墳（仿製鏡・石釧出土）が築造されるのみである。この地域で明確な首長墓系譜が認められるのは５世紀中頃に目達原段丘上に築造される上のびゅう塚古墳（墳長48m）からであり、それに続く目達原大塚古墳（５世紀後半、墳長55m）、塚山古墳（５世紀末、墳長55m）、稲荷塚古墳（６世紀前半、墳長50m）などの前方後円墳と、墳径35mの円墳、古稲荷塚古墳（６世紀初頭）からなる目達原古墳群が６世紀前半まで継続する。その後、６世紀中頃から後半にかけては、目達原古墳群の北西約3.5km離れた志波屋地区において、下三津西古墳（墳長53m）、伊勢塚古墳（墳長80m）の２基の前方後円墳が作られ、当該地域における首長墳の連続性としては、目達原古墳群から下三津西・伊勢塚古墳からなる志波屋古墳群へと移行したと見るのが今のところの解釈である。今回、石動四本松遺跡４区の確認調査に伴い、円筒埴輪・形象埴輪を伴う墳長50mに及ぶ前方後円墳の存在が明らかとなったが、その位置は目達原・志波屋古墳群の両者から距離を置く、今まで首長墳の存在が予想されていなかった新たな地域と言える。

石動四本松遺跡４区の周辺では、その北方を東西に走る九州横断自動車道建設に伴い、下石動遺跡の調査が行われ、６世紀前半から後半の集落が確認されている（県教委実施）。また、同じく今回調査地点から北に200m離れた地点では、平成６年度に物流倉庫建設に伴い石動四本松遺跡（１区）[1]の調査が行われ（村教委実施）、弥生時代後期の墓地が確認された他、甕棺内より連弧文昭明鏡１面が玉類と共に出土している。その後、石動四本松遺跡１区の南側・南東側について重要遺跡確認調査が平成７（２区）[2]・８年度（３区）[3]に実施され、石棺墓・土壙墓等が確認されている。今回調査区は、石動四本松遺跡１～３区とは150m以上の距離を隔てており、その間ではほ場整備に伴う試掘調査以外行われておらず、一連の遺跡としての連続性の有無については不明である。また、ほ場整備の試掘調査を実施した際も、ほ場の大半が盛土工事であったことから部分的にしかトレンチ調査を行っておらず、今回調査地区周辺における埋蔵文化財の状況についてはほとんどわからない状況であった。

ただ、石動四本松遺跡1区の調査の折、地元の聞き取りにより、石動四本松遺跡１区の南方（距離不明）付近にかつて「フトツカ」[4]と呼称される区域があったとの話があり、「フトツカ＝太い（大きい）塚？」と解釈して、古墳あるいは墳丘墓の存在も、漠然と予想されてはいた。しかし、その際聞いた「フトツカ」の場所は、今回調査対象地からは100m程度北方にあたり、今回の調査着手時には「フトツカ」との関連性については全く考慮していない状況であった。

調査の経過　調査は佐賀中部農林事務所所管の平成12年度県営かんがい排水事業に伴うもので、工事の内容としては、ほ場整備後の現況農道を、道路面で幅約3.0m、深さ2.2m開削し、径40cmの導水管を埋設するものである。工事は西側の低位段丘面から先行して実施されており、段丘法面を斜めに上がって今回調査区とした農道を東西に走り、道路と接する地点で南に折れて鳥栖・川久保線方面へ延ばす計画である。平成12年10月に実施した調整

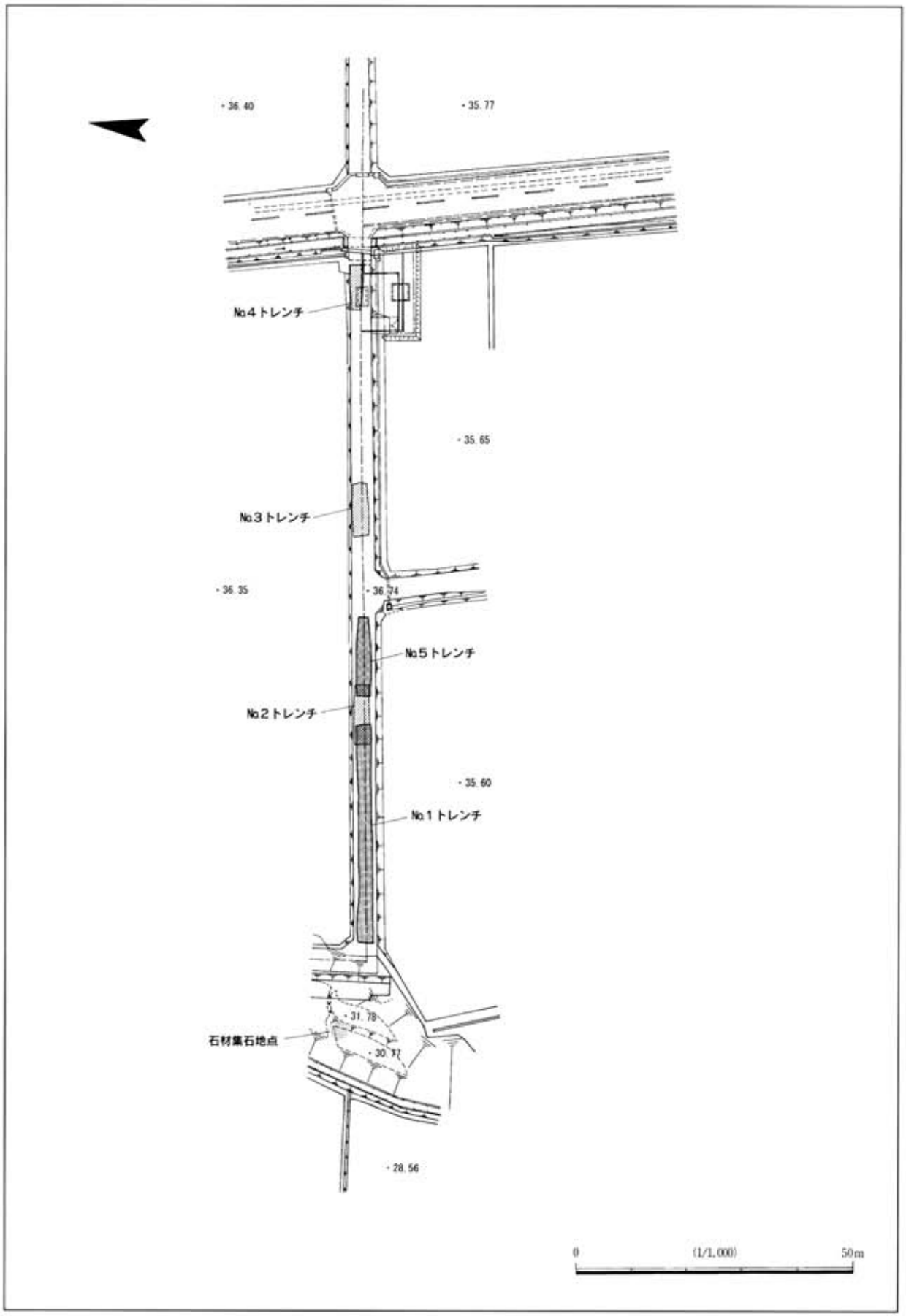


図9　東脊振村：佐賀東部地区トレンチ配置図

会議では、調査対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地「石動四本松遺跡」に含まれ、周辺ではほ場整備に伴う確認調査により一部で遺跡の存在が知られており、かつその北方では本調査を実施した石動四本松遺跡１区、あるいは下石動遺跡等が存在することから、工事実施にあたっては事前の確認調査が必要との協議を行った。しかし、当該地が常時農道として利用する状態にあることから、確認調査実施から工事着手時までの期間における農道復旧等の諸問題から、工事発注後に確認調査を実施し、遺構が確認された場合はその取扱いについて別途協議を行うこととなった。その後、工事の発注が11月末になされたことに伴い、12月６日から確認調査に着手した。

確認調査は東西に走る農道全体の延長125mを対象とし、当初は長さ10m、幅３mのトレンチを４本設定した。トレンチは西から東に向かって№１～№４トレンチとし、№１トレンチより黒色土を埋土とする溝跡、№３トレンチでほ場整備前の水路跡、№４トレンチで時期不明の褐色粘質土を埋土とする溝跡が確認された。このうち、№１トレンチでは円筒埴輪の破片が採集された他、溝跡埋土中に埴輪片が少量含まれていることから、古墳の周溝である可能性を考慮し、トレンチを東側に約15m延長して調査を行った。その結果、溝跡から多量の埴輪片と転落した葺石と思われる円礫が検出され、溝跡の平面形からも前方後円墳のくびれ部から前方部にかけての周溝である可能性が高まった（**ＳＤ211溝跡**）。これを受けて文化財課では、佐賀中部農林事務所に調査結果を報告すると共に、遺跡の重要性を鑑み、確認調査の期間延長について協力を求めた。さらに古墳としての規模・範囲を明らかとするため、空白地であった№２トレンチと№３トレンチの間に№５トレンチを設定し掘り下げたところ、同様に埴輪片を出土する溝跡が確認され、後円部の周溝の一部であると考えられた（**ＳＤ213溝跡**）。結果として、これらの溝跡の確認により、墳長50m前後に及ぶ前方後円墳（**ＳＴ217前方後円墳**）が、現況農道とほぼ主軸を平行に存在していたことが明らかとなり、遺構の保存について早急に協議を行う必要が生じた。農林部局との協議は12月後半より翌平成13年１月まで行われ、農林側からは、既に今回施工区の直前まで工事はほぼ終了しており、さらに周辺部には他に管路を回せる農道もないため、路線の変更は極めて困難との見解が示された。その一方、埋設管の深さについては若干の変更の余地があり、当面は遺構面の上に配管し、将来的な古墳の整備計画等の実施にあたっては、南側に移設することも可能との意見も出された。結果的に、路線の変更は行わずに管埋設に伴う床掘り高を標高35.6mに留めることとし、これにより前方部及び後円部の周溝は保存可能となったが、両者の間の地山面（後円部基底面）については、遺構検出面より－10cmから最大－20cmが削平を受けることとなった。なお、確認調査については、今後の調査に向けての資料を得ることを目的として、埴輪等の出土状況について1／10の詳細実測、及び全体の遺構実測図（1／20）作成、空中写真撮影を委託により実施し、合わせて土層図等の作成を行った。また、埴輪については円礫と混在していない、くびれ部付近等の埴輪片についてサンプルとして採集し、前方部周溝の埴輪・転落葺石については、シート敷設の上、現状のまま埋め戻しを行った。若干の実測作業を除き、調査は２月末日で終了した。

調査方法及び内容　調査にあたっては、道路面から遺構検出面直上まで掘削機により掘り下げ、遺構検出・掘削は作業員により実施した。調査区は、検出面での幅約2.5m、長さ59m（№１・２・５トレンチ全体）の狭長なものであり、トレンチを設定した農道が、ほ場整備の際に真砂土等の盛土により新設されたものであること、加えてトレンチ壁面が垂直なことなどから、常時、真砂土がトレンチ内に落ち込み、清掃等に手間を要した。また、天候も降雪・降雨の日が多く、調査区の排水作業もかなりの時間を割いている。なお、本調査区は過去の調査との連続性を考え、石動四本松遺跡「４区」とし、遺構番号についても前回調査分からの連番としている。以下にトレンチ別の調査状況について述べる。

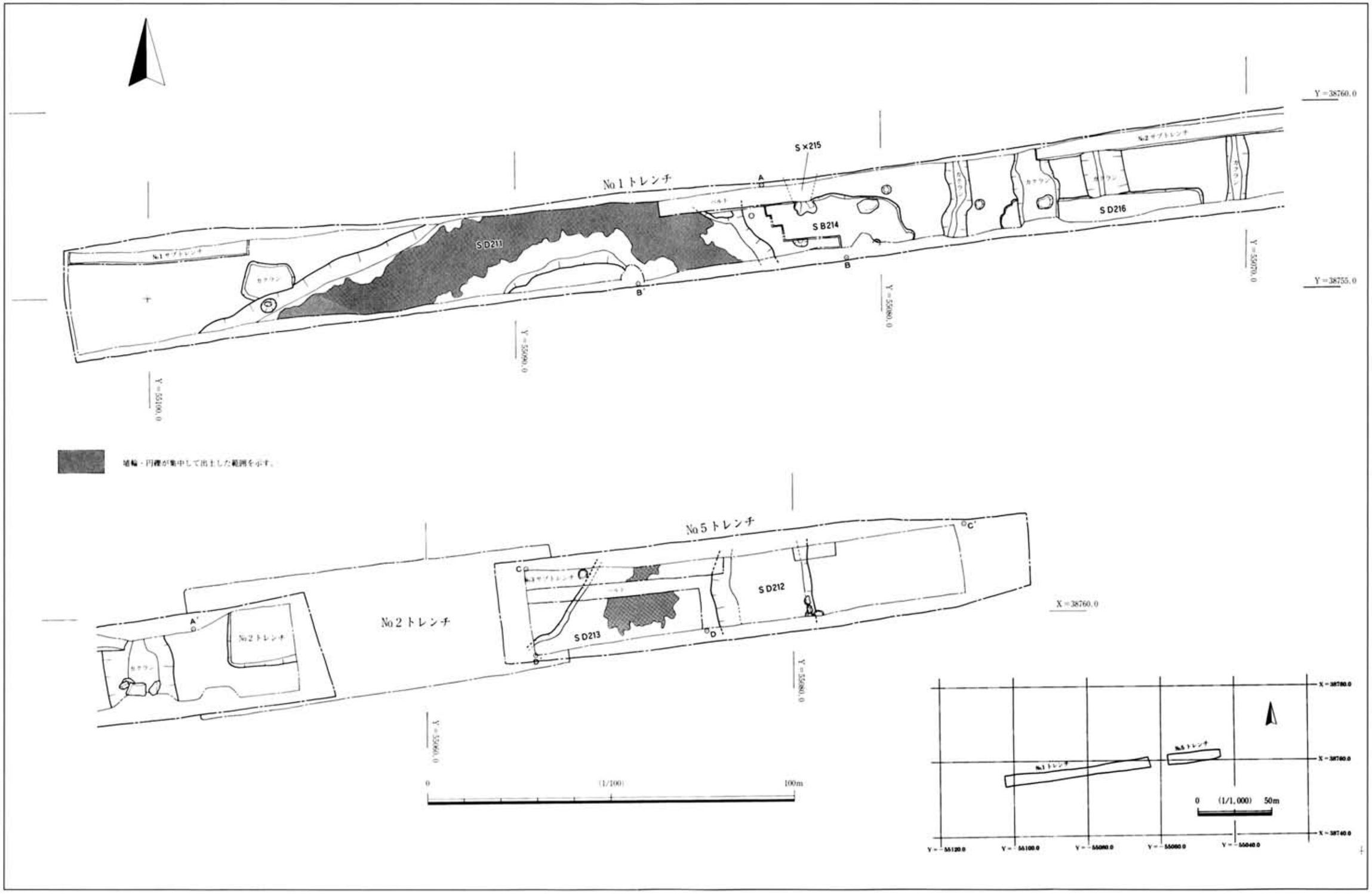


図10　石動四本松遺跡４区遺構配置図

図11　ＳＤ２１１溝跡埴輪出土状況

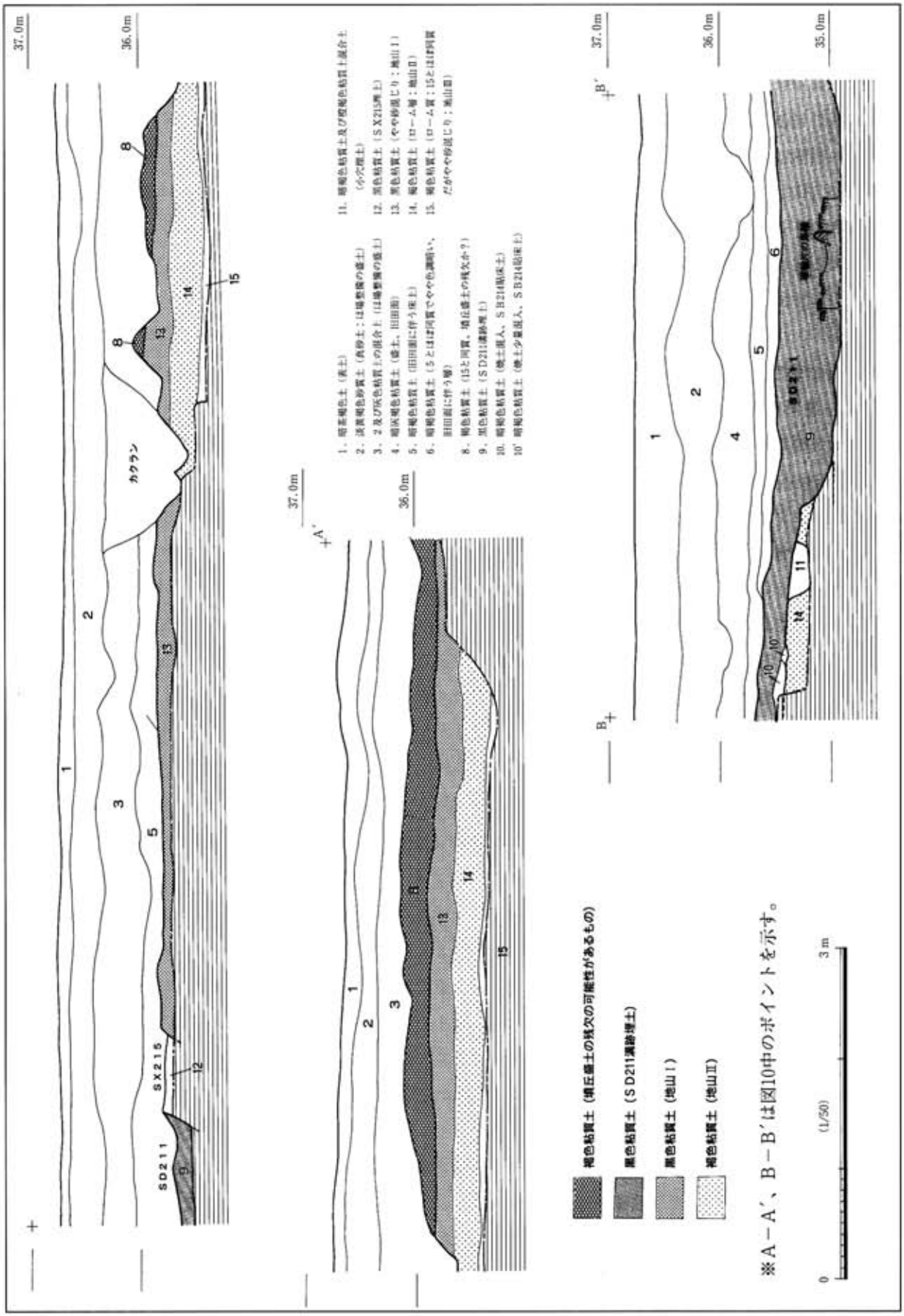


図12　No.1トレンチ土層図

① №１トレンチの調査

№１トレンチは、当初調査区西端から約10mの規模であったが、前述したように溝跡ＳＤ211の延長を確認するため、東側に約15m拡張した後、さらに№２トレンチとの空白地の状況を確認するため約15mを再延長し、最終的に長さ40m、幅3mの計120m²の規模となった。確認された遺構としては、調査区中央から西側にかけての範囲で前方後円墳のくびれ部から前方部にかけての周溝ＳＤ211、またＳＤ211とくびれ部付近で重複する古墳時代中期の竪穴住居跡ＳＢ214がある。その他、ＳＢ214とＳＤ211に切られる形でＳＸ215不明遺構が、またＳＢ214の東側約2.5mの位置でＳＸ216不明遺構が検出されている。なお、トレンチ内東側部分ではトレンチと直交して南北に走る溝状のカクラン（ほ場整備前の水田に関連する溝跡）が５条見られるが、それ以外に遺構は確認されていない。

土層　№１トレンチの土層は、まず0.1～0.2m程度の現況農道面（砂利敷）下に、真砂土が農道中央で厚さ0.2m、両端付近で厚さ最大0.8m程敷かれ、さらに客土である真砂土やコンクリートブロックの混入した灰色粘質土が厚さ0.2～最大0.8mで旧田面上、あるいは削平された地山面に盛土されている。№１トレンチにおいて旧田面はトレンチ南壁側で確認されており、くびれ部付近の土層図（図12）では、周溝埋土上に水田層が堆積し、さらに標高35.8m付近を基底面としてほ場整備の盛土が行なわれている状況が観察できる。一方、その反対側（北側）にあたるトレンチ壁面では、地山層である黒色粘質土（地山Ⅰ）の上面がほぼ標高35.8mで水平になっており、同様にほ場整備の際の切り土高が標高35.8mであったことが窺える。この黒色粘質土（地山Ⅰ）は石動四本松遺跡１～３区においても遺構検出面として確認されており、弥生時代以降の生活面として、この段丘上のほぼ全域で見られる層である。№１トレンチにおいても、確認された遺構はこの黒色粘質土上面で検出されている。なお、この地山Ⅰの下層は、厚さ20～30cmの漸移層（茶褐色粘質土：地山Ⅱ）を挟んでローム質の褐色粘質土（地山Ⅲ）となり、ＳＤ211・213とした古墳周溝は、この褐色粘質土層まで掘り込まれている。

ＳＤ２１１溝跡　№１トレンチの西南西方向から東北東方向に直線的に伸び、さらに屈曲して南南東方向に走る溝跡で、埋土中から多量の埴輪片及び葺石（周溝内に転落したもの）を含み、前方後円墳の前方部からくびれ部、後円部へと続く周溝と考えられる。狭いトレンチ内のため、前方部周溝の北側（墳丘側）で約７m余りの周溝肩が計測される他は長さについては明らかでない。断面形は逆台形状を呈するものと思われ、トレンチ南壁寄りで一部周溝の外周側の立ち上がりが確認されており、これをもとにすると周溝の幅については前方部側で約３m、くびれ部付近で約４m程度と概ね推定される。検出した段階では黒色粘質土（地山Ⅰ）に、より色調が黒い埋土からなる溝状遺構が切り込んでいる状態がまず観察された。埋土は地山Ⅰに比べ砂の混入が少ない上、土の粒子もきめが細かく、腐食質土を多く含むものである。検出面では小さな埴輪片が認められ、明らかに遺構埋土と考えられたため、トレンチ北壁に接してサブトレンチを設定、掘り下げを行った。その結果、検出面から－0.4mで多量の埴輪片が密集して検出され、しかも埴輪の遺存度も比較的良好であることが判明した。さらにトレンチ北壁側にベルトを残しつつ全面の掘り下げを実施したところ、図11のように多量の円礫と破砕した埴輪片が溝跡内に堆積している状況が明らかとなった。

円礫と埴輪片は溝跡の方向性と同じに、西南西から東北東方向に直線的に伸び、さらに屈曲して南南東方向に帯状に続くが、円礫は前方部の直線部分に集中して見られ、屈曲部分から先では急に密度を減じ、代わって埴輪片が多量に堆積している。この円礫・埴輪の帯状堆積は、溝跡内の北側の壁寄りに見られることから、北側方向に墳丘がかつて存在し、葺石・埴輪が墳丘上から周溝内に流れ込んだものと想像される。しかし、溝跡のトレンチ調査を実施した範囲ではプライマリーな状態の葺石・列石等は確認されておらず、葺石自体が本来的に墳裾ま

で巡るものでなかった可能性が高い。円礫はほとんどが花崗岩の川石で、大きさは径10cmから20cm程度のものが多く、30cmから40cmぐらいに及ぶものも見られる。なお、溝の埋土は検出面から底面までほぼ同質の黒色粘質土で、その検出面からの深さは、くびれ部で約0.5m、前方部では約0.3～0.4mを測る。

遺構検出・掘り下げにあたって非常にわかりにくかったのが、くびれ部から後円部にかけての部分である。この部分では古墳に先行して竪穴住居ＳＢ214が作られており、この住居跡の西側部分を切り込んで周溝の掘削が行なわれている。しかし両者の埋土は極めて似ていることから、遺構検出段階は同一のプランとして捉えており、掘り下げを進めていったところ、カマドと思われる焼土塊や住居床面の存在等から初めて両者の重複を認識したものである。よって、ＳＢ214を切り込む周溝立ち上がりは明確に検出できたものの、検出面における切り合いのラインについては不明確である。この他、トレンチ北壁寄りのベルト部分では、ＳＢ214の北側壁に切られる遺構プラン（ＳＸ215不明遺構）が検出されているが、掘り下げは行っておらず、性格は不明である。

なお、くびれ部付近のトレンチ南側壁面で観察したところ、周溝底面から地山（地山Ⅱ）が立ち上がり、さらに水平に東側に伸びている様子が確認されている。この地山Ⅱ上にはＳＢ214の貼り床土が僅かに遺存しており、さらにその上面に埴輪片を含む黒色粘質土が堆積し、周溝内へと落ち込んでいる。この立ち上がりの段が後円部の最下段に相当すると思われ、周溝底面と後円部最下段の比高差は約0.5m程度と推定される。

埴輪の出土状況は、平面的には前述したようにくびれ部付近に集中して見られるが、前方部側では円礫が密集していることから、この円礫の下層にも多くの埴輪が落ち込んでいるものと思われる。埴輪の破片は比較的大きく、中には全体のほぼ半分が遺存し、そのまま墳丘上から転げ込んだようなものも見られる。しかし、その一方で磨耗が著しく、接合不可能の破片も少なからず認められ、周溝内に落ち込むまで原位置をかなり移動しているように思えるものもある。出土する部位としては圧倒的に胴下半部から基底部の破片が多く、口縁部の破片は少量である。層位的に見ると、全量を取り上げたくびれ部付近では、それぞれの破片が上下で間層を挟まずに密着して堆積しており、その下面は周溝底面のほぼ直上に及ぶ。おそらくこれらの埴輪・円礫は、古墳築造後、そう時期を置かずして周溝内に堆積し始め、またその時間も比較的短期間であったものと推定される。また、形象埴輪の破片も10点余り見られるが、いずれも小破片であり、くびれ部付近からトレンチ西端付近までの広い範囲に散在し、かつ上面に近い層位で出土している。その他、くびれ部付近では埴輪片と混在して、須恵器の甕・器台・壺の小破片が出土している。

ＳＢ２１４竪穴住居跡　方形の竪穴住居と考えられ、トレンチ内では北東隅部と北壁・東壁の一部が確認されている。このうち、住居跡の西側は前述のとおりＳＤ211に切られて失われているが、切り合いのラインについては不明である。北壁に沿って東西二箇所に焼土の塊が見られ、西側のものはその形状から住居壁に接して作られたカマドと思われるが、東側のものは住居壁と直接接しておらず、塊状の形状からカマドではないようである。検出面から－0.3m程の深さで床面（焼土が混入する暗褐色粘質土）で確認されたが、床面は地山ではなく厚さ３cm程度の貼り床となっている。さらに貼り床の下部は茶褐色粘質土からなる地山（地山Ⅱ）で、この地山は住居跡西側で人為的に掘削を受けて周溝法面となっており、ＳＤ211溝の東側壁、すなわち後円部最下段の墳丘裾部となっている。また、北東隅部から約15cm離れた住居外でPit. Ｃ、床面東側のトレンチ南壁寄りでPit. Ｂを検出した他、サブトレンチ内でPit. Ａを検出している。このうち、Pit. Ｂ・Ｃは住居に伴うものと考えられるが、Pit. Ａは貼り床下面の検出であり、埋土中から弥生土器壺の底部が出土していることからも、住居跡に先行する遺構と思われる。なお、カマドの西約0.6mの地点で土師器の鉢が３個体（**85～87**）出土している。これらは、ほぼ竪穴住居床面と同レベルにあるが、位置的にＳＤ211の掘り方ラインとも重なり、どちらの埋土中に含まれ

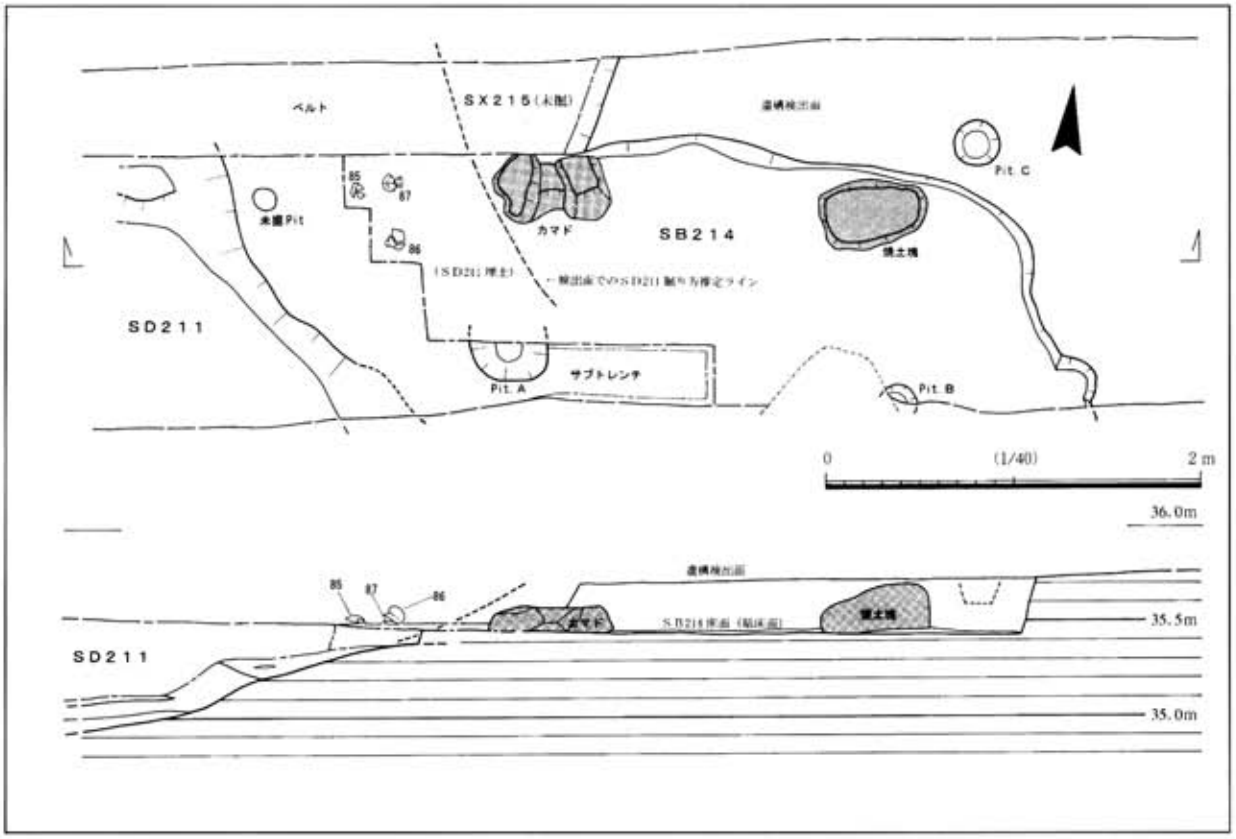


図13　ＳＢ２１４竪穴住居跡

るのか、調査段階では明確に確認できていない。時期的には５世紀前半から中頃以前の所産であり、本古墳の築造時期とは隔たりがあるため、本来はＳＢ214竪穴住居跡に伴うものである可能性が高く、古墳築造時に竪穴住居の埋土が掘削を受けて混入したことも考えられよう。

② №５トレンチの調査

№１トレンチの東側、約５ｍの間隔を空けて設定したトレンチで、トレンチ上面での長さ14.5ｍ、幅2.5～3.0ｍを測る。№１トレンチと№５トレンチの間には、当初№２トレンチを設定していたが、トレンチ底面全面から黒色粘質土の地山Ⅰが確認されており、遺構については検出されていないことから、№５トレンチ調査段階では既に埋め戻しを行っている。№５トレンチの設定にあたっては後円部の周溝の存在が想定され、調査の結果、埴輪片を含む溝跡（ＳＤ213）とこれに後出する南北方向の溝跡（ＳＤ212）が確認された。

土層　№１トレンチと同様、道路面下にほ場整備の盛土層、旧水田面が見られ、その田面の下層から遺構が確認されている。ほ場整備の盛土の厚さは約0.8～0.9ｍ程あり、№１トレンチと同じく標高35.8ｍ付近にほ場整備前の地表面（水田層）が見られる。この水田層を除去していったところ、トレンチ中央部のやや東寄りで褐色粘質土を埋土とする溝跡（ＳＤ212）が検出された。このＳＤ212が切り込む面は、溝の東西で様相が異なり、東側では地山Ⅰが検出された一方、西側では埴輪の小片を少量含む黒色粘質土が確認された。この黒色粘質土は№１トレンチにおけるＳＤ211埋土と同色・同質であることから、周溝の埋土であると推定された。よって、この黒色粘質土を掘り下げたところ、約0.5ｍ下面よりローム質の地山Ⅲが検出され、さらに地山面が西側に立ち上がっていく様子が認められた。よって、この立ち上がりが後円部周溝に伴うものであり、周溝の東側については後世の溝跡（ＳＤ212）と重複していることが明らかとなった。

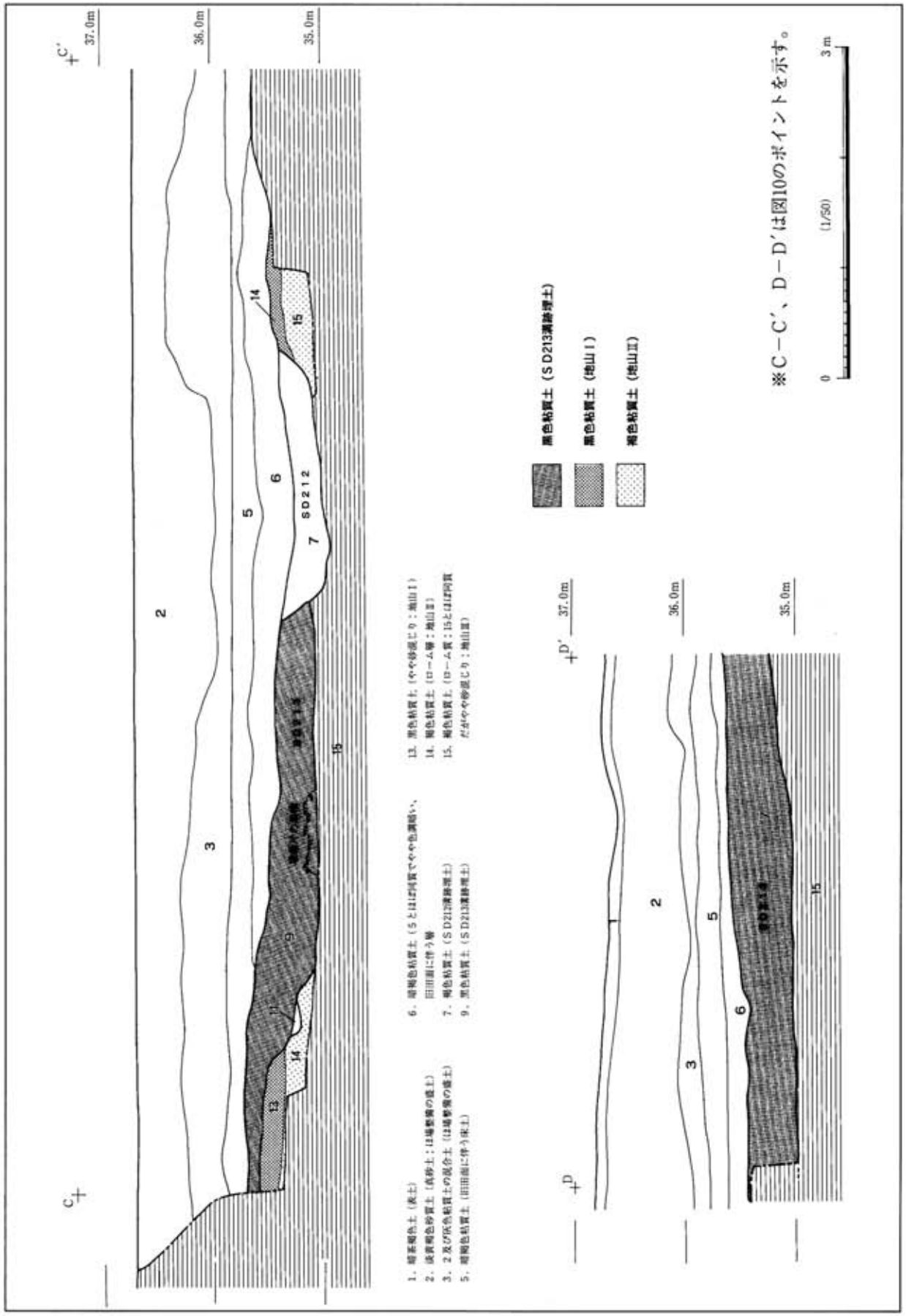


図14　No.5トレンチ土層図

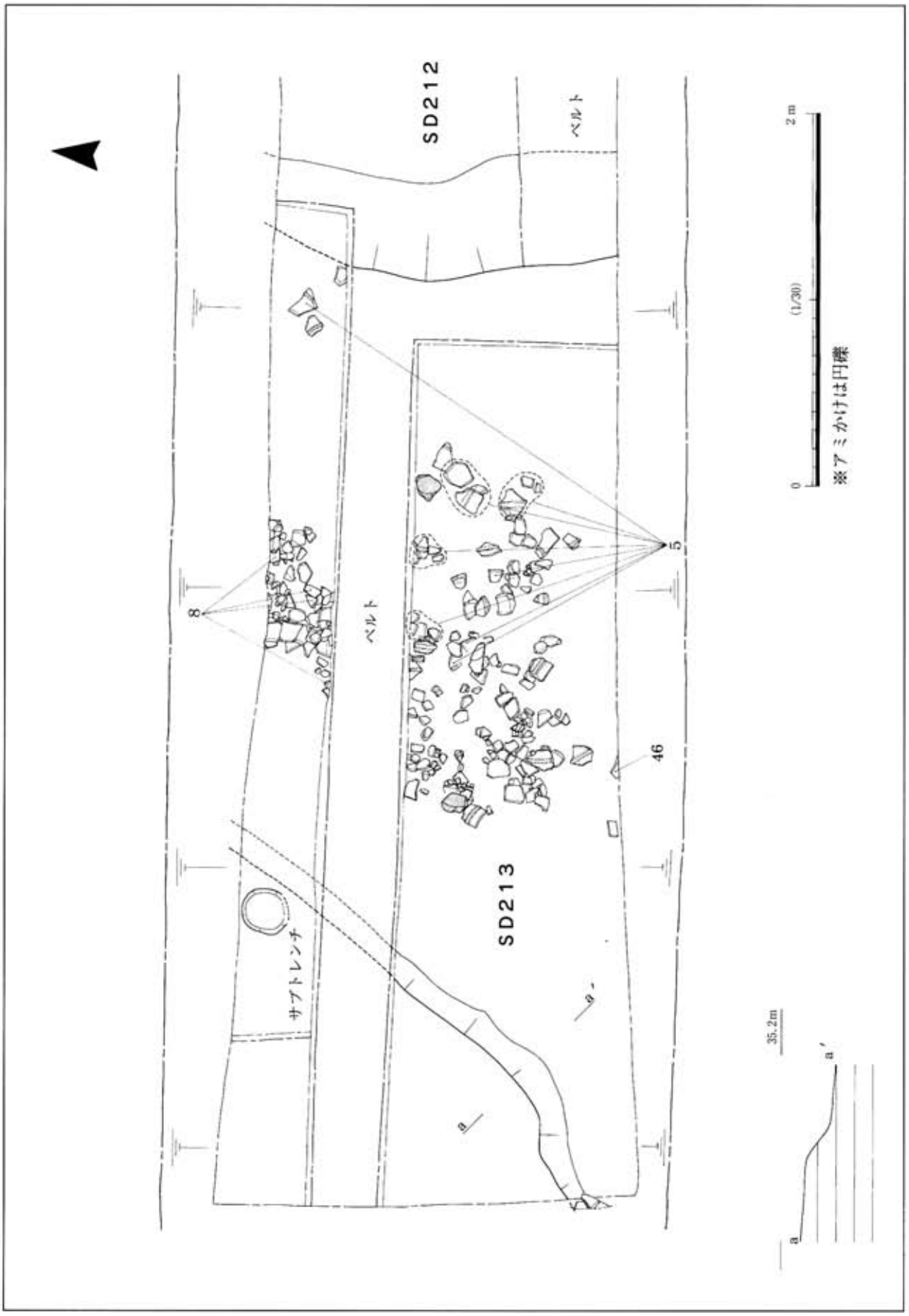


図15　ＳＤ２１３溝跡埴輪出土状況

ＳＤ２１２溝跡　ＳＤ213の東側部分を切って南北に走る溝で、断面形は逆台形をなし、検出面での幅約2.5m、底面での幅1.8m、残存する深さは、ＳＤ213底面よりやや深く、0.2～0.3mである。埋土は褐色粘質土で、自然堆積の様子は顕著に見られない。出土遺物は混入品と思われる埴輪小片が僅かに含まれるのみである。周辺における調査例から中世以降の所産と思われる。

ＳＤ２１３溝跡　東側をＳＤ212に切られるため幅は不明で、深さは検出面から0.2～0.3m遺存する。前述したように、底面から西側にかけて地山Ⅲが立ち上がって溝の肩となり、さらにこの立ち上がりは、平面的には北東方向から南西方向にかけて緩やかにカーブしている。地山Ⅲの立ち上がりの段差は約15cmと低いものであるが、この立ち上がりは、その上層の地山Ⅰまで続いているようで、トレンチ北壁の断面観察では溝底面から立ち上がって地山Ⅰ・Ⅲの上面に続くラインが確認されている。このＳＤ213底面から立ち上がる段が後円部の最下段となるものと推定される。この場合、周溝底面と後円部最下段との段差は約0.5m程であり、№１トレンチのくびれ部付近における周溝底面と最下段との比高差とほぼ等しい。なお、トレンチ北壁に設定したサブトレンチ内の西側、地山Ⅱの立ち上がり部分で径約20cmの小穴が検出されており、古墳に先行する時期のものと思われる。

埋土中からの出土遺物として、埴輪片・弥生土器の他、円礫が見られる。埴輪片は後円部最下段の裾部より約0.7m離れた地点から東側の範囲に、溝の方向性と同じく北東－南西方向に帯状に堆積している。埴輪片は検出面より－0.3m程の深さから溝底面直上にかけて堆積しており、ＳＤ211のくびれ部付近と比べると量的に少ない。確認調査にあたっては、ＳＤ212との間にアゼを残した以外は完掘を行い、コンテナ３箱程度の埴輪片を取り上げた。埴輪片はいずれも普通円筒で、このうち１個体について全形復元している（図18－１）。なお、円礫は少なく、３個程度しか確認されていない。

③ 出土遺物

ＳＤ211及びＳＤ213溝状遺構内より多量の埴輪片が出土しており、出土量はＳＤ211よりコンテナ（36リットル容量）20箱分、ＳＤ213よりコンテナ３箱分に相当する。埴輪はいずれも小破片となっており完形品は皆無で、全形を窺えるものは少ない。種別は99％普通円筒からなり、朝顔形埴輪（朝顔部～頸部の破片）と形象埴輪が若干量出土している。埴輪片以外では須恵器・土師器・弥生土器がコンテナ1／2箱分・鉄製品１点がある。

（円筒埴輪）　円筒埴輪には普通円筒と朝顔形の両者が見られる。前述のとおりほとんどが普通円筒と思われるが、朝顔形については朝顔部の破片でしか区別できないことから、普通円筒としている破片の中にも朝顔形の円筒部が当然含まれる。普通円筒の破片の多くは胴部二段目、あるいは三段目から基底部にかけての部分であり、口縁部の破片は非常に少ない。このことは古墳築造時に埴輪の下部を土中に埋め込んで配置することにより、胴下半部の遺存度がより良好であったことに起因すると思われる。取り上げた埴輪片について接合を試みたところ、普通円筒については基底部から口縁部までの全形復元（図面上）が３個体で可

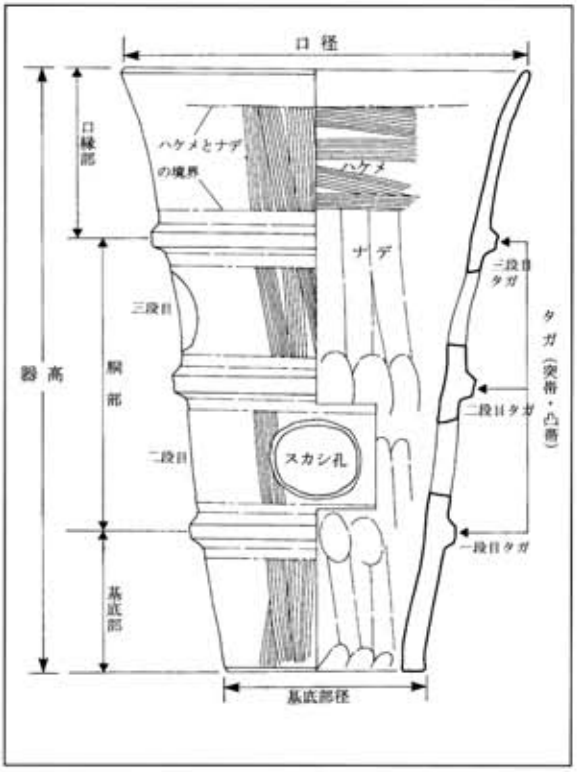


図16　埴輪各部名称図

能であったが、朝顔形については朝顔部の上半部、及び胴下半部についての部位は見られず、その全形については把握できなかった。なお、取り上げた円筒埴輪の個体数把握のため、復元した基底部について同一個体を除外し数えたところ、15個体分以上の存在が確認できた。

形態・法量　普通円筒は３個体について全形復元が可能であったため、主にこれらを手がかりとして埴輪の形態について考察する。

全体的なプロポーションは、基底部から胴部にかけてやや開きながら直線的に伸び、口縁部はそこから僅かに外反しながらさらに開く。口縁部のみの破片も数点出土しており、ほとんどが端部に向かって僅かに外反するものであるが、**7**のみは直線的に開き、端部付近のみ外反するものである。口縁部端部は断面方形で明瞭に端部を持ち、端面はほぼ平坦である。タガ（突帯・凸帯）は三条であり、胴部二段目と三段目のそれぞれに円形スカシ孔を向かい合わせに２孔、上下で方向を直角に違えて施される。

法量のうち器高は、全形復元した３点それぞれが、50cm(1)、47cm(2)、49cm(5)を測り、ほぼ50cm弱と考えられる。各部位の高さのうち、基底部高は平均11.0～11.5cm、タガ間の幅は平均9.0cm、口縁部長は平均12.5cmを測る。底径は18.5～21.0cm程度のものが中心的であり、**44**など17cm程度の径の小さいものや、**31・39・42**など22.5～24.0cm程度の大きなものもあるが、極めて少数である。また、口縁部径は28.0cmから31.0cm程度に収まるが、**7**のみは23.1cmとやや小さい。ただ**7**は口径復元の数値であり、歪み等を考慮する必要もある。

朝顔形については全形が把握できたものはなく、胴部から朝顔部にかけての頸部付近の破片が残存するのみであるが、大きくは胴部径25cm以上の大型のもの（**52・53**）、20cm前後の小型のもの（**49・50・51**）の両者がある。形態としては前者は肩部が張り、後者はかなり「なで肩」で丸みを持つ点が異なるが、**50・51**と**53**を比較した限りでは、頸部のくびれ部から大きく開く朝顔部の形状は同様である。なお、**47・48**は朝顔部の二重口縁を形作る擬口縁部であり、端部に粘土貼り付けのための線刻が施され、同様のものは**53**の擬口縁にも見られる。

成形　成形は基底部の粘土板上にさらに粘土板を右回りに巻き上げていくものである。また、基底部の底面観察で粘土板の貼り合わせ状況が分かるものでは、すべて右回りの貼り合わせである。器壁の厚さは胴部で約1.6cm、基底部付近で1.8～2.0cm、口縁部付近で1.0～1.2cm、と厚手のものが主体であるが、**7・10・13・14・15・28・29**など厚さ平均1.0cm程の薄手のものも見られる。

調整　外面は、基本的にはタテハケメによる一次調整のみである。ハケメの間隔は大きく大小２種あり、12本程度／cmの非常に細かいものと、７本程度／cmの粗いものがあり、前者が多数を占める。ハケメの原体幅はいずれも１～1.5cm程度である。基本的に一次調整のハケメをそのまま残すが、特筆すべきものとして、**2・15・16・18・35**などでタテハケ後の横方向の調整痕が観察される。この調整痕は、調整工具の幅が分かるところでは約１cm程度で、一見、平行する細い筋状の集まりであるためハケメに見えるが、一次調整に用いられるハケメとはその間隔が異なる他、一次調整のハケメでは、そのひとつひとつが「谷線」が細く、「山線」が太いのに対し、この調整痕は「谷線」が広く、全体的に浅い。また、**15**のように胴部のひとつの段だけに調整が施され、一次調整のタテハケを完全に消していないばかりか、胴部を全周しないなど、多分に局所的な調整である印象が強く認められる。

一方、同様の調整痕はタガのほぼ全体に横位に見られ、上記の個体では、タガ部の調整から連続して胴部にまで施されており、一次調整後、タガを貼り付け、整形する際の一連の行為と思われる。その理由について考えられることとして、タガ整形段階に生じた器表面の凹凸などの部分的な不具合を整えたものとも推定出来る。特にこの調整痕は上記以外の個体のタガ部にもほとんど見られることから、当該古墳出土円筒埴輪のタガ部整形法と

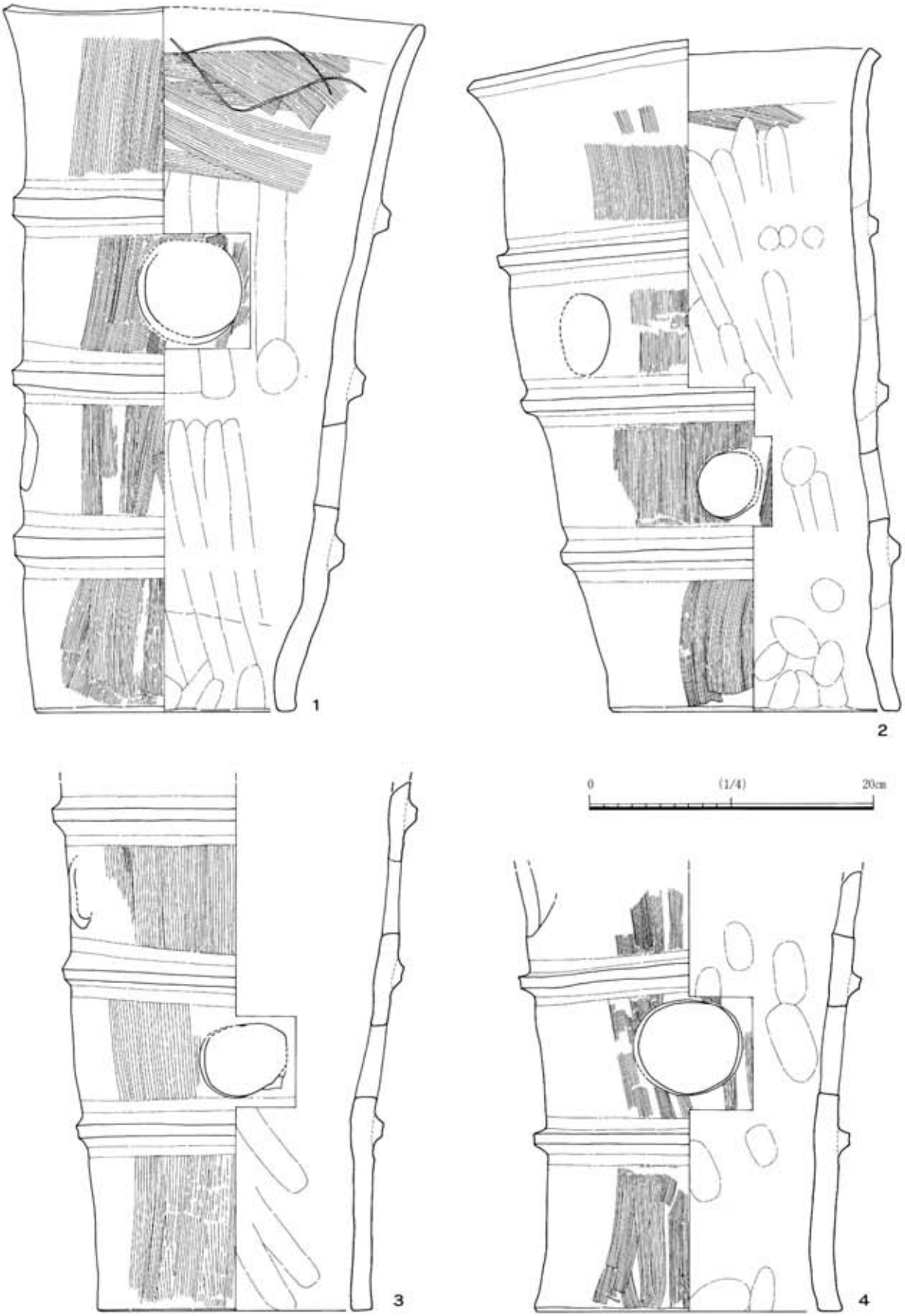


図17　出土埴輪実測図①

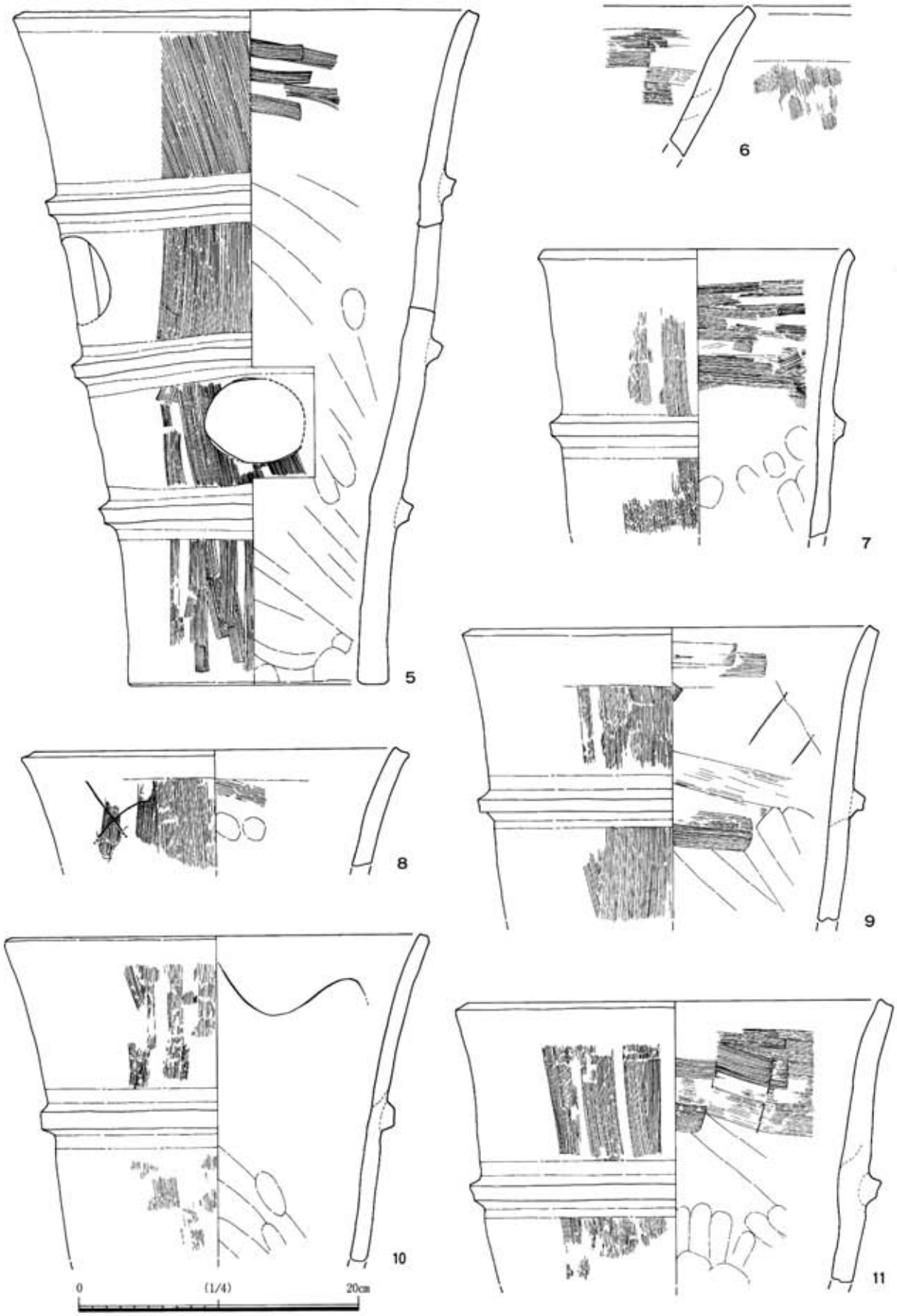


図18　出土埴輪実測図②

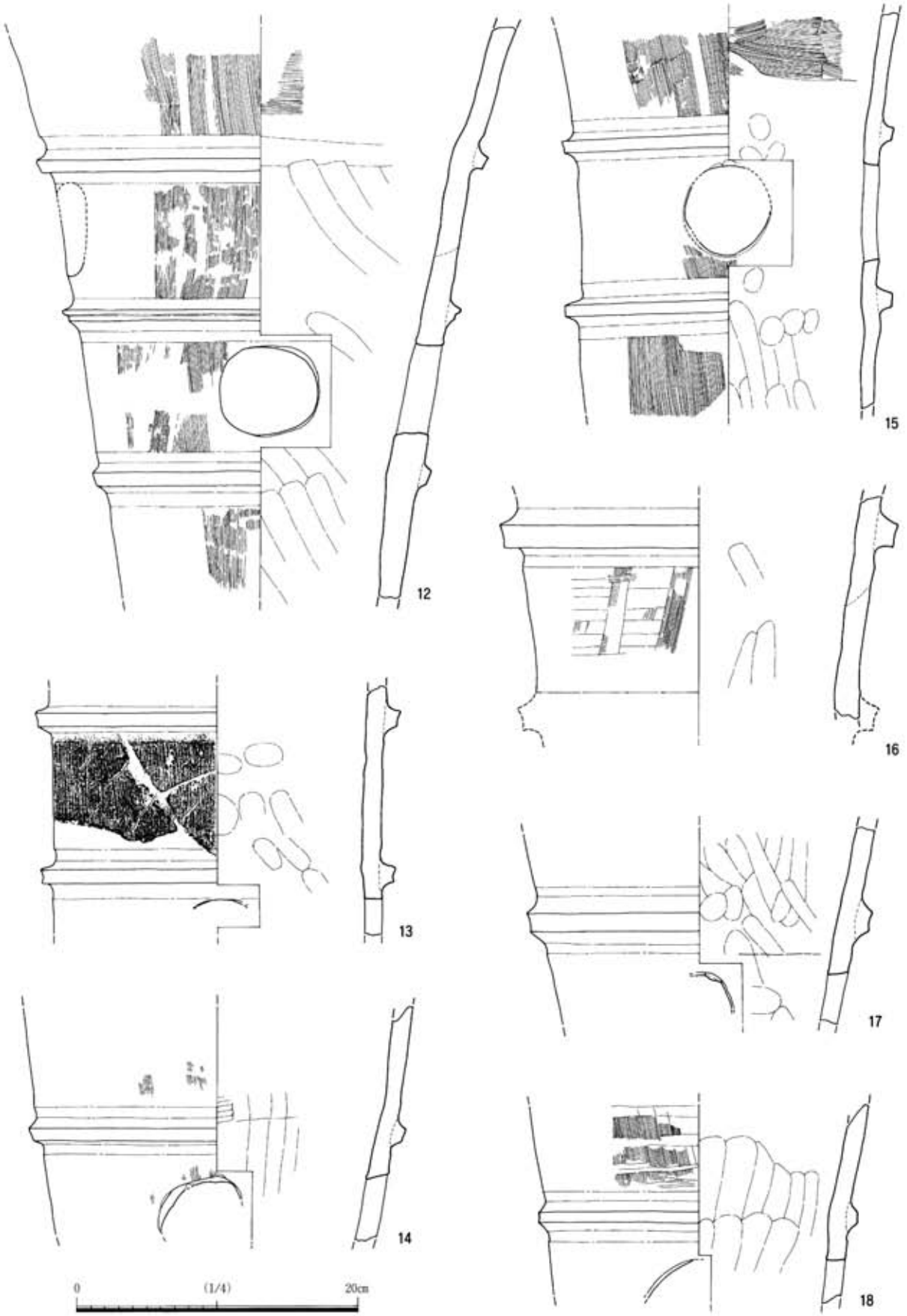


図19　出土埴輪実測図③

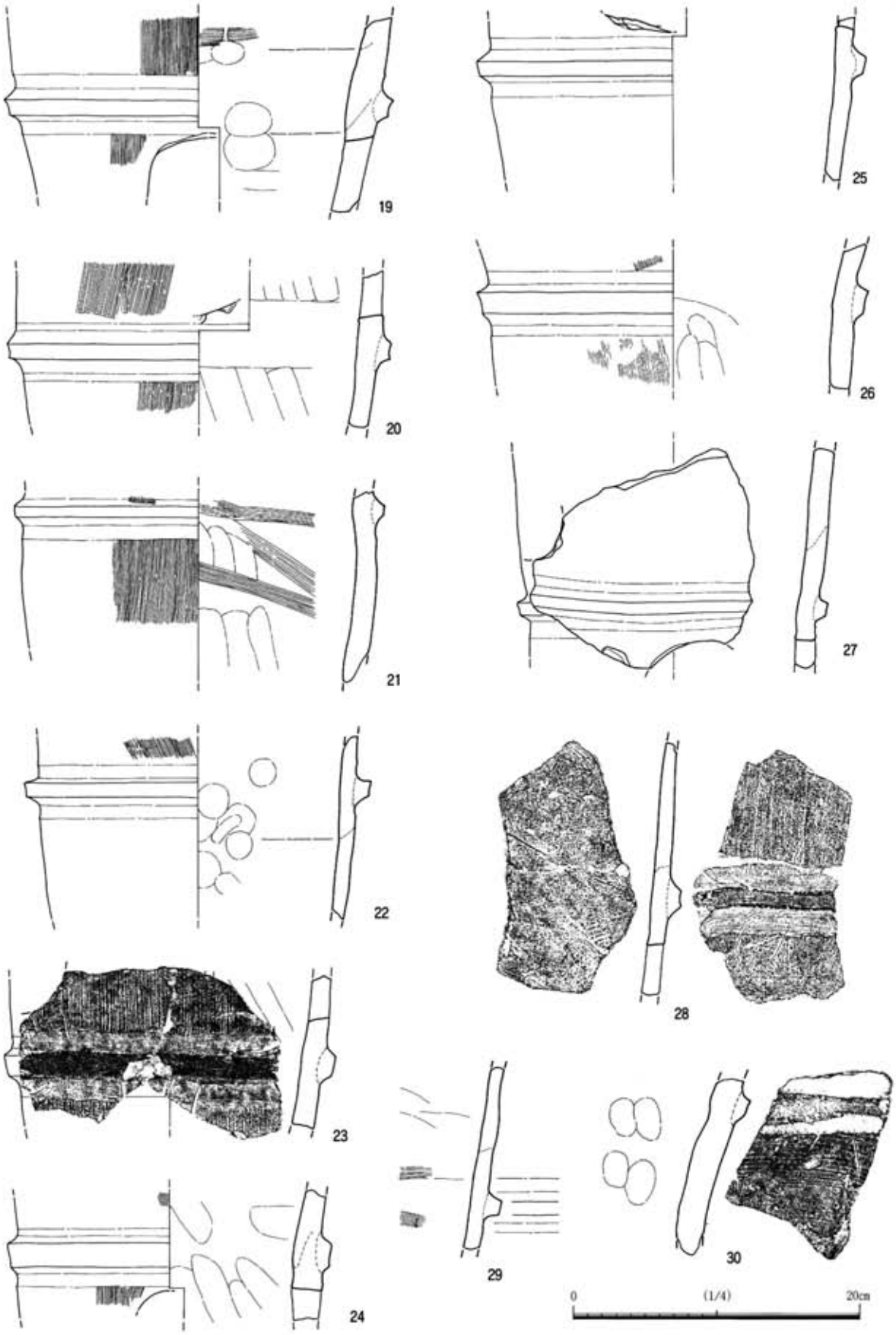


図20　出土埴輪実測図④

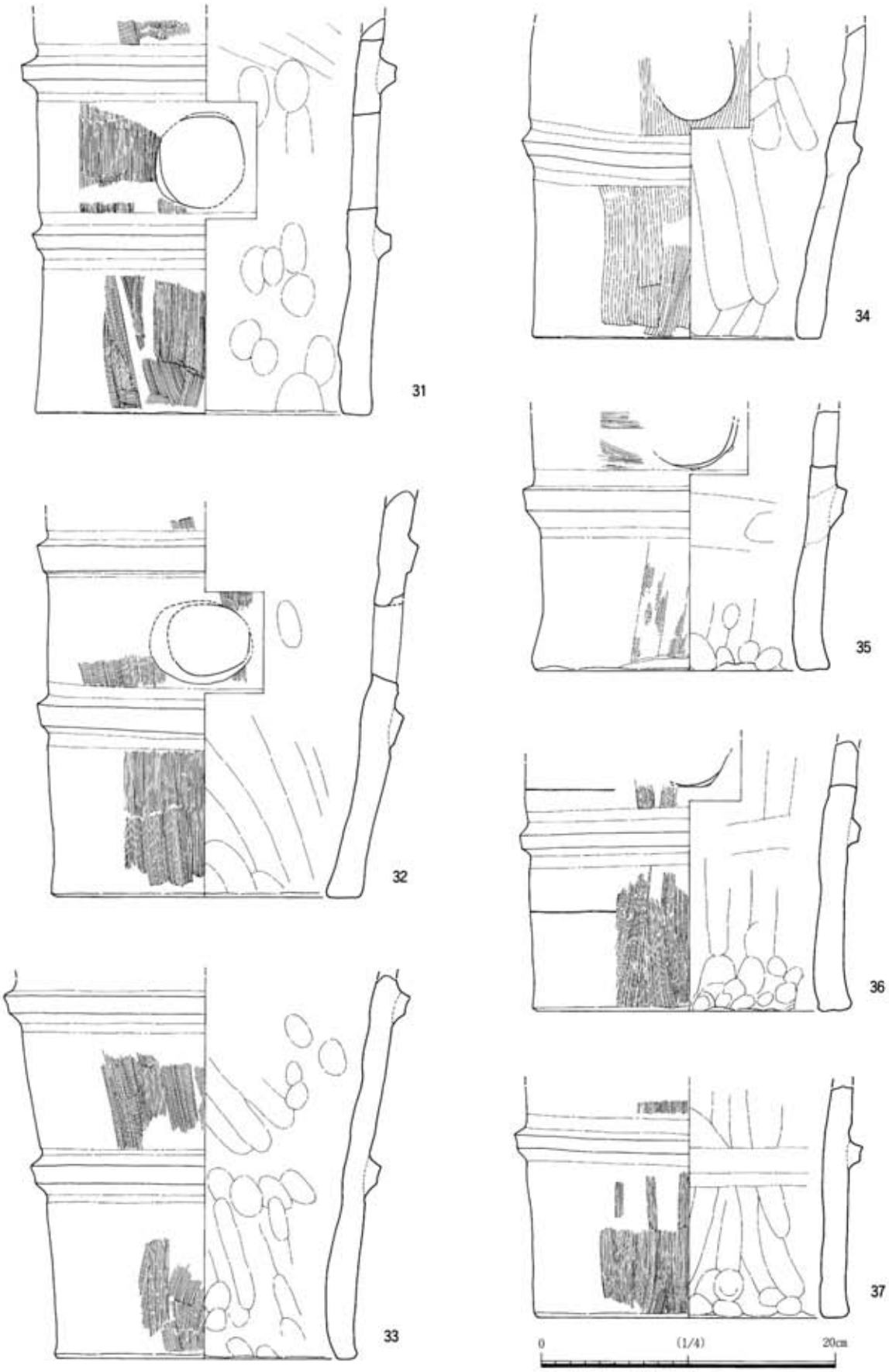


図21　出土埴輪実測図⑤

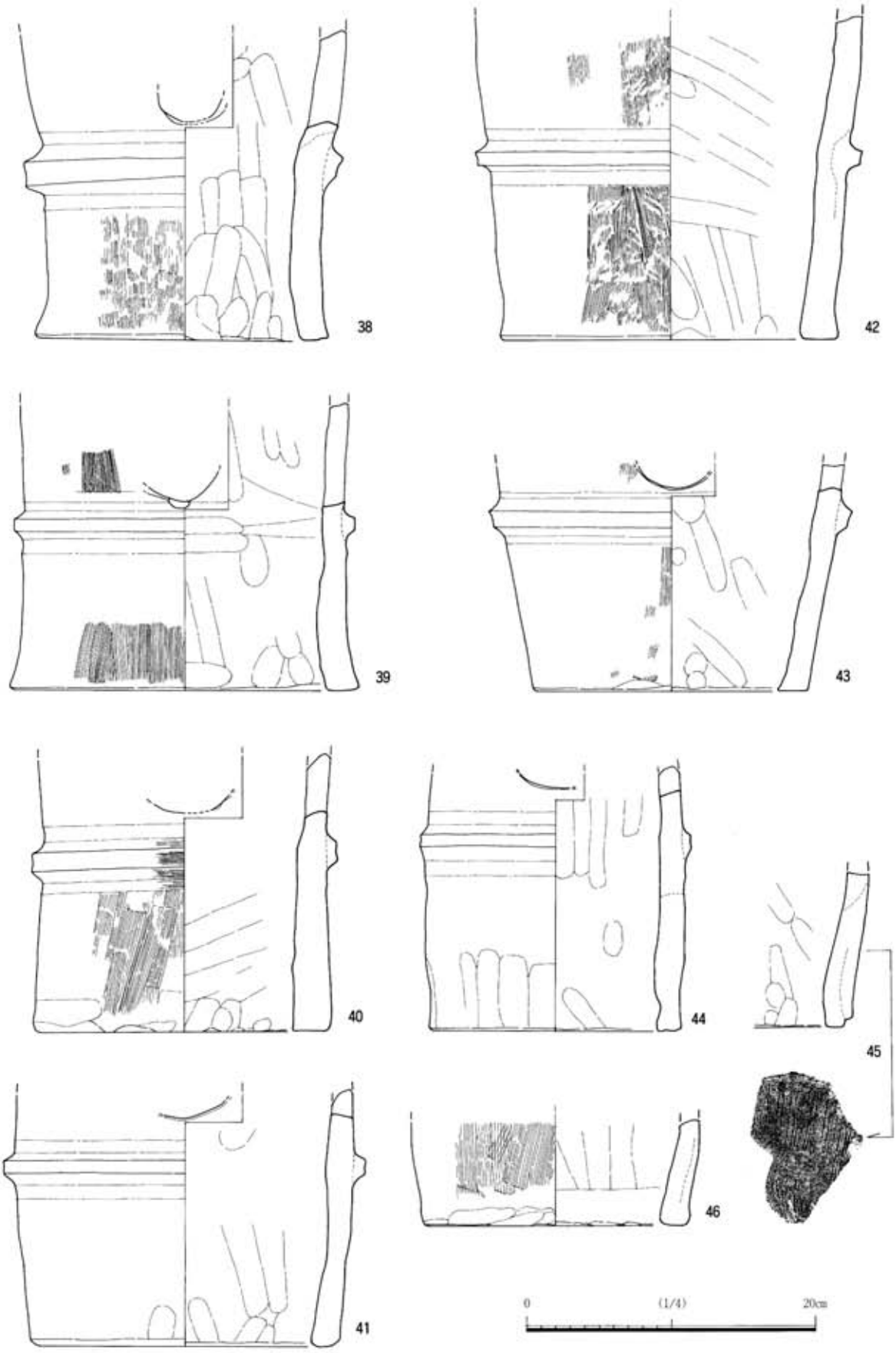


図22　出土埴輪実測図⑥

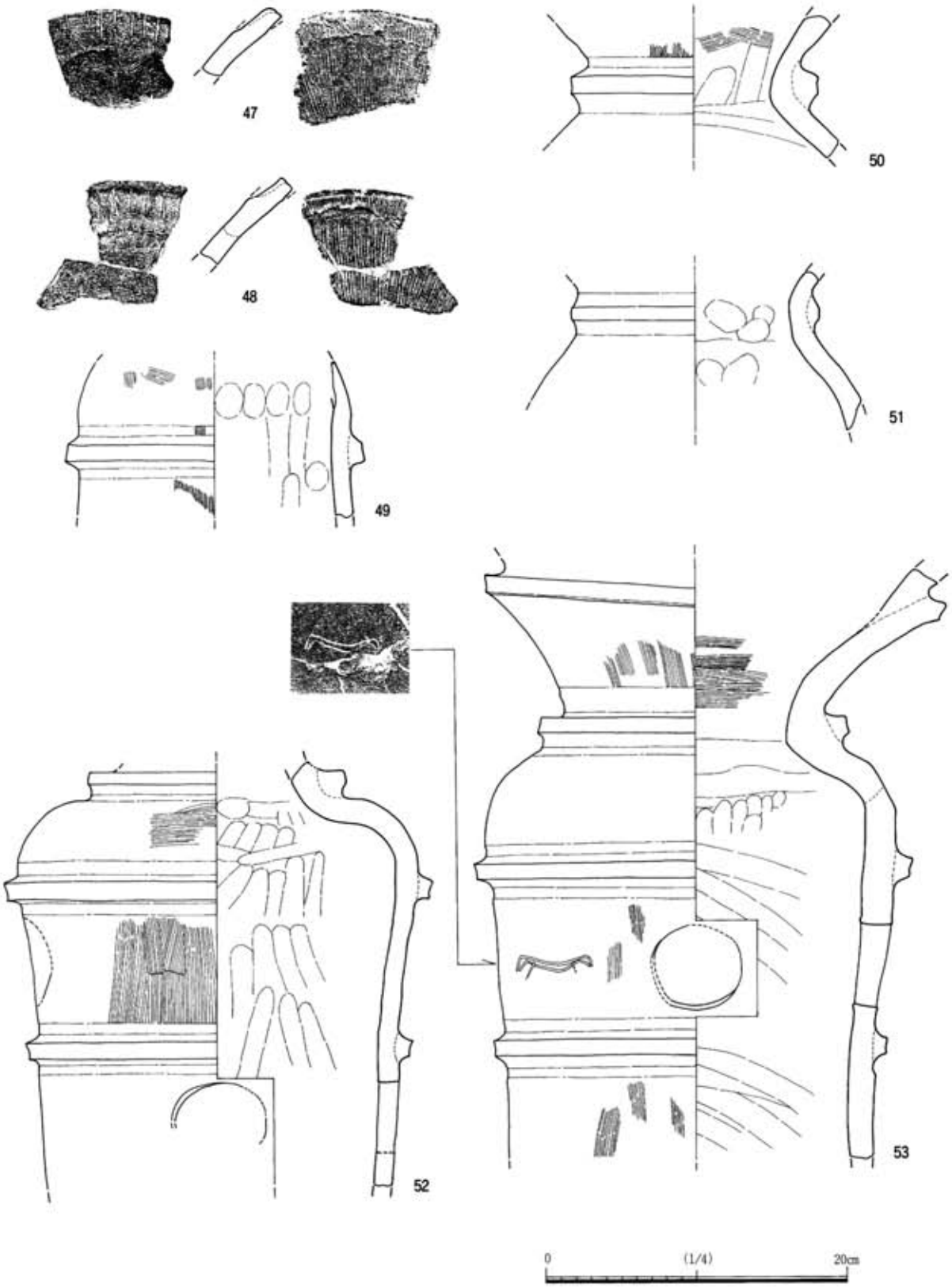


図23　出土埴輪実測図⑦

して一般的に用いられていた技法と言え、上記の個体例は、その作業の過程でたまたま胴部の部分的な調整を施したケースと捉えられる。よって、この調整技法についてはハケメ状工具によるナデ調整に近いものと考え、いわゆる二次調整のヨコハケとは区別したい。

この他、明確に外面二次調整のヨコハケを施している例として**30**が上げられる。小破片のため詳細は不明だが、目の粗いものと細かいものの両者が混在しており、調整具を当てた角度によるものとも思われる。目の細かいハケメの原体幅は約３㎝である。ヨコハケはいわゆるＡ種ヨコハケと推定される。取り上げた埴輪片の中で唯一のものである。

なお、底部付近の調整としては、接地面の外面付近において、**40**や**46**のようにヘラ状工具や指頭のナデによる調整痕が見られるものがあるが、例としては少ない。本遺跡出土の円筒埴輪の場合、底部が特に分厚くなる、あるいは変形するといった様子はほとんど見られない。底部底面については指あるいはナデによって調整がなされるが、調整痕や作業台の圧痕等は認められない。

内面調整は指頭によるナデ中心で、基底部方向から口縁部方向に器表面に向って左肩上りに直線的にナデ上げられ、さらに基底部端部内面に指頭による押圧を施し、底部の歪みを修正している。また、タガが貼り付けられる位置のちょうど内面部分でも指頭押圧痕が認められ、外面のタガ貼り付けに伴うものと思われる。さらに口縁部内面は、ナデの後に横・斜め方向のハケメを器表面に向かって右下から左上方向に施して口縁部を緩く外反させ、端部付近については内外面同時にヨコナデを施すことによって形状を整えている。

タガ（突帯・凸帯）　タガの形状は、基本的にはタガ高よりタガ幅が大きく、端部の幅が広い台形状であり、成形にあたっては粘土紐を胴部に貼り付け、人さし指を端部に当て、親指と中指により粘土紐を挟んで強くナデることにより、タガ上面と下面が凹面をなしている。しかし、タガの高さ・幅は様々で、そういったタガ高と幅の比率や形状からＡ～Ｅの５つに分類（図26）している。このうち、Ａ類はタガ幅が最も狭く、高さが高いもの、いわゆる突出度が高くシャープな作りのものである。Ｂ類は突出度のより低いもので、さらにＤ類はＢ類同様突出度が低いほか、タガの上方に較べ下方がよりつぶれぎみになるものである。さらにＥ類は最も突出度が低いもので端部もシャープさに乏しい。Ｃ類は台形部分はＢ類に近いものの、上端のみが突出し、端面に段を持つものであるが、１例のみであり、バリエーションとしては例外的なものである。その他、一段目タガにおける断続ナデ技法・押圧技法等の採用は見られない。なお、**4**のタガ剥離部分では、貼り付け位置を示すための沈線（突帯貼り付け用目印：写真図版12）が見られる。

胎土　胎土は肉眼観察の限り、すべてほぼ同質である。１㎜前後の砂粒を多量に含み、５㎜から７㎜程度に及ぶ砂礫も５㎝×５㎝の範囲に１、２個の密度で認められる。鉱物として石英は多く見られるが、雲母やカクセン石等は非常に少ない。特徴的なものとして0.5～１㎜程度の明赤褐色を呈する砂粒が５㎝×５㎝の範囲に４、５個といった密度で含まれる。

焼成　すべて土師質で、器表面に黒斑を伴うものは全く見られず、焼成は窖窯による。観察表中では内面まで器表面と同色に焼けているものを「良好」、内面が黒ずむ、あるいは焼き色がついていない等の焼成が足りないものを「不良」とした。全体としては概ね両者が半々に見られる。

線刻　器表面へのヘラ状工具による線刻には、簡単な記号状のものの他、動物を模したものも認められる。記号状のものは口縁部の内外面に見られ、**1**の目のようなものや、**8**の×印、**10**のＳ字などがある。また、朝顔形埴輪である**53**の肩部下のタガ間には四つ足の動物を表現したと思われる線刻が見られ、「馬」「鹿」などが想定されるが、角の表現はなく、前者の可能性を考えている。なお、この線刻は記号状の沈線により描くものと異なり、

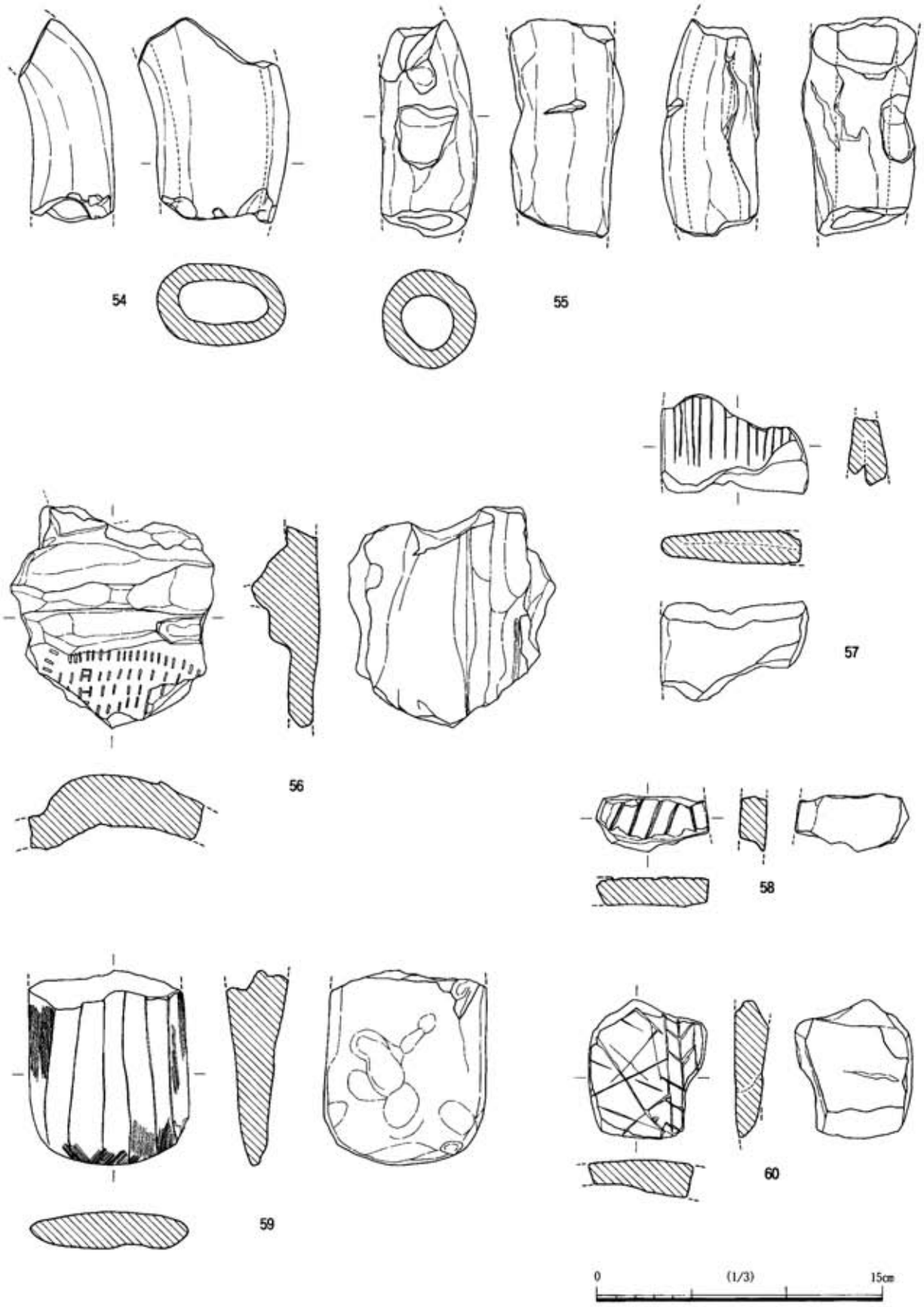


図24　出土埴輪実測図⑧

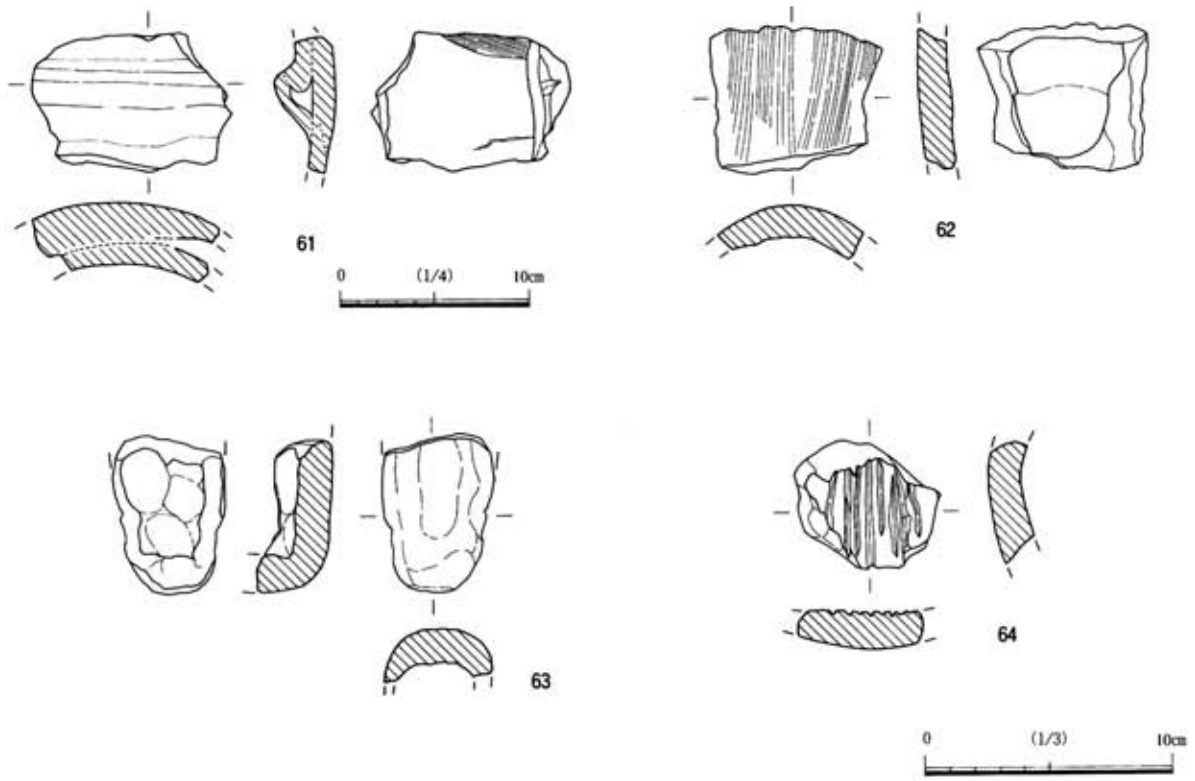


図25　出土埴輪実測図⑨

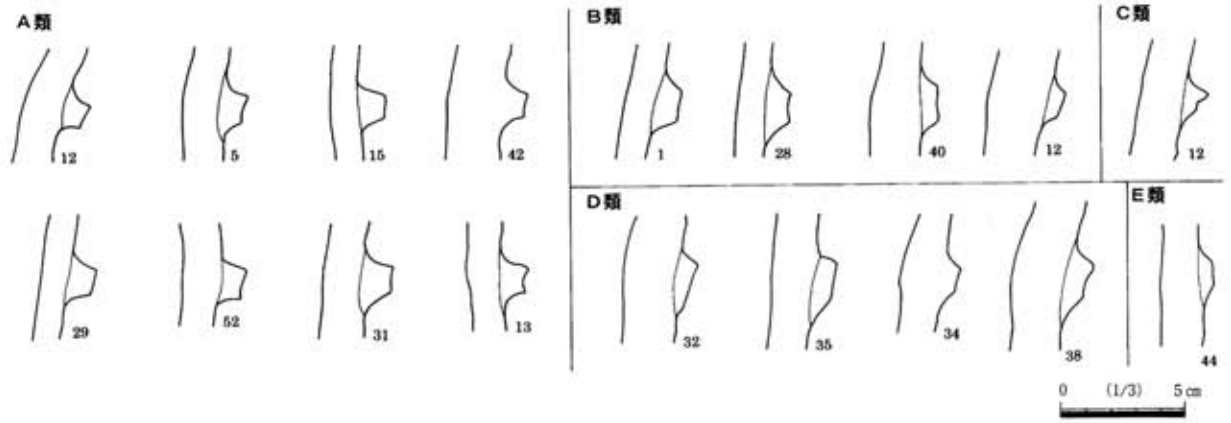


図26　円筒埴輪タガ部の形状各種

ハケメのような数条からなる浅い線で描かれている。

（形象埴輪）　形象埴輪については、不明確なものも含めて11点が出土している。いずれも小破片であり、このうち、器種が明らかなものでは、人物（**54・55**）、馬形（**56**）、鳥形（**57・58・59**）がある。すべてＳＤ211からの出土で、検出面に近い上層で確認されている。**54**は人物埴輪の肩から上腕付近の左腕と考えられ、ＳＤ211の中でも前方部中程付近の周溝にあたる位置での出土である。外面に服飾等の表現は見られない。**55**も人物埴輪の腕で、肘及び二の腕付近か。一部器表面に粘土剥離痕が見られ、**54**と同様、服飾の表現はない。腕の左右については不明。**56**は馬形埴輪の鞍の部分である。後輪（しずわ）は欠損しており基部だけが残り、図中の後輪より下

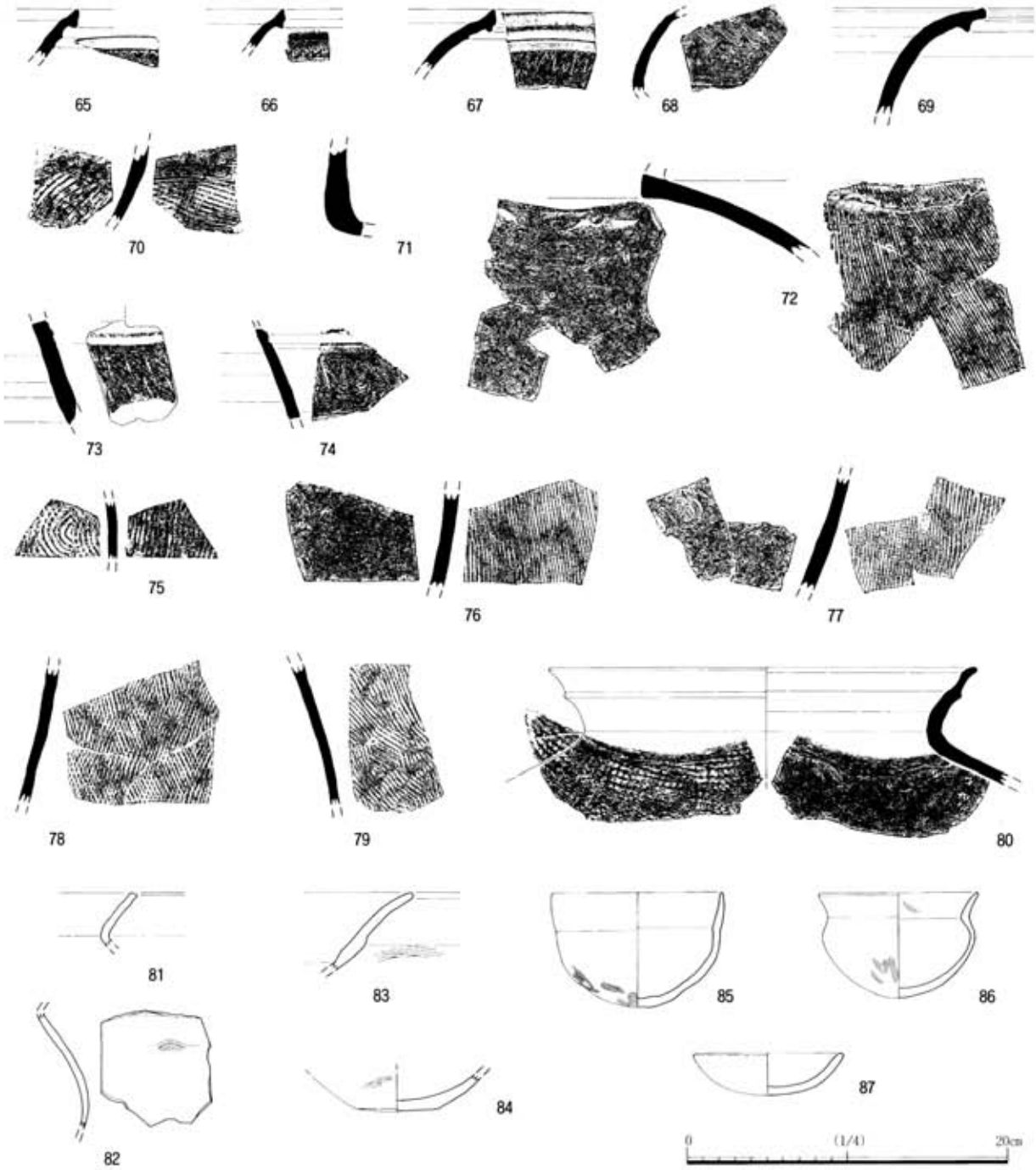


図27　出土須恵器・土師器実測図

方が鞍の部分で、上方には左上方に伸びる尻繋が僅かに残存する。鞍の表面には革綴りを表現したと思われる長方形の刺突文が連続して施される。くびれ部寄りの周溝上部からの出土である。**59**は平たく丸みのある長方形の破片で、端部の一端に向かって薄くなって丸みを持ち、もう一端に向かっては厚みを増しながら欠損部となる。また一面には細い線刻を平行に６本描くが、もう一面は見られない。当初、女人の鬢を想定したが、形状・大き

さから鳥形埴輪の尾羽と考えられる。調整は線刻のある表面には細かいハケメが見られるが、裏面はハケメ後に全面をナデている。くびれ部の周溝上部からの出土である。また、**57・58**も同種の破片で、鳥形埴輪の別の部位の可能性がある。この他、**60**は一面に綾杉状の文様とこれに斜めに交錯する沈線が描かれるものである。こういった綾杉状の文様は、人物埴輪の服の綴じ合わせ部分などの表現に類例が認められ、これについても人物埴輪の一部である可能性が考えられる。

この他、器種不明なものとして、**61～64**がある。このうち、**61**は薄い粘土板の外面にさらに粘土を帯状に貼り付けて、丸みのある段を作り出すもので、器表面は内外面共にナデで、内面に一部ハケメが見られる。**62**は筒状をなすもので、径復元すると10cmとなり、鳥形埴輪の頸部等が想定できる。外面にはハケメを施す。**63**も径５cm程の筒状のものか。**64**は図中裏面が外面と思われ、内面には深い沈線が連続して刻まれる。この沈線自体は文様ではなく、粘土同士の接合を強くするためのものと考えられる。

（須恵器・土師器・弥生土器）　須恵器はＳＤ211の周溝くびれ部付近を中心に出土しており、合わせてポリ袋一袋分程度が見られる。しかし、ほとんどが小破片であり、特に須恵器は全形が窺えるものは皆無である。また土師器はＳＤ211（**81・82**）の他、ＳＢ214（**85・86・87**）で、弥生土器はＳＢ214の南側のサブトレンチ内（**84**）やＳＤ213（**83**）で検出されている。このうち、器種・部位がある程度判明したもの23点について図化した。

65～80は須恵器である。器種は、器台（**65・70・73・74**）、壺（**66・67・68**）、甕（**69・71・72・75～80**）がある。器台（**65・70・73・74**）のうち、**65**は杯部口縁部で外面沈線下に波状文が見られる。**70**は杯部体部で、湾曲する体部下半部はタタキの後にカキメを施し、上部には波状文が見られる。内面には同心円文が残る。**73・74**は器台の脚部で、**73**では沈線を挟んで上下にスカシの残欠がある。**73・74**はいずれも外面に波状文が残る。**74**は杯部体部の可能性もある。壺（**66・67・68**）のうち、**66・67**は口縁端部内面が内湾し、外面の端部直下に断面三角形の突帯を貼り付け、さらにその下方に波状文を巡らせる。甕（**69・71・72・75～80**）のうち、**69・71・72**は同一個体と考えられる。口縁部（**69**）は頸部から屈曲せずに緩やかに外反し、端部は方形、外面の端部直下に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面共に全面がロクロナデ。**71**はその頸部で、胴部（**72**）へと続いていく。胴部外面は平行タタキで内面は当て具痕の半擦り消しとしている。特徴的な点として、胎土の色調が器表面では暗灰色であるのに対し、内部は暗赤褐色を帯びている。胴部片（**75～79**）のうち、**75**は内面に同心円文の当て具痕が認められるが、**76～79**はいずれも内面半擦り消しであり、外面のタタキの様子からも**69・71・72**と同一個体の可能性が考えられる。**80**は口縁部から肩部付近までの破片について反転復元を行なったもので、口縁部復元径26.0cmを測る。口縁部は中程で段をなして二重口縁状を呈し、端部は丸みを帯び、外面の段の部分は鋭い稜をなす。口縁部の内外面はロクロナデ。胴部の肩は張っており、外面には格子目タタキ、内面は同心円の当て具痕を半擦り消しとしている。焼成はやや甘く、色調は赤みを帯びるが、胎土は灰白色で緻密さを欠き、黒色の粒子を多く含んでいる。

土師器のうち、**85～87**は共伴遺物であり、ＳＢ214のカマド西側で出土したものである。**85**は鉢で全形の4／5が遺存し、口縁部と体部とは僅かに屈曲することによって区別される。復元口径は10.7cm、器高は7.2cm。調整は底部外面がハケメ、他はナデ。**86**も鉢で、口縁部はくの字形をなし、口径と胴部最大径が等しい。全形の約1／2が遺存し、復元口径は10.0cm、器高は6.6cm。調整は磨耗により不明瞭だが、底部外面がハケメ、他はナデ。**87**は浅い鉢で、全形の2／3が遺存する。復元口径は9.5cm、器高は2.7cm。調整は全体ナデで、口縁部内外面は焼成時に燻されたためか黒化している。**85～87**はいずれも色調は橙色で、胎土は**85・87**は砂粒・小石を含むが、**86**は細砂粒のみを含む。

この他、ＳＤ211埋土中より古式土師器の甕（**81・82**）の破片が出土しており、同一個体と考えられる。口縁部は直線的で、胴部はあまり膨らまず、肩部に波状文を巡らせる。黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。

弥生土器には**83・84**があり、いずれも終末期のものである。**83**は有段高杯の口縁部でＳＤ213の埋土中からの出土。調整は外面は磨耗で詳細不明、内面はミガキ、色調は明赤褐色で胎土中に砂粒を少量含む。**84**は壺の底部でＳＢ214南側のサブトレンチ内からの出土。pit.Ａ埋土中に含まれていた可能性があり、ＳＢ214に先行する時期の遺物である。底面は未だ平底で、底径約５㎝。調整は外面にハケメが一部見られ、内面はナデ、色調は外面橙色で黒斑を有し、内面は黒化している。胎土は細砂粒と微細な雲母片が多量に含まれる。

出土土器の時期について考えると、まず須恵器は、器台の口縁部（**65**）の端部付近が僅かに外方に屈曲し、端部内面が凹面をなす点、また杯部内面の同心円文を擦り消さない点などから陶邑編年[5]ＴＫ23～47併行期に位置付けられ、壺についてもほぼ同時期の所産と推定される。また、**69・71・72**の甕は、口縁部（**69**）の形状や胴部内面の当て具痕の擦り消しなどから、器台より古いＴＫ216併行期に遡る。特に本資料は断面の焼き上がりの色調より陶邑産の可能性が指摘されている。その他、**80**の甕は口縁部の形状や胴部内面の擦り消し、及び全体の色調などから古式須恵器の可能性が考えられるが、県内に類例は見出せず、今ひとつ位置付けが明確でない。同様の二重口縁をなす甕は奈良～平安時代初頭にかけても見られるが、胴部内面の当て具痕擦り消しは施されず、全体的に厚ぼったく、本資料に比べシャープさに欠ける。また出土位置はくびれ部分の周溝にあたり、埋土下層ではないものの、埴輪片と混在して出土しており、ＳＴ217古墳築造以降の混入の可能性は低いと思われる。上記の点から現時点では、本資料については**69・71・72**の甕と同じくＴＫ208併行、あるいはそれより古い可能性を想定しておき、今後も検討を要するものである。土師器のうち**85～87**はいずれも小型で今ひとつ明確でないものの、くの字形口縁の鉢（**86**）、及び屈曲がほとんど形骸化した有段鉢（**85**）の存在から、概ね５世紀前半～中頃の時期幅で考えたい。この他、弥生土器高坏・壺（**83・84**）及び古式土師器の甕（**81・82**）は弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての所産である。

所　　見　今回の調査により確認された前方部からくびれ部にあたる周溝（ＳＤ211）、及び後円部の周溝（ＳＤ213）からなる前方後円墳を、**石動四本松遺跡４区ＳＴ217前方後円墳**と呼称する。以下に古墳の墳形・規模及び内部主体について、また、出土埴輪・土器からその築造時期について考える。

墳形・規模・内部主体について　今回得られた調査結果により墳形・規模の推定の手がかりとなる点は、くびれ部から後円部南東付近までの間隔、及びくびれ部を中心とした場合の、後円部に対する前方部の開き具合の大きく２点である。この点に着目して墳形の復元を行ったところ、図28のように考えられる。このうち，問題となるのは前方部長、前方部幅、くびれ部幅の数値である。まず前方部長についてはNo１トレンチ内では端部が確認されていないことから、トレンチ外のさらに西側に想定されるが、現状ではNo１トレンチ上端から約３ｍの地点から傾斜の強い法面となっている。工事に伴って、この法面を開削する際、工事立会を行ったところ、周溝の痕跡については検出できなかったものの、埴輪の小片を含む、ＳＤ211・213の埋土と同質の黒色粘質土が確認されたことから、No１トレンチの西端からそう離れない位置に前方部端部の周溝が回りこんでいた可能性が高い。よって、図化した位置より数ｍ程度前方部が西側に伸びる可能性もあるが、ほぼ図中の位置で前方部周溝を想定したい。おそらく、かつて前方部端部が巡っていたと想定される段丘肩部付近は、現状では後世の耕地化に伴い切り下げられているものと思われる。

次に北側くびれ部の位置についてであるが、これについてはレーダー探査の結果もひとつの手がかりとなる。これは調査期間中に天理大学によるレーダー探査を受ける機会を得たもので、農道の北側の田面（地番2050）に

ついて調査を行ったところ、北側くびれ部に想定される付近で硬い埋蔵物の存在が明らかとなっている。可能性としてＳＤ211と同様、埴輪・円礫が密集して存在していることが考えられるが、地表面から検出面までが１ｍ以上と深いこともあり十分な探査までは至らず、今後改めて調査の機会を設け、より深く、広範囲の探査を実施する必要がある。

上記の点から墳丘規模を予想すれば、墳長約50ｍ前後、後円部径約32ｍ前後、前方部長約18ｍ前後と考えられ、さらに推定を重ねると、前方部幅約25ｍ程度、くびれ部幅約14～15ｍ程度と想像される。墳形は主軸を東西方向にとり、前方部を西に向けるもので、推定値に基づくと後円部長と前方部長の比率が1.78／1、後円部径と前方部幅の比率が1.28／1程度と、後円部に比べ前方部が比較的短く、端部が大きく開かないものと考えられる。

また、墳丘盛土については耕地化による削平を受けて全くといって言い程遺存していないが、№１トレンチ北壁において、地山Ⅰ上に地山Ⅱと同質の褐色粘質土が厚さ0.15～0.2ｍで見られ、墳丘二段目盛土の名残である可能性が考えられる。なお、№１トレンチのくびれ部、№５トレンチの西端付近で確認された後円部最下段は周溝底面との比高差0.5ｍと低いもので、かつ、盛土を行っている様子も見受けられない。おそらく墳丘最下段については盛土を行わず、周溝との段差により表されるものと考えられる。

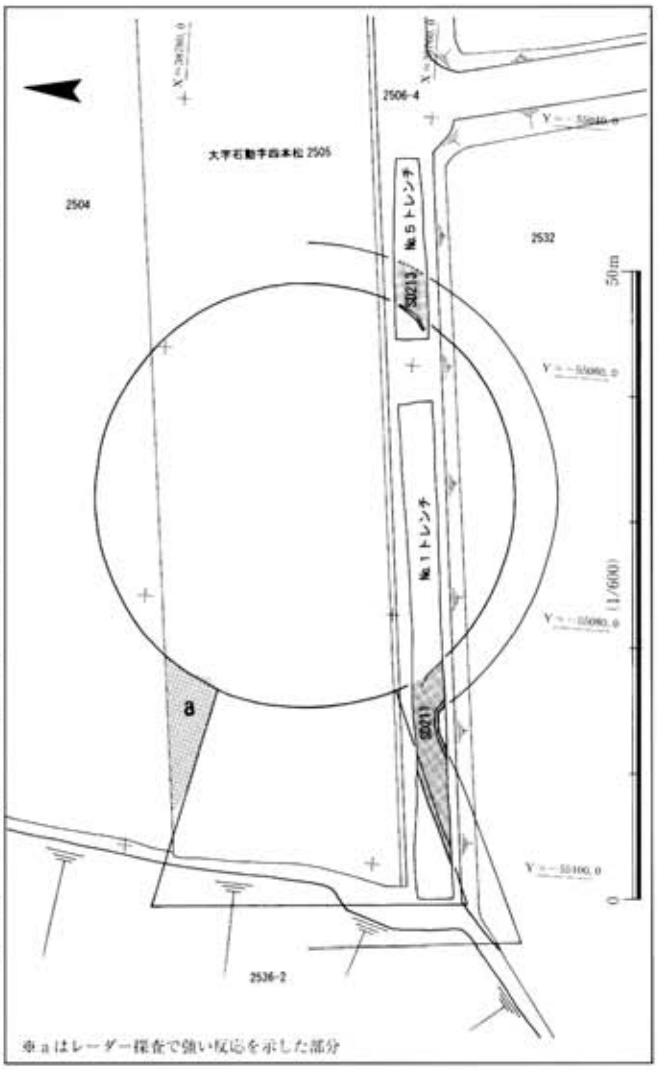


図28　ＳＴ２１７前方後円墳墳形復元図

なお、本古墳の墳丘改変・削平に至るまでの過程を少し考えると、明治中頃の地籍図やほ場整備前の地形図において、かろうじて古墳が存在していた手がかりが見られるようである。図29の左図は明治21年前後に調製された地籍図[6]であり、後円部に相当する位置に横長の地割が見られ、さらにその東側・南側を取り巻くように地割が巡り、南側から伸びる水路もこの地割に沿って東側を迂回して再び北側に続いている。この横長の地割は石室部分に相当すると思われ、石室とその周囲の二段目以上の墳丘部分のみが高まりとして遺存していた可能性が考えられる。一方、前方部に相当する部分では斜め方向の地割が走っており、既に前方部としての地割は完全に失われているようである。次に図29の右図はほ場整備前の地形図であり、前述の横長の地割は方形の地割へと変わり、東西方向からの拡張が及んでいることが見てとれる。当時の空中写真ではこの方形区画が特に周辺より一段高い様子は見られず、全面が水田となっており、石材等の露出も見られない。これらのことから、本古墳は既に明治時代の中頃までには、耕地化により墳形も定かでないほど削平を被っていたことが予想される。

なお内部主体については横穴式石室が想定されるが、石室が位置すると思われる後円部中心部では、レーダー探査により若干の石材の存在が予想されるものの、詳細については明らかではない。しかし、№１・２トレンチ

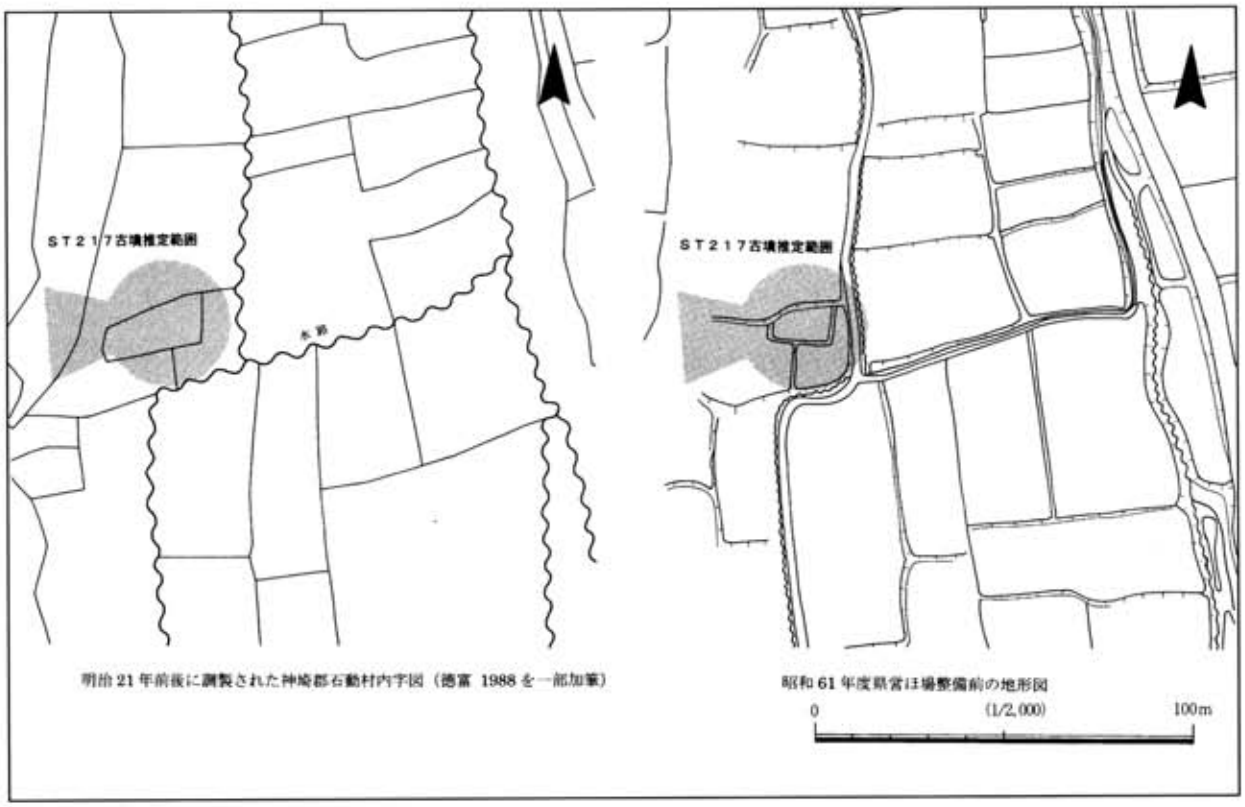


図29　ＳＴ２１７古墳周辺地籍・地割図

の調査では墓道は確認されておらず、少なくとも墳丘南側に切り通し状の墓道を伸ばすものではないようである。なお、西側法面の中段付近で花崗岩の大石数石が集積されており、そのうちの１石は、長さ２ｍ、幅1.5ｍを測る横長の石材で、石室の石材として使用されていた可能性がある。

築造時期について　周溝内から出土した円筒埴輪は、窖窯焼成で、タテハケ一次調整のみ施すものが主体である点、成形が粘土巻き上げで器壁が厚手のものが多い点、タガが断面台形で突出度が低い点等の諸特徴から、いわゆる川西編年[7]Ｖ期の範疇に位置付けられる資料である。しかし、外面のタテハケメが非常に細かく丁寧である点、タガの突出度は比較的高くないものの、つぶれぎみに退化するまでは至ってない点、基底部端部付近の歪みがなく成形が丁寧である点、また朝顔形埴輪の肩部が張っている点などから、佐賀県下でＶ期に相当する資料の中でも相対的に古い要素を備えている。加えて、タテハケ後に横位の調整を部分的に施すもの（**2・15・16・18・35**）が見られる点や、１点のみの出土であるものの、明確にＡ種ヨコハケによる二次調整を施す例（**30**）が認められるなど、前段階（Ⅳ期）の要素も見え隠れする。

一方、佐賀県下において明確にヨコハケ二次調整を施すⅣ期に位置付けられる資料としては、佐賀市西原古墳・大和町久池井一本松Ｃ遺跡ＳＴ01[8]などがあるが、Ｖ期の資料に対して圧倒的に少ないため、その様相についてはほとんど明らかではない。しかし、久池井一本松Ｃ遺跡ＳＴ01例はタテハケ一次調整のみのものとヨコハケ二次調整を施すものの両者が並存しており、形態・法量等の諸特徴も本古墳出土例と類似する点が見られる。よって現時点では、本古墳出土の円筒埴輪は、川西編年Ｖ期の中でも一部にⅣ期の様相を残す、最も古い段階と位置付けるのが適当であろう。

また、出土土器のうち、須恵器は５世紀中頃段階（甕、ＴＫ216並行期）、５世紀末～６世紀初頭（器台・壺、ＴＫ23～46並行期）の２時期に分かれ、土師器は５世紀前半～中頃に位置付けられる。このうち、ＴＫ216並行

表２　石動四本松遺跡４区出土埴輪観察表

図－番号	県遺物登録番号	遺構番号	種別	法量(cm)	色調	焼成	残存度	調整	備考
17－1	01001755	SD211	普通円筒	① 50.5 ② 30.0 ③ 18.5	橙色 (Hue5YR6/6)	良好	底部と胴部一部欠損、口縁部1/3欠損	外面タテハケ一次調整、内面胴部～基底部ナデ、口縁部ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	・口縁部内面に線刻有り　・二段目、三段目にスカシ孔有り
2	01001757	〃	〃	① 47.0 ②(28.0) ③(20.0)	明赤褐色 (Hue2.5YR5/6)	不良	口縁部～底部の全形約1/2弱	〃　、胴部三段目にはタテハケ後、ヨコナデを施した調整痕が見られる。	・二段目、三段目にスカシ孔有り
3	01001760	〃	〃	①(37.6) ② － ③ 19.5	黄橙色 (Hue7.5YR7/8)	良好	底部～基胴部にかけて約2/3残存	外面タテハケ一次調整、内面胴部～基底部ナデ	・二段目、三段目にスカシ孔有り
4	01001733	〃	〃	①(31.0) ② － ③ 21.7	橙色 (Hue5YR7/6)	不良	底部～基胴部にかけてほぼ残存、基底部の1/4を欠損	外面タテハケ一次調整、内面胴部～基底部ナデ	・二段目、三段目にスカシ孔有り
18－5	01001756	SD213	〃	① 48.7 ② 31.0 ③(17.0)	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	口縁部一部欠損、胴部・基底部1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面胴部～基底部ナデ、口縁部ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	・二段目、三段目にスカシ孔有り
6	01001765	SD211	〃	①(10.7)	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	口縁部の一部	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ	
7	01001766	〃	〃	①(20.7) ②(23.1)	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	口縁部～胴部の1/8残存	外面タテハケ一次調整、内面口縁部ヨコハケ、胴部ナデ	
8	01001767	SD213	〃	①(8.4) ②(27.7)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	口縁部の1/5	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	・外面に×印形の線刻有り
9	01001764	SD211	〃	①(21.0) ②(30.0)	橙色 (Hue5YR6/8)	良好	口縁部～胴部の1/6	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	・口縁部内面に線刻有り
10	01001763	〃	〃	①(23.6) ②(30.3)	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	良好	口縁部～胴部の1/4	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・口縁部内面にS字形の線刻有り
11	01001762	〃	〃	①(20.4) ②(31.4)	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	口縁部の1/4	外面タテハケ一次調整、内面口縁部ヨコハケ、胴部ナデ	・外面及び口縁部内面に赤色顔料塗布
19－12	01001758	〃	〃	①(40.5)	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	胴部の1/3残存	外面タテハケ一次調整、内面口縁部ヨコハケ、胴部ナデ	・二段目、三段目にスカシ孔有り
13	00001053	〃	〃	①(17.3)	橙色 (Hue5YR6/8)	良好	胴部の1/3残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り
14	00001049	〃	〃	①(16.6)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	胴部の1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り
15	01001761	〃	〃	①(27.6)	橙色 (Hue5YR6/8)	良好	口縁部下～胴部二段目までの全周が残存	外面タテハケ一次調整・胴部三段目タテハケ後にヨコナデ、内面口縁部ヨコハケ、胴部ナデ	・三段目にスカシ孔有り
16	00001052	〃	〃	①(15.7)	橙色 (Hue5YR7/8)	良好	口縁部下～胴部二段目までの全周が残存	外面タテハケ一次調整・タテハケ後にヨコナデ、内面ナデ	
17	00001050	〃	〃	①(13.7)	橙色 (Hue5YR6/8)	良好	胴部の1/2残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り
18	01001729	〃	〃	①(14.0)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	胴部の1/5残存	外面タテハケ一次調整・タテハケ後にヨコナデ、内面ナデ	・スカシ孔有り
20－19	01001726	〃	〃	①(13.5)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	不良	胴部の1/6残存	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	・スカシ孔有り ・外面赤色顔料塗布
20	01001744	〃	〃	①(10.9)	橙色 (Hue7.5YR6/8)	不良	胴部の1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り
21	01001731	〃	〃	①(13.2)	橙色 (Hue5YR6/8)	良好	胴部の1/5残存	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	

①は高さ［(　　)は残存値］、②は口径［(　　)は復元値］、③は底径［(　　)は復元値］

表２　石動四本松遺跡４区出土埴輪観察表

22	00001054	〃	〃	①(12.7)	橙　色 (Hue7.5YR7/6)	良好	胴部の1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
23	00001049	〃	〃	①(16.6)	橙　色 (Hue7.5YR7/6)	良好	胴部の1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
24	01001732	〃	〃	①(9.1)	橙　色 (Hue7.5YR7/6)	不良	胴部の1/6残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り
25	01001745	〃	〃	①(11.3)	橙　色 (Hue5YR6/8)	良好	胴部の1/6残存	外面タテハケ一次調整、内面ハケメ・ナデ	・スカシ孔有り
26	00001044	〃	〃	①(10.1)	橙　色 (Hue5YR7/8)	良好	胴部の1/7残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
27	01001746	〃	〃	①(15.3)	橙　色 (Hue7.5YR7/6)	不良	胴部の1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・タガを挟んで上下にスカシ孔有り
28	01001742	〃	〃	①(17.6)	にぶい橙色 (Hue5YR7/3)	不良	胴部小片	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	
29	01001743	〃	〃	①(12.7)	橙色 (Hue5YR7/8)	良好	胴部小片	外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ・ナデ	
30	01004635	〃	〃	①(13.0)	橙色 (Hue5YR6/6)	良好	胴部小片	外面Ａ種ヨコハケ二次調整、内面ナデ	
21－31	01001753	〃	〃	①(27.0) ② — ③ 23.3	橙色 (Hue5YR7/8)	良好	基底部から二段目タガまで残存、底部一部欠損	外面タテハケ一次調整、内面ナデ、底部底面にヘラ状工具による調整痕	・二段目、三段目にスカシ孔有り
32	01001736	〃	〃	①(26.2) ② — ③ 21.2	橙色 (Hue5YR7/8)	不良	基底部から二段目タガまで残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
33	01001728	〃	〃	①(26.2) ② — ③ 20.7	橙色 (Hue2.5YR6/8)	不良	基底部から二段目タガまでの約1/4残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
34	01001735	〃	〃	①(21.5) ② — ③ 19.6	橙色 (Hue2.5YR6/8)	良好	基底部から胴部二段目中央部にかけて約1/2残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
35	01001740	〃	〃	①(17.7) ② — ③ 20.0	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	基底部から胴部二段目中位までの約1/4残存、底部の約1/6欠損	外面タテハケ一次調整、胴部二段目はタテハケ後に横位のナデを施す、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
36	01001739	〃	〃	①(18.5) ② — ③ 21.6	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	基底部から胴部二段目中位まで残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り ・基底部及び底部外面に横位の浅く細い沈線が巡る。
37	01001734	〃	〃	①(15.9) ② — ③ 21.3	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	基底部から胴部二段目中位までの残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
22－38	01001741	〃	〃	①(21.4) ② — ③ 20.1	橙色 (Hue7.5YR6/8)	良好	基底部から胴部二段目中位まで残存、底部は1/2欠損	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
39	00001007	〃	〃	①(19.7) ② — ③ 24.0	橙色 (Hue5YR7/6)	良好	基底部から胴部二段目中位まで残存、底部は3/4欠損	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
40	01001738	〃	〃	①(18.7) ② — ③ 20.5	橙色 (Hue5YR7/8)	良好	基底部から胴部二段目中位まで残存	外面タテハケ一次調整、タガ部にヨコナデによる横位の条線がみられる、底部端部外面にヨコナデを施す、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
41	00001008	〃	〃	①(17.7) ② — ③ 21.0	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	良好	基底部から胴部二段目中位まで残存、底部は1/2欠損	外面磨耗により調整痕不明、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
42	00001002	〃	〃	①(22.3) ② — ③(23.3)	橙色 (Hue5YR6/6)	不良	基底部から胴部二段目中位までの約1/2が残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	・スカシ孔有り

①は高さ［(　　) は残存値］、②は口径［(　　) は復元値］、③は底径［(　　) は復元値］

表２　石動四本松遺跡４区出土埴輪観察表

43	00001006	〃	〃	①(15.6) ②— ③(18.8)	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/4)	良好	基底部から一段目タガ部付近まで残存、底部は約1/8強残存	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
44	00001011	〃	〃	①(18.0) ②— ③(17.5)	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	不良	基底部から胴部二段目中位までの約1/2が残存	基底部外面縦方向ナデ、ほか磨耗のため調整不明、内面ナデ	・二段目にスカシ孔有り
45	00001004	〃	〃	①(10.6) ②— ③—	橙色 (Hue5YR6/6)	不良	基底部の一部	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	
46	00001014	〃	朝顔形	①(7.3) ②— ③(19.5)	橙色 (Hue5YR6/6)	不良	基底部から一段目タガ部付近まで残存、底部は約1/8強残存	外面タテハケ一次調整、底部端部外面ヨコナデ、内面ナデ	
23−47	01001752	〃	〃	①(4.6) ②— ③—	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	不良	朝顔部の部分片	外面タテハケ、内面ヨコハケ？	・上端部は疑口縁となり、内面に接合用の沈線がある。
48	01001751	〃	〃	①(5.8) ②— ③—	橙色 (Hue7.5YR7/6)	不良	朝顔部の部分片	外面タテハケ、内面ヨコハケ	・上端部は疑口縁となり、内面に接合用の沈線がある。
49	01001748	〃	〃	①(10.2) ②— ③—	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	良好	肩部から胴部、朝顔部を欠く	外面タテハケ、内面ヨコハケ	・肩部下一段目に円形スカシ孔あり
50	01001750	〃	〃	①(9.3) ②— ③—	浅黄橙色 (Hue10YR8/4)	良好	頸部の部分片	朝顔部外面タテハケ一次調整、胴部肩部磨耗により不明、内面ヨコハケ・ナデ	
51	01001749	〃	〃	①(10.5) ②— ③—	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	良好	肩部から胴部、朝顔部を欠く	外面磨耗により不明、内面ナデ	
52	01001737	〃	〃	①(27.5) ②— ③—	橙色 (Hue7.5YR7/6)	不良	肩部から胴部、受部を欠く	外面肩部はヨコハケ、胴部はタテハケ、内面ナデ	・肩部下一段目、二段目タガに円形スカシ孔あり
53	01001759	〃	〃	①(39.5) ②— ③—	橙色 (Hue5YR6/8)	不良	受部の下半部から肩部から胴部、受部を欠く	受部外面タテハケ、外面肩部は調整不明、外面胴部はタテハケ、受部内面ヨコハケ、頸部から胴部内面はヨコナデ	・肩部下一段目に円形スカシ孔及び動物形の線刻あり
24−54	01001770	〃	形象 (人物)	長さ (10.6) 幅(7.4)	黄橙色 (Hue7.5YR8/8)	不良	人物の肩部から上腕部（左腕）の一部	全面ナデ	・中空である。
55	01001771	〃	形象 (人物)	長さ (11.3) 幅(5.4)	黄橙色 (Hue7.5YR8/8)	不良	人物腕、左腕の関節部分か？	全面ナデ	・中空である。 ・一部粘土の接合痕が見られる。
56	01001768	〃	形象 (馬形)	長さ (11.5) 幅(10.9)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	馬形の鞍の一部、後輪にあたる部分は欠損、尻繋が僅かに残存	内外面ナデ、内面ユビナデ痕がみられる	・革の表現として長方形の刺突文が施される。
57	01004639	〃	形象 (鳥形?)	長さ(7.8) 幅 (5.1)	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良好	鳥形の羽の一部か？	全面ナデ	・片面に平行する細い線刻が13条みられる。
58	01004636	〃	形象 (鳥形?)	長さ(5.9) 幅 (2.8)	橙色 (Hue5YR6/6)	良好	鳥形の羽の一部か？	全面ナデ	・片面に5条の線刻がみられ、そのうち4本は平行し、1本は方向を違える。

①は高さ［(　　)は残存値］、②は口径［(　　)は復元値］、③は底径［(　　)は復元値］

表２　石動四本松遺跡４区出土埴輪観察表

59	01001769	〃	形象 (鳥形?)	長さ (10.2) 幅(8.5)	橙色 (Hue5YR6/6)	良好	鳥形の尾羽か？	表面に細かいハケメ、裏面はナデで部分的に指頭圧痕がみられる。	・片面（表面）に線刻がみられる。
60	01004630	〃	形象 (不明)	長さ(7.0) 幅　(6.0) 厚さ(2.0)	橙色 (Hue7.5YR8/6)	不良	器種・部位不明	全面ナデ	・片面（表面）に細い線刻による綾杉状の文様と、これと斜めに交錯する線が描かれる。
25－61	01004629	〃	形象 (不明)	長さ (10.5) 幅（7.5） 厚さ3.5	橙色 (Hue7.5YR7/6)	良	器種・部位不明	外面ナデ、内面ナデ・一部ハケメ	・外面に突帯状に粘土紐を貼り付ける。
62	01004633	〃	形象 (不明)	長さ(6.4) 幅　(4.4) 厚さ(1.2)	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	良好	器種・部位不明	内外面ナデ	
63	01004632	〃	形象？ (不明)	長さ(5.5) 幅　(6.9) 厚さ(1.3)	浅黄橙色 (Hue7.5YR7/6)	良	器種・部位不明	片面ハケメ、内面ナデ	
64	01004638	〃	形象？ (不明)	長さ(6.4) 幅　(4.4) 厚さ(1.2)	浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	不良	器種・部位不明	片面ナデ、片面には沈線が連続して施され、粘土を接合しやすくしたものと思われる。	

石動四本松遺跡４区全景（南から）

石動四本松遺跡４区全景（上方が北）

図版６　石動四本松遺跡４区①

ＳＤ２１１溝跡全景（北東から）

ＳＤ２１１溝跡全景（上方から、左が北）

№5トレンチ全景（上方から、左が北）

図版７　石動四本松遺跡４区②

調査区近景（東から）

ＳＤ２１１埴輪出土状況（くびれ部南東から）

ＳＤ２１１埴輪出土状況（くびれ部北東から）

ＳＤ２１１埴輪出土状況（くびれ部南から）

ＳＤ２１１埴輪出土状況（くびれ部近景）

ＳＤ２１１土層（くびれ部南壁）

ＳＤ２１１円礫・埴輪出土状況（前方部、北から）

ＳＤ２１１円礫・埴輪出土状況（前方部、北から）

図版８　石動四本松遺跡４区③

ＳＢ２１４及びくびれ部付近（西から）

ＳＢ２１４検出状況（北から）

No.１トレンチ西端部付近北壁（南から）

No.５トレンチ全景（西から）

ＳＤ２１３検出状況（東から）

ＳＤ２１３西側（後円部最下段墳丘部分）

ＳＤ２１３土層（No.５トレンチ南壁）

調査区西側法面花崗岩集石状況（南から）

図版９　石動四本松遺跡４区④

図17－1

図17－2

図18－5

図23－53

図版10　石動四本松遺跡４区⑤

図19－12

図19－15

図17－4（左）、　図17－3（右）

図21－31（左）、　図21－32（右）

図21－34（左）、　図21－35（右）

図21－37（左）、　図22－40（右）

図版11　石動四本松遺跡４区⑥

図23－52

図17－１の基底部外面調整

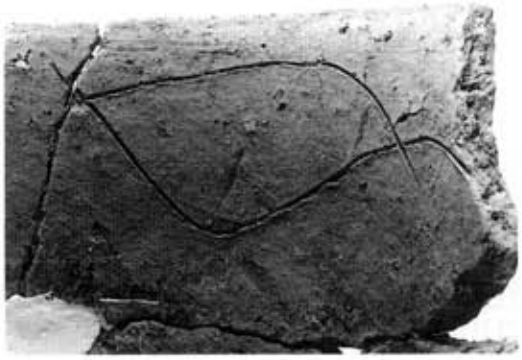


図17－１の口縁部内面線刻

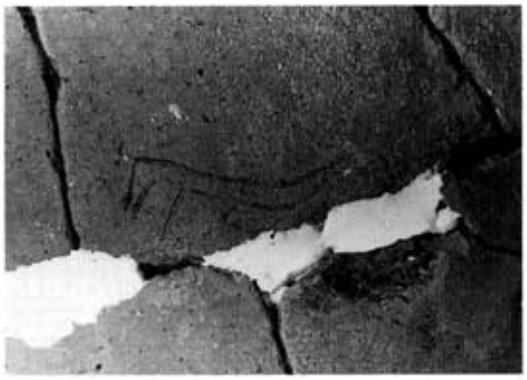
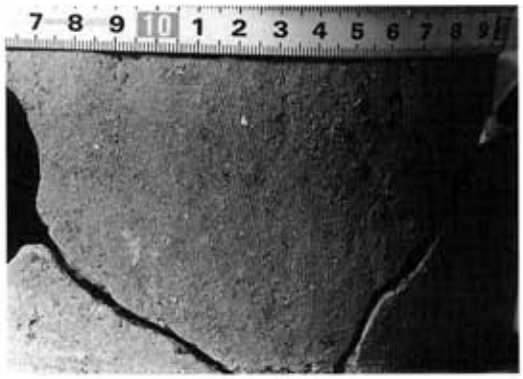
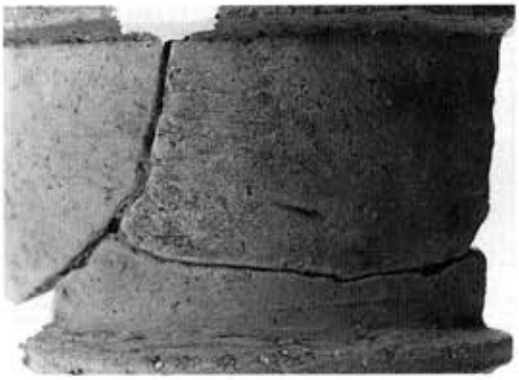


図23－53の胴部外面動物形線刻



目の細かいハケメ

目の粗いハケメ



一次調整（タテハケメ）後の横位のナデ調整

突帯貼付け用目印の沈線

図版12　石動四本松遺跡４区⑦

図20－30

粘土紐接合補強用線刻(図23-48)

図24－55(表面)

図24－55(裏面)

図24－54(左)、　図24－55(右)

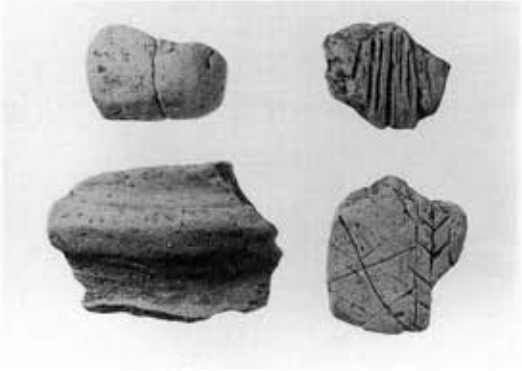
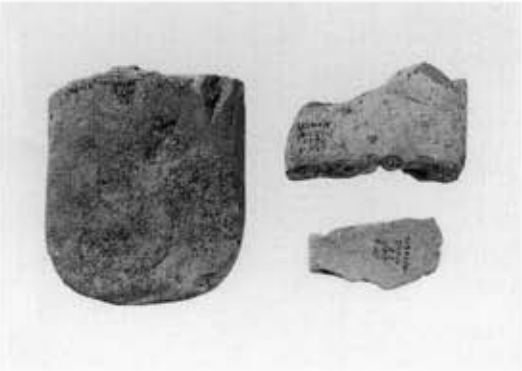


図25－63(左上)、61(左下)、64(右上)、図24－60 (右下)

図24－59(左)、57(右上)、58(右下)〔表面〕



同〔裏面〕

図版13　石動四本松遺跡４区⑧

期の甕は土師器と同じく竪穴住居ＳＢ214に伴うものである可能性があり、ＴＫ23～46並行期の器台・壺をＳＴ217前方後円墳に伴う遺物と考えることができる。このことは、埴輪の年代観ともほぼ合致する。よって、ＳＴ217前方後円墳の築造時期については、おおよそ５世紀末～６世紀初頭、前方後円墳集成編年８期の所産と考えたい。この時期には目達原古墳群では、大塚古墳（５世紀後半）→塚山古墳（５世紀末）→古稲荷塚古墳（５世紀末～６世紀初頭）→稲荷塚古墳（６世紀前半）の首長墓系譜が続いており、同じ城原川・田手川流域内における別の地域で、６世紀を前後する時期、墳長50mといった遜色のない規模を持つ前方後円墳が築造されていることが明らかとなった。またその一方で、６世紀中頃以降には下三津西古墳、伊勢塚古墳からなる志波屋古墳群が形成される一方、ＳＴ217前方後円墳に後続する首長墓は周辺部では見られず、単発的な築造である印象を受ける。今回の調査は開発事業に伴う緊急的な確認調査であり、また調査範囲も狭く、調査成果についても今後の調査により修正を要する部分が生じ得るのも事実である。本古墳の存在は当地域における首長墓の変遷についての新たな解釈を要するものであり、引き続き、広範囲の確認調査及びレーダー探査等の実施による十分な調査が必要である。

謝辞）出土埴輪・須恵器の検討にあたっては、蒲原宏行氏（佐賀県立博物館）に指導・助言を頂いた。また、形象埴輪については、小栗明彦氏（奈良県立橿原考古学研究所）・青柳泰介氏（　同　）に御教授頂いた。記して感謝致します。

註１）細川金也 1995　「石動四本松遺跡」東脊振村文化財調査報告書第19集　東脊振村教育委員会

２）徳富則久 編 1997　「佐賀県文化財年報２」 佐賀県教育庁文化財課

３）古川直樹 編 1998　「佐賀県文化財年報３」 佐賀県教育庁文化財課

４）調査対象地周辺に残る「フトツカ」の地名については、服部英雄氏による佐賀平野の地名調査においても確認されている。
（服部英雄 2001　「二千人が七百の村で聞き取った二万の地名、しこ名－佐賀平野の歴史地名地図稿－」 花書院）

５）田辺昭三 1966　「陶邑古窯跡群Ｉ」 平安学園考古クラブ
田辺昭三 1981　「須恵器大成」 角川書店

６）徳富則久 1998　「佐賀県地籍図集成二　肥前國 神埼郡一」佐賀県文化財調査報告書第109集　佐賀県教育委員会

７）川西宏幸 1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第４号

８）田平徳栄 1989　「久池井一本松Ｃ遺跡」『礫石遺跡』 佐賀県教育委員会

(3)　脊振村

調査対象地区名　　県営中山間地域総合整備　脊振地区

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　神埼郡脊振村大字服巻字苗代田

調査対象面積　　延長 340m

調査対象地区の立地　脊振村の中央部のやや北寄り、周囲を脊振山系の山々に囲まれ、城原川に開析された小平野に位置する。調査対象地の背面にはやや急峻な丘陵が連なり、対象地は平野部と接する付近の丘陵裾部で、標高約350mである。現況は水田。

周辺の遺跡及び内容　調査対象地の南側には縄文時代の散布地である大作遺跡が隣接するが、発掘調査は行なわれておらず、そのほか付近での調査例はない。中世には服巻の地名の由来となる「腹巻氏」なる在地土豪が居住しており、中世末期には神代氏の勢力下に入ったとされる。腹巻氏の居城したとされる腹巻山城については詳細

図30　佐賀西部地区調査地位置図（1/50,000）

1　金立東部地区（佐賀市）　　2　瓦川内地区（多久市）　　3　佐賀西部導水路（小城町）
①　石土井遺跡３・４・５・６区　②　上九郎遺跡２区　　③　八ツ溝遺跡

不明である。

調査方法及び内容　工事は現況農道の拡幅であり、対象地内に３箇所の試掘坑を設定、人力により掘り下げを行ない、遺跡の有無を確認した。調査の結果、いずれのトレンチにおいても遺構は確認されなかった。出土遺物としては耕作土直下から土師器小片２点が出土したのみで、中世～近世の小皿？片と鍋の小片と思われる。調査結果から３箇所のトレンチのうち、２箇所については昭和63年度のほ場整備の際、削平を被っており、もう１箇所については湧水が著しいことから谷部にあたるものと考えられる。

所　　見　遺跡の存在している可能性は低く、工事については支障ないものと判断される。

２．佐賀西部地区の調査

(1)　佐賀市

調査対象地区名　　県営ほ場整備事業 金立東部地区

調査対象地遺跡名　　石土井遺跡・上九郎遺跡・薬師丸五本柳遺跡・園田遺跡

調査対象地所在地　　佐賀市金立町大字薬師丸字四本柳ほか

調査対象面積　　19ha

調査対象地区の立地　調査対象地は佐賀市北部に位置し、巨勢川中流域の東岸に相当する。脊振山地南麓の洪積台地へと続く低位段丘上に立地し、現況は上九郎の集落の北側及び東側を取り巻く水田及び畑地で、標高４～５ｍである。

周辺の遺跡及び内容　周辺の遺跡としては調査対象地の西側、巨勢川西側には東名遺跡、北東側には下和泉一本椎遺跡、周辺の遺跡としては調査対象地の南西側、巨勢川西側には東名遺跡、東側には下和泉本椎遺跡・下和泉一本椎遺跡、北西には村徳永遺跡が存在する。東名遺跡では縄文時代早期の集石遺構・埋葬人骨、平安時代の用水路などが、下和泉一本椎遺跡では弥生時代中期後半・古墳時代前期～中期の集落など、村徳永遺跡では弥生時代後期後半の大規模な集落、中世の方形区画溝等が検出されている。

また近接する遺跡としては南西350ｍ付近に縄文時代晩期～弥生時代前期初頭の遺物包含層が確認された薬師森遺跡があるほか、平成10～12年度には同事業に伴い上九郎・石土井遺跡の発掘調査が実施され、上九郎遺跡では弥生時代及び中世の集落跡を、石土井遺跡では弥生時代の集落跡、平安時代・中世の溝跡などが確認されており、遺跡の密度が極めて高い地区である。

調査方法及び内容　調査対象地のうち、工事によって影響を受ける水路及び切り土部分（高畑）についてトレンチＡ１～Ａ78、Ｂ１～81、Ｃ１～Ｃ13を設定した。各トレンチで遺構・遺物の有無を確認した後、土層略図・平面略図を作成、写真撮影等の記録保存を実施した後に埋め戻しを行った。トレンチＡ33・Ａ37・Ａ39～Ａ42・Ａ44・Ａ46・Ａ49・Ａ50・Ａ60・Ａ66・Ａ72・Ａ73・Ａ75～78、Ｂ１・Ｂ３～５・Ｂ７～９・Ｂ11・Ｂ13・Ｂ15・Ｂ20・Ｂ21・Ｂ24・Ｂ29～Ｂ37・Ｂ39～41・Ｂ51・Ｂ60・Ｂ64・Ｂ65・Ｂ67・Ｂ68・Ｂ74・Ｂ75、Ｃ３・Ｃ５・Ｃ９・Ｃ10で遺構を検出した。遺構の密度は比較的高く、その内容は土壙・溝・柱穴・小穴などで、出土遺物としては弥生土器・土師器片・須恵器片・瓦器片等が出土した。

所　　見　調査対象地で約128,000㎡の遺構の広がりを確認した。遺構の広がりの西北部では弥生・古代・中世の遺構、南側から東側にかけては弥生～古墳時代の遺構が主体と考えられる。遺跡の現状保存が困難な部分については本調査が必要である。

図31　佐賀市：金立東部地区トレンチ配置図

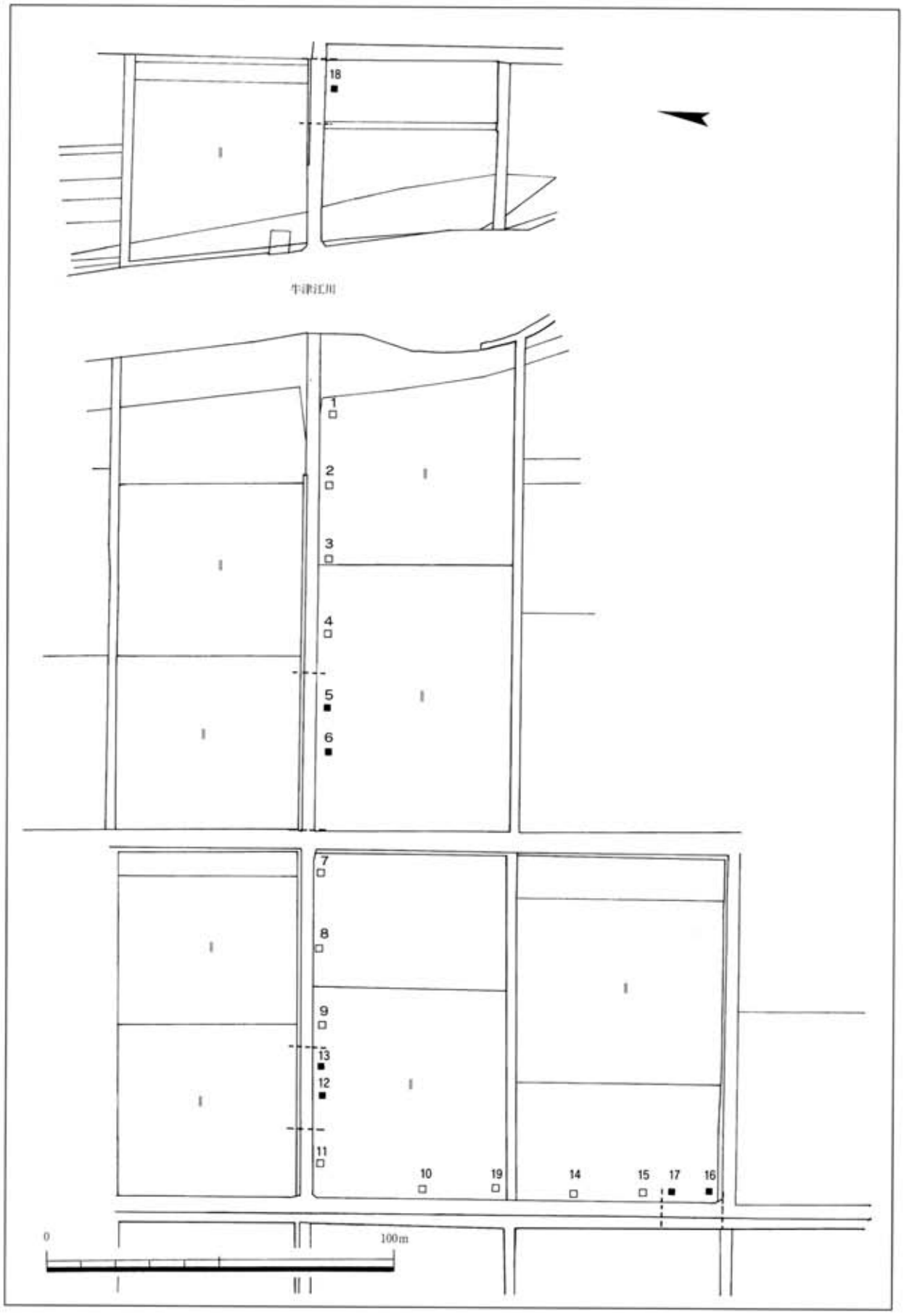


図32　小城町：佐賀西部導水路トレンチ配置図

(2) 多久市

調査対象地区名　基盤整備事業 瓦川内地区

調査対象地遺跡名　周 知 外

調査対象地所在地　多久市多久町大字長尾字瓦川内

調査対象面積　4.0ha

調査対象地区の立地　多久市の南部、牛津川に合流する瓦川内川によって形成された扇状地性の平野部にあたり、対象地の標高は約35～40mである。調査対象地は瓦川内川を挟んで東西に分かれており、現況は過去のほ場整備により切り盛りが実施され、水田及び畑地となっている。対象地の西側、丘陵部の裾部付近に瓦川内の集落が営まれている。

周辺の遺跡及び内容　瓦川内の集落から西側の尾根一帯は旧石器時代の散布地である瓦川内遺跡が存在するほか、これと対峙する東側丘陵上には旧石器時代の散布地、西の谷遺跡が立地するなど、丘陵上を中心に旧石器時代の遺跡が多く展開している

調査方法及び内容　対象地のうち、比較的旧地形を残していると予想され、なおかつ耕作物のない地点に対して試掘坑30箇所を設定し、掘削機により掘り下げを行なった。その結果、各トレンチで耕作土下より旧ほ場整備による造成土、あるいは造成土が見られない地点では扇状地性の堆積層である礫層・粘土層が確認されたが、遺構及び遺物包含層と思われる自然堆積層は確認されず、以前のほ場整備により旧地形が大きく損なわれていることが明らかとなった。また、出土遺物は耕作土中からもほとんど見られず、わずかにサヌカイト製剥片1点が出土したのみである。

所　　見　調査対象地の旧地形は河川を望む緩斜面であり、また周知の埋蔵文化財包蔵地も隣接することから遺跡の存在する可能性が予想されたが、確認調査の結果、以前のほ場整備により、かなり大規模に造成が行なわれていることが明らかとなり、遺跡の存在していた痕跡についても確認できなかった。

(3) 小城町

調査対象地区名　筑後川下流事業　佐賀西部導水路

調査対象地遺跡名　久蘇（くしょ）遺跡

調査対象地所在地　小城郡小城町大字畑田字轡ケ里

調査対象面積　0.4ha

調査対象地区の立地　小城町の南西部に位置する低平な水田地帯であり、大きくは祇園川と晴気川によって形成された扇状地の扇端付近の標高約６～７ｍに立地する。対象地は牛津江川によって東西に分けられ、近接する集落としては、北方500ｍに轡ケ里、北西500ｍには船田の集落がある。

周辺の遺跡及び内容　久蘇遺跡は昭和46年度の牛津江川鉱害復旧工事に伴う牛津江川付替工事の際発掘調査[1]が実施され（佐賀県教育委員会実施）、古墳時代中期の集落跡を始め、弥生時代中期・中世の遺構・遺物が確認されている。この調査では、古墳時代の竪穴住居や洗場等の遺構や、遺物としては通常の生活用土器類のほか土製模造鏡・ミニチュア土器などの祭祀関連のものや、勾玉・管玉などの玉類、多くの木製品が出土している。また、平成11，12年度には河川改修工事に伴い、今回調査区と一部交差する形で牛津江川の東岸沿い約1,500㎡について発掘調査[2]が行なわれ、弥生時代中期初頭～中期前半、古墳時代初頭、奈良時代～平安時代前期、中世後半期の各時代にわたる遺構が確認されている。このうち、弥生時代については久蘇遺跡周辺で初めて甕棺墓が確認さ

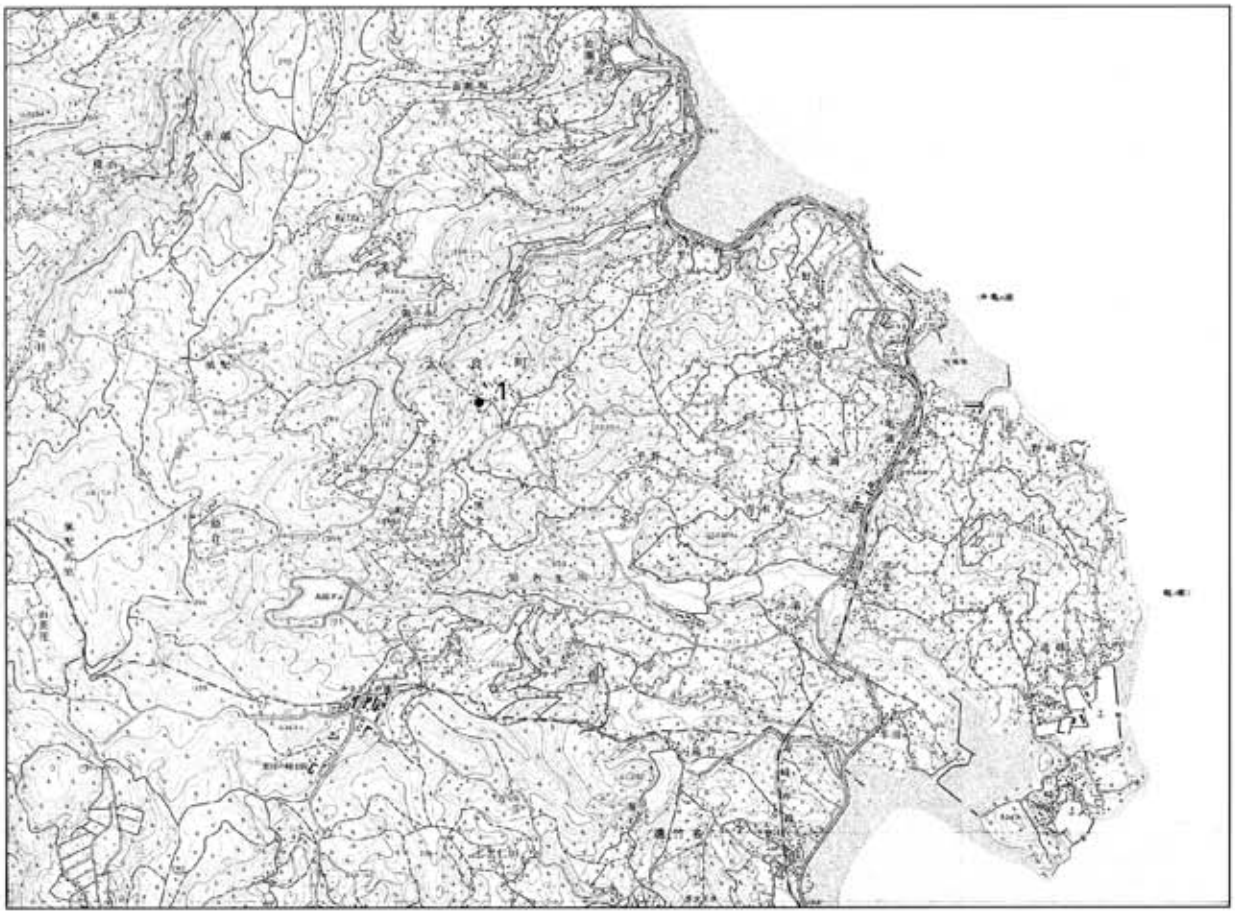


図33　佐賀南部地区調査地位置図（1　太良町：多良岳２期地区）〔1/50,000〕

れたほか、擬朝鮮系無文土器壺の一部が出土しており、隣接する三日月町土生遺跡と共に渡来系集団の居住を窺わせるものである。その他特徴的な遺物として古墳時代前期の線刻人物画を持つ土器片、古代の遺物として石帯などが出土している。

調査方法及び内容　工事は現況農道を開削して導水管を埋置するものであるが、農道については常時利用されているため路線内についての確認調査が困難であることから、南側あるいは東側に隣接する水田について試掘坑18本を設定した。掘り下げは掘削機によって行った。

確認調査の結果、№５，６，16～18トレンチで土坑・小穴を検出した。出土遺物としては、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・白磁等が見られ、弥生時代及び中世の集落の一部と考えられる。

所　　見　開発対象地全体に遺跡の存在が見られ、従来未周知であった、牛津江川以西及び広域農道以北まで久蘇遺跡の広がりが見られることが明らかとなった。

註１）佐賀県教育委員会「土生・久蘇遺跡」佐賀県文化財調査報告書第25集 1973

２）小城町教育委員会「久蘇遺跡―牛津江川広域基幹河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―」小城町文化財調査報告書第13集 2001

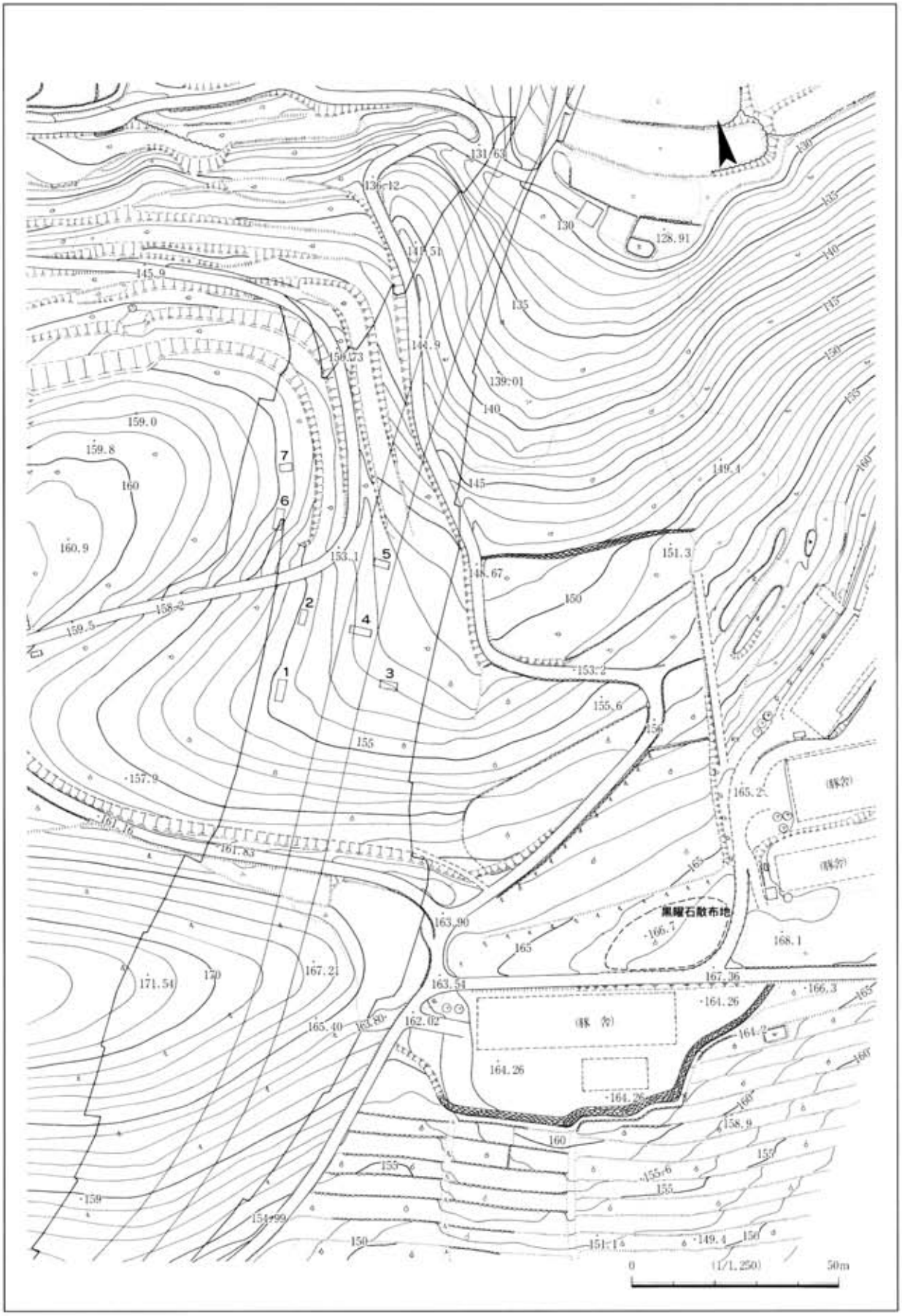


図34　太良町：多良岳２期地区トレンチ配置図

３．佐賀南部地区の調査

(1)　太良町

調査対象地区名　　広域営農団地農道 多良岳２期地区

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　藤津郡太良町大字大浦字長川良

調査対象面積　　延長 480m

調査対象地区の立地　対象地は太良町の南部、多良岳の東側に派生する、標高150～160mの丘陵地帯にあたる。周辺は多良岳から放射状に延びる裾野が侵食を受けて起伏に富んだ地形をなしており、対象地は西から北東方向に延びる尾根の北側斜面である。調査対象地は農道を挟んでＡＢＣの３地点に区分したが、微視的にはＡ・Ｂ地点が斜面から谷部にかけて、Ｃ地点は尾根上にあたる。現況は全面が蜜柑園となっている。調査対象地の遠く北側には休石川に開析された谷部を挟んで御手水の集落が対峙している。

周辺の遺跡及び内容　対象地から丘陵尾根に沿って東側に300m程離れた付近には、縄文時代の散布地である長川良遺跡が存在するが、現在は農場・蜜柑畑となっており、かなり地形的な改変を受けているようである。また、対象地の南東側の谷部を挟んで対峙する丘陵上には、同じく縄文時代の散布地である大谷平遺跡が立地している。

調査方法及び内容　広域農道が建設される範囲のうち、比較的旧地形を残していると予想される地点に対して試掘坑７本を設定し、掘削機により掘り下げを行った。その結果、いずれのトレンチでも地山を削って盛った造成土の下から基盤層を確認し、遺構及び遺物包含層と思われる自然堆積層は確認出来なかった。また遺物についても出土しなかった。

所　　見　Ａ地区においては造成土の厚さは谷部方向に向かってより厚くなっており、旧地形は現況より傾斜の大きい斜面であったと推定される。また、造成土の下部では基盤層が確認されたが、いずれも旧地形をある程度削った上で土を盛っていることが明らかとなり、大きく地形的改変を被っていることが予想される。今回、調査対象地の東側隣接地で黒曜石を数点採集したことから縄文時代の遺跡が周辺部に存在する可能性があるが今回の調査では確認できなかった。

４．佐賀北部地区の調査

(1)　相知町

調査対象地区名　　農林漁業用揮発油税財源身替農道 帆柱地区

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　東松浦郡相知町大字佐里字国有林101班

調査対象面積　　延長400m

調査対象地区の立地　対象地は相知町の北西部、岸岳（標高約313m）から南方に延びる標高約118m程の尾根上に位置する。北波多村との町境に近く、南東100mには相知町佐里上から坊中・久保方面に貫ける農免農道が開設している。現況は杉林であり地形的に旧状を留めているが、対象地のすぐ東側までは蜜柑園造成により開墾されている。

周辺の遺跡及び内容　岸岳の概ね標高250mから頂上尾根全体は松浦党主波多氏の居城である岸岳城が築かれている。岸岳城は堀切・竪掘・連続する曲輪群などの戦国時代的な要素を持ちつつも、切石による大規模な石垣や完成された虎口構造など近世城郭的な要素も備えているという点で中近世城郭研究史上重要視されており、平成

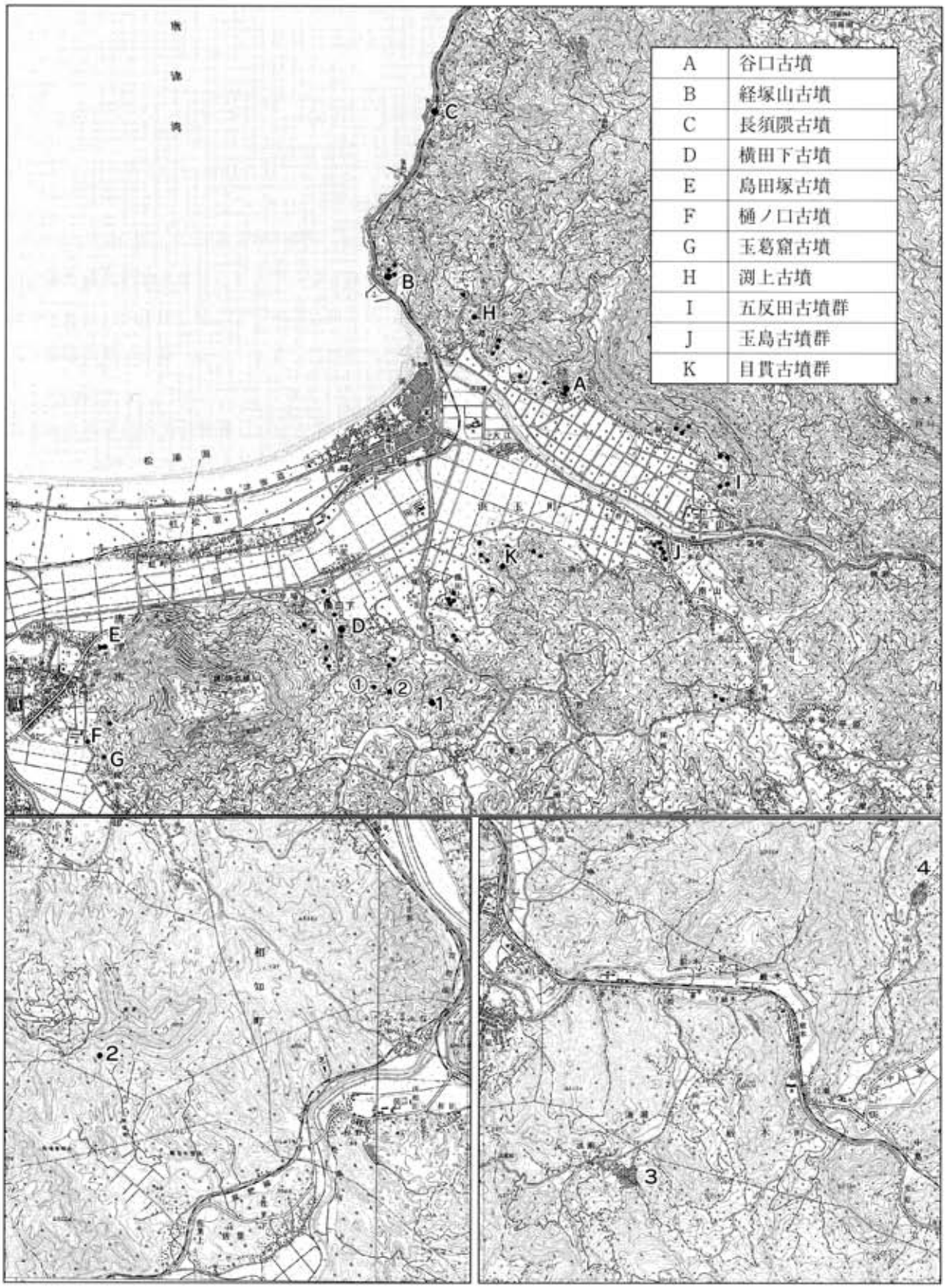


図35　佐賀北部地区調査地位置図（1/50,000）

1　浜玉町：ひれふり地区〔小山田古墳〕　2　相知町：帆柱地区　3　厳木町：浪瀬地区
4　厳木町：浦川内地区　①　大岩西遺跡Ａ区　②　大岩西遺跡Ｂ区

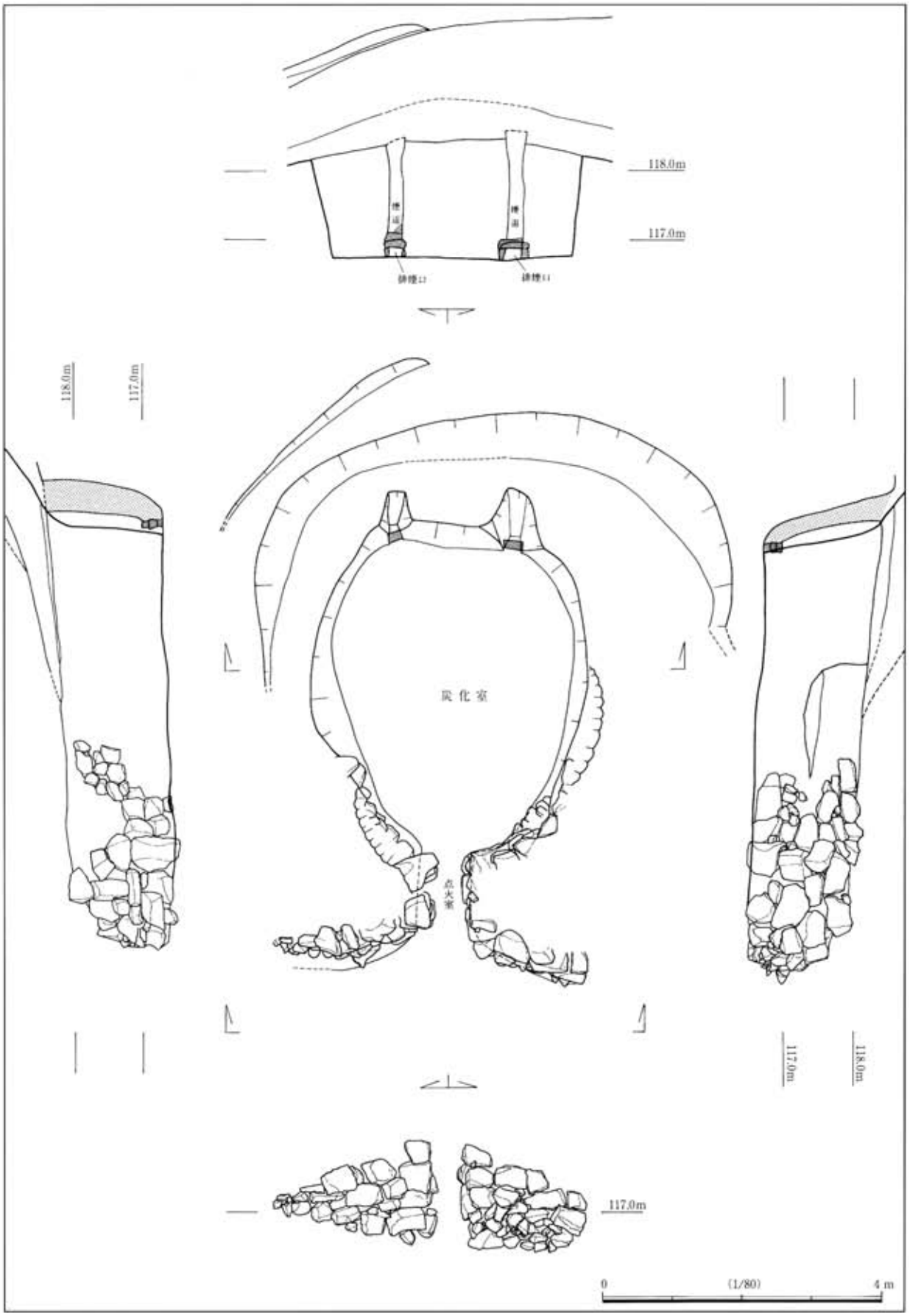


図36　相知町：帆柱地区炭窯

8年に県史跡となっている。今回、農道建設に伴い計画路線周辺については全面的に踏査を実施したが、岸岳城に関連するような遺構については確認されていない。しかし、町境の尾根を挟んだ北波多村側では標高200m付近まで延びる竪掘状の遺構が確認されており、今後踏査を重ねることによって対象地周辺のような山麓付近においても岸岳城関連の遺構が発見される可能性があろう。

調査方法及び内容　現地踏査を実施したところ岸岳城関連の遺構は確認されなかったものの、計画路線内に近代の炭窯1基が位置していることが明らかとなった。この炭窯については路線変更による保存が困難とされたことから、協議の結果、確認調査の範囲で記録保存を実施することとした。調査の方法としては工事に伴う樹木伐採後に地形測量を実施、窯内の清掃を行い、写真撮影・遺構実測を行なった。

炭窯はその長軸を尾根と平行にして立地しており、傾斜角約20度の斜面を切り込んで構築されている。窯の天井部については全て内部に崩落して失われているが、それ以外の窯壁・窯口などの下部構造については良好に遺存している。平面形は概ね楕円形で、奥壁寄りの幅が広く窯口側がやや狭い卵形を呈していると言える。平面規模は、炭化室は奥行4.4m、幅は最大3.5m、窯口の幅は約0.5mで、炭化室と窯口の間の長さ約1.2m程の細長い空間が点火室となる。

窯壁は奥壁側・窯口側共に1.5～1.7m程遺存しているが、表面は火熱を受けたためか硬く焼き締まっている。壁体の構築における特徴的な点として、窯口から点火室及び炭化室の一部にかけては石積みを伴い、そこから奥壁にかけては地山を掘り込んだ際の面をそのまま窯壁としていることである。また、窯口付近の石積みは4～6段程度に積み上げられており、横位に目筋が通ることからも、似通った大きさの石を用いて、比較的丁寧に積まれていることが分かる。この石積みは窯口より前庭部に向かっては左右に大きく開き、左壁側で約2.3m、右壁側で約1.6m程、段数を減じながら続く。記録後、石積みを除去した際観察したところ、これらの石積みは基盤層上に直接積み上げられ、窯口と前庭部側壁の石積みの間は盛土を行なって構築されていたことが明らかとなっている。煙道については奥壁に左右2つ配置されていた痕跡が確認されたが、いずれも排煙口は床面に板石（枕石）を垂直に立て、さらにその上に板石（掛石）を水平に架けることによって矩形に作られている。煙道は左側は約1.8m、右側は約1.9m遺存し、横断面形は筒状ではなく、ほぼ長方形をなしている。調査時には煙道の炭火室側の壁についてはすべて失われていたが、おそらくは掛石上に粘土を充填して壁としていたものと推定される。なお、窯体を掘り込んだ際、山側斜面を、窯壁上端から約1.5～2.5mの範囲で半弧状にカットしており、このカット面と窯壁上端との間が約1～1.5mの範囲でテラス状を呈している。このテラス部分が天井部の構築する際の土台となると共に、天井部構築後は後背面のカット部分と合わせて溝状をなし、排水の機能も果たしていたと推定される。

炭化室内部の状況についてであるが、調査前には内部は厚さ約0.3m程の埋土で占められており、これを除去したところ、窯底となる平坦面が検出された。窯底は窯の重要な部分でもあり丁寧に叩き締められていたが、床面下では排水溝やそれを目的とした竹の埋設などは確認されなかった。また、炭焼に関連する工具等の出土遺物も見られない。

なお、前庭部から東側にかけては斜面をカットして平坦面（長さ約15m、幅約4m）が作り出されており、炭焼の際の作業用スペースとして確保されたものであろう。

所　　見　この炭窯については地元での聞き取りにより昭和18年に造られ、昭和20年まで使用していたとされる。近代から現代に至る炭窯の調査については、近年、林道建設等の影響を受けるケースが生じてきたため、ようやく目が向けられてきたような状態にあり、資料的にも少しずつ増えてきたと言える。しかし、炭窯についての時

期的変遷や地域的な様態について考古学的な考証が行なえる程のデータとしては未だ少ないと言わざるを得ない。例えば平成９年度には隣接する東松浦郡厳木町で林道建設に伴い２基の炭窯について確認調査が実施されたが[1]、これらの窯はその構築法において、窯口から点火室付近の窯体に石積みを用い、炭化室から奥壁にかけての大半を地山削り出しとする点で今回調査例と類似する一方、奥平面規模が本例より一回り小さい（炭化室の長さ２～2.4m、幅２m）ほか、煙道は奥壁中央部に１本のみ造られ、床面下には排水の竹を埋設するなどの相違点が見られる。また、佐賀平野の脊振山系南麓にあたる東脊振村山中の調査例では、炭化室の平面形が卵形ではなく窯口に向かってすぼまるいちじく形を呈しており、今のところ、こういった個々の炭窯に見られる相違点について整理がほとんどできていないのが現状である。農林関係事業のみならず、こういった炭窯については近世以前の埋蔵文化財に較べ軽視される傾向は否めないが、窯焼きの炭作り自体は古代から連綿と続くものであり、木炭史を考える上でも十分な記録の保存について今後とも注意を払う必要がある。

註１）佐賀県教育委員会「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書17」佐賀県文化財調査報告書第141集 1999

(2) 浜玉町

調査対象地区名　県営畑地帯総合整備事業 ひれふり地区

調査対象地遺跡名　小山田（こやまだ）古墳

調査対象地所在地　東松浦郡浜玉町大字横田、東山田

調査対象面積　12.5ha（調査面積約1.4ha）

調査対象地区の立地　対象地は鏡山（標高283.7m）と横田川の間に広がる丘陵地帯で、大小の尾根・谷部が連続する起伏に富んだ地形をなし、現況は蜜柑園及び山林、谷部の多くに水田が作られている。丘陵部の東西方向には標高100m前後を最高位とする尾根が続き、これらの尾根が幾つかのピークをなしているが、小山田古墳は丘陵地帯のほぼ中央、これらのピークの中のひとつに位置している。この丘陵部の背面には東側から回り込んで横田川が流れ、現在山田の集落が位置する盆地状の狭い平野が形作られている。現在、丘陵部の北側裾部には標高約５mに満たない低平地が東西に広がり、さらにこの低平地と唐津湾との間には景勝地で名高い虹ノ松原が南北幅約500mで東西に延びている。しかし、古墳時代における地形的な環境は今とかなり異なっており、玉島川がこの丘陵地帯及び鏡山の前面を東から西に流れて海へ注ぎ、後に虹ノ松原となる砂丘も未だ発達していなかったと考えられ、小山田古墳が立地する尾根上からは、玉島川が海に合流する入り江状の地形（現在は横田川が流れる）が眼下に広がっていたものと想像される。弥生・古墳時代の散布地や古墳はこの旧入り江を取り巻くように立地しており、当時の人々が農耕よりも海と密接な関係を持って暮らしていたことは想像に難くない。なお、松原が発達し、後背湿地の陸化が進んだのは古代～中世にかけてと考えられ、近世初頭には唐津藩主寺沢志摩守広高によって松林による防風林が整備されたことに見られるように、地形的には中世末までにはほぼ現在に近い形に落ち着いていたものと思われる。

周辺の遺跡及び内容　唐津湾沿岸地域における古墳の分布状況については、唐津平野を南北に流れる松浦川を境に東西に分けて論じられることが多い。松浦川以西においては小規模の古墳が小グループをなして散在するのに対し、松浦川以東の鏡山山麓、及びその東方の浜玉町周辺の山麓では、古墳時代を通じて唐津地域の代表的な古墳が各所に分布している。これら松浦川以東の古墳は、鏡山を挟んで東側の玉島川・横田川流域（玉島川・横田川流域古墳群）と西側の松浦川右岸域（半田川・宇木川流域古墳群）に大きく分けられる。前者はさらに、玉島川と横田川のそれぞれの流域に分けられ、今回調査を実施した小山田古墳は分布的に横田川の西岸域に含まれる。

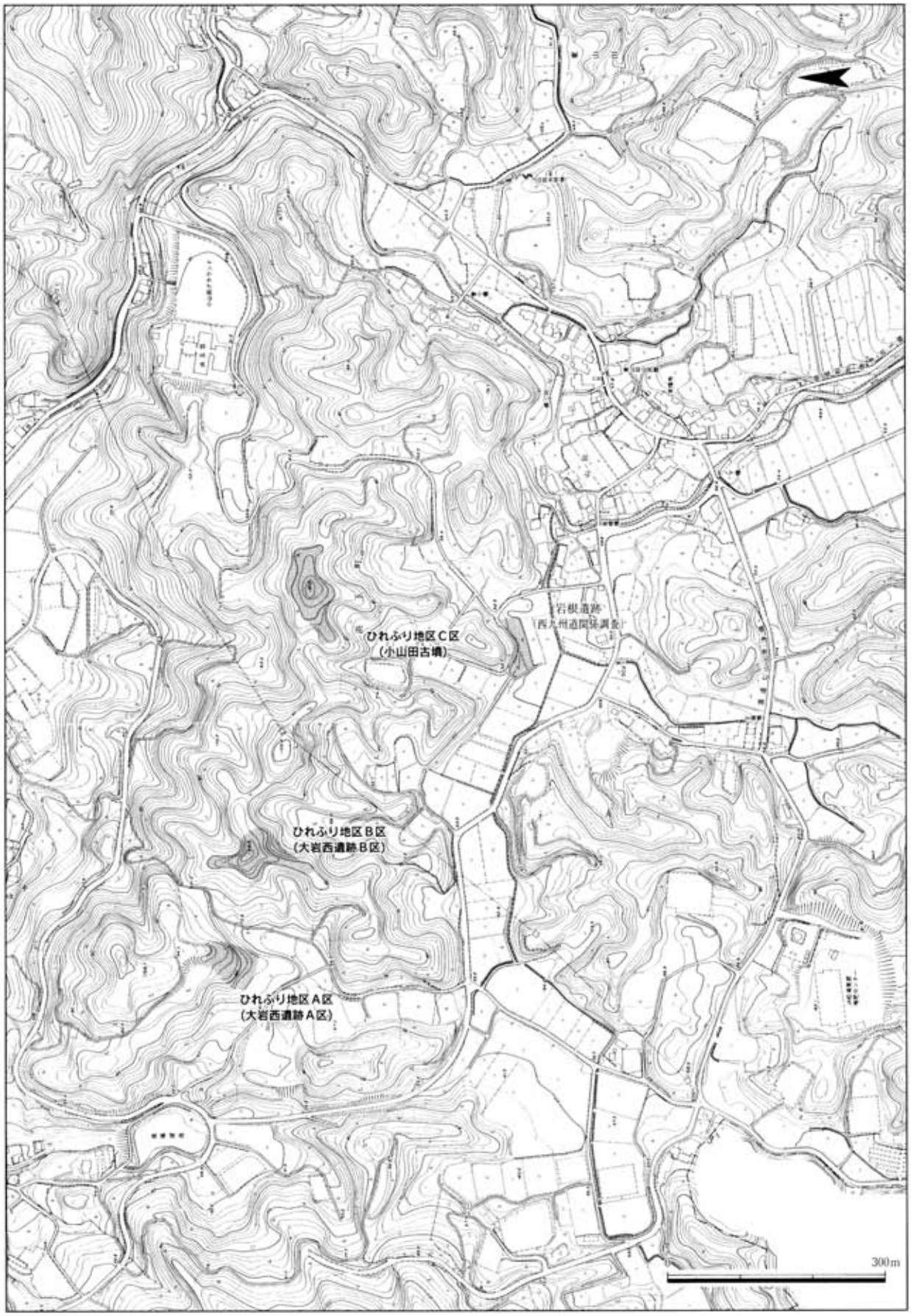


図37　浜玉町：小山田古墳位置図

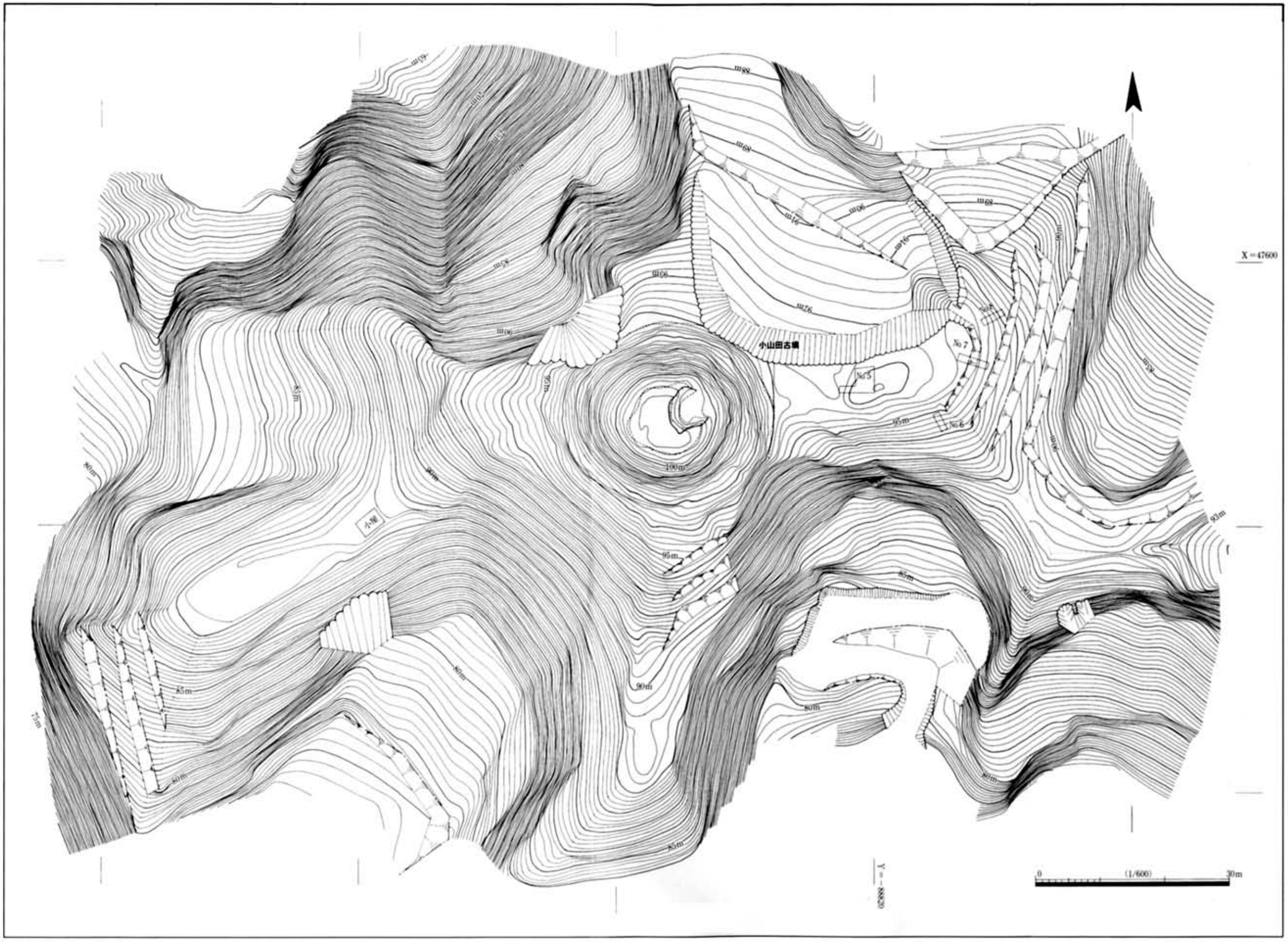


図38　小山田古墳周辺地形図

玉島川の東岸にあたる山麓部では、谷口古墳（国史跡）や経塚山古墳が古墳時代前期の首長墳として想定されるが、前者は墳長77mの前方後円墳で、後円部に小型の横口部を伴う竪穴系横口式石室を東西二室備えるほか、前方部でも船形石棺が確認されている。さらに石室内部の長持形石棺からは三角縁神獣鏡４面ほか鏡３面、碧玉製石釧11個などが出土している。また、経塚山古墳は径27mの円墳で、内部主体には長さ約７mの狭長な竪穴式石室を用い、石室壁体から方格規矩鏡１面が出土している。いずれも内部主体、副葬品に畿内的な様相を示すもので、谷口古墳は４世紀後半から５世紀前半に、経塚山古墳は４世紀前半に位置付けられる。この他、福岡県側に入るが、経塚山古墳から海岸沿いに東方約５kmの地点には、舟形石棺を伴う径約30mの円墳、長須隈古墳（５世紀初頭）が立地しており、唐津湾沿岸の有力墳のひとつとして位置付けることができよう。５世紀前半以降、これらに後続する大型墳は玉島川東岸には認められず、代わって横田川の西岸側、鏡山の東麓側に展開する丘陵地帯の尾根上に横田下古墳（国史跡）が築造される。本古墳は墳径30mの円墳で、内部主体に出現期の横穴式石室を持つ古墳として著名であり、５世紀前半～中頃の築造とされている。小山田古墳は大きくは横田下古墳と同じ丘陵地帯に位置しており、両古墳は直線で約１kmの距離にある。横田下古墳以降、玉島川・横田川流域では卓越した墳丘規模を持つ古墳は認められず、６世紀代に入って石障系石室で石屋形を伴う渕上古墳の他、五反田古墳群、玉島古墳群など小規模な古墳群が造営される。

一方、鏡山西・南麓にあたる半田川・宇木川流域では５世紀に遡るものとして正願寺舟型石棺、石障系石室の樋の口古墳、仿製鏡を出土した杉殿古墳が挙げられ、６世紀前半には全長30mの前方後円墳で金銅製冠・銅碗等豊富な副葬品を持つ島田塚古墳が築造されるなど、古墳時代後期にかけては半田川・宇木川流域の方が玉島・横田川流域に比べ、より優位性があったと解することができよう。

さて、小山田古墳の位置する横田川西岸地域をやや詳細に見てみると、前述の横田下古墳と小山田古墳の間の尾根上において、平成12年度に畑総事業に伴い大岩西遺跡Ａ区・Ｂ区の発掘調査が行なわれ（浜玉町教委調査）、４世紀末から５世紀前半にかけての古墳・墳墓群が発見されている。このうち、Ｂ区の最高所に位置する箱式石棺からは石釧・貝釧・管玉が副葬品として出土しており、石釧は谷口古墳出土例のひとつに酷似している。小山田古墳と大岩西遺跡B区との間にも標高約100mのピークが見られ古墳の存在も想定できるが、現在既に高圧電線の鉄塔が立っており、遺跡の存在については確認できない。また、横田下古墳付近から北に延びる尾根上に横田下古墳群、大岩西遺跡の北麓には大岩古墳群等が遺跡地図上で知られるが、ほとんどが蜜柑園となっており詳細については不明である。なお、丘陵地帯背面の盆地状の平野部は古代官道の推定路線に想定されており、平成10年度に西九州自動車道建設に伴い、岩根遺跡の調査が実施されたが（県教委調査）、多量の鉄滓・砂鉄と共に鍛冶炉が検出され、古代の製鉄関連遺跡であることが明らかとなっている。

調査の経過　浜玉町大字横田下、東山田における県営畑地帯総合整備事業「ひれふり地区」については、平成９年度に県農林担当部局より埋蔵文化財の有無等についての照会が当時の県文化財課になされた。これを受けて県文化財課は浜玉町教育委員会と共に対象地全域についての現地踏査を実施したが、対象地（全域が周知の埋蔵文化財包蔵地外）のほとんどが蜜柑園造成により改変を被っていることが予想され、かろうじて旧地形を留め、遺跡の存在が予想される地点３箇所を要確認調査地区として抽出した。これら３地区のうち、Ａ・Ｂ地区としたものは前出の大岩西遺跡Ａ区・Ｂ区にあたり、残りの一つが小山田古墳の立地するＣ地区である。この際、Ｃ地区において径30mを超える規模のマウンドが確認され、大型の古墳である可能性が指摘された。その後、ひれふり地区における工事計画が具体化し、工事着工を次年度に控えた平成11年度秋に再度Ｃ地区について現地踏査を実施したところ、このマウンドが未盗掘の大型古墳である可能性が強まった上、工事計画範囲に明らかに含まれる

ことが判明したため、古墳かどうかの確認、及びその内容について早急に把握する事態が生じ、平成12年３月14日から29日にかけて町教委の協力のもと確認調査に着手した。

確認調査の目的はこのマウンドが古墳であるかどうか、またＣ地区全体にその他の遺構があるかどうかの点に絞って実施され、マウンドの頂部に設定した№２トレンチにおいて表土下約１ｍの地点より石室の天井部と思われる花崗岩・玄武岩を確認した。また、合わせてマウンド斜面に設定したトレンチより人工的な盛土を検出し、平板略測の結果も合わせ、このマウンドが規模約30ｍの古墳であることが明確となった。但し、墳形については、このマウンドの平面形が東西方向にやや長い楕円形をなす点や、蜜柑園開墾に伴い墳形がやや改変されていることが予想されたため、前方後円墳である可能性も考慮する必要が生じた。

この調査結果を受けて、平成12年４月に県文化財課・唐津農林事務所・町教育委員会・町農林課の四者協議を行い、文化財サイドとしては本古墳が古墳時代前期まで遡る可能性を持つ大型古墳であり、経塚山古墳・谷口古墳・横田下古墳と続く首長墓系列の含まれるような有力者の墳墓と考えられることから、事業計画の設計変更による保存について要望した。農林サイドからは対象地について事前換地を行なっていること、地元より畑総事業に伴い尾根の切り下げの要望が挙がっていることの大きく２点が示され、保存は困難との回答がなされた。その後、双方で調整を行なった上、平成12年５月に２回目の協議を行い、町農林課より、前方後円墳かどうかの判断、及び保存を要すべき範囲について明確にして欲しい旨の意見が示され、文化財サイドとして、当該古墳の墳形及び築造時期を把握することを目的とした追加確認調査及び墳丘測量調査を早急に実施することとした。

追加確認調査は県文化財課により平成12年６月12日から７月17日に行われ、前回、墳頂部で確認された石室が竪穴式石室であること、竪穴式石室と平行に箱式石棺が埋置されていること、墳丘へのトレンチ調査・測量調査の結果、前方後円墳の可能性は低く、直径約30～32ｍの円墳であること等が明らかとなった。この結果をもって、７月26日に第３回協議を行い、文化財サイドより当該古墳が円墳であるとの所見から保存範囲の見直しを行い、改めて農林サイドに要望した。農林サイドからは、保存要望範囲の見直しに伴い、工事計画上は保存が可能との見解が示されたものの、換地の変更に伴う地権者の理解が最も重要との判断から、最終的な判断については町長に委ねたいとの意見が出された。平成12年８月９日の第４回協議では、県文化財課より当該古墳の重要性について改めて町長に説明し、保存についての要望を行なった。町長からは古墳の重要性について一定の理解を示された上で、畑総事業に協力してもらっている地権者への影響について憂慮、古墳の重要性について地元が納得できるような説明を文化財サイドで行なうべきであるとの意見が示された。

これを受けて、町農林課では地元との調整及び工事計画の変更について検討を進め、平成12年８月の時点では、換地を見直すことにより、対象地を現状のまま取り込む形で保存する方向に固まりつつあった。しかし、その後、平成12年10月に当該古墳の地権者から畑総事業に参加しない旨の考えが示されたため、現状では古墳及びその周辺を計画地から除外する形で工事設計が進められているところである。

調査方法及び内容　小山田古墳は東西に延びる狭い尾根筋上に立地しているが、この尾根は前述したとおり鏡山東麓から横田川との間に広がる丘陵地帯の背にあたり、本古墳が位置する部分を含めて標高100ｍ前後のピークがこの尾根筋上に点在している。小山田古墳の墳頂部の最高所は標高約101ｍで、墳裾と目される標高96ｍ付近から東西・南北方向に尾根が延びるが、南北方向は墳裾付近でやや傾斜が緩やかになった後、急な斜面となって下る。東西方向では、西側は南北方向と同様に墳裾付近で傾斜をいったん緩め、さらに急な斜面となって下って行くが、東側では墳裾から標高約96ｍ前後の平坦面が長さ30ｍ、幅８ｍ程で細長く延びる。この平坦面からさらに東側に向かっては斜面となるが、現状では蜜柑園造成に伴い段切りされ改変を受けている。確認調査着手前に

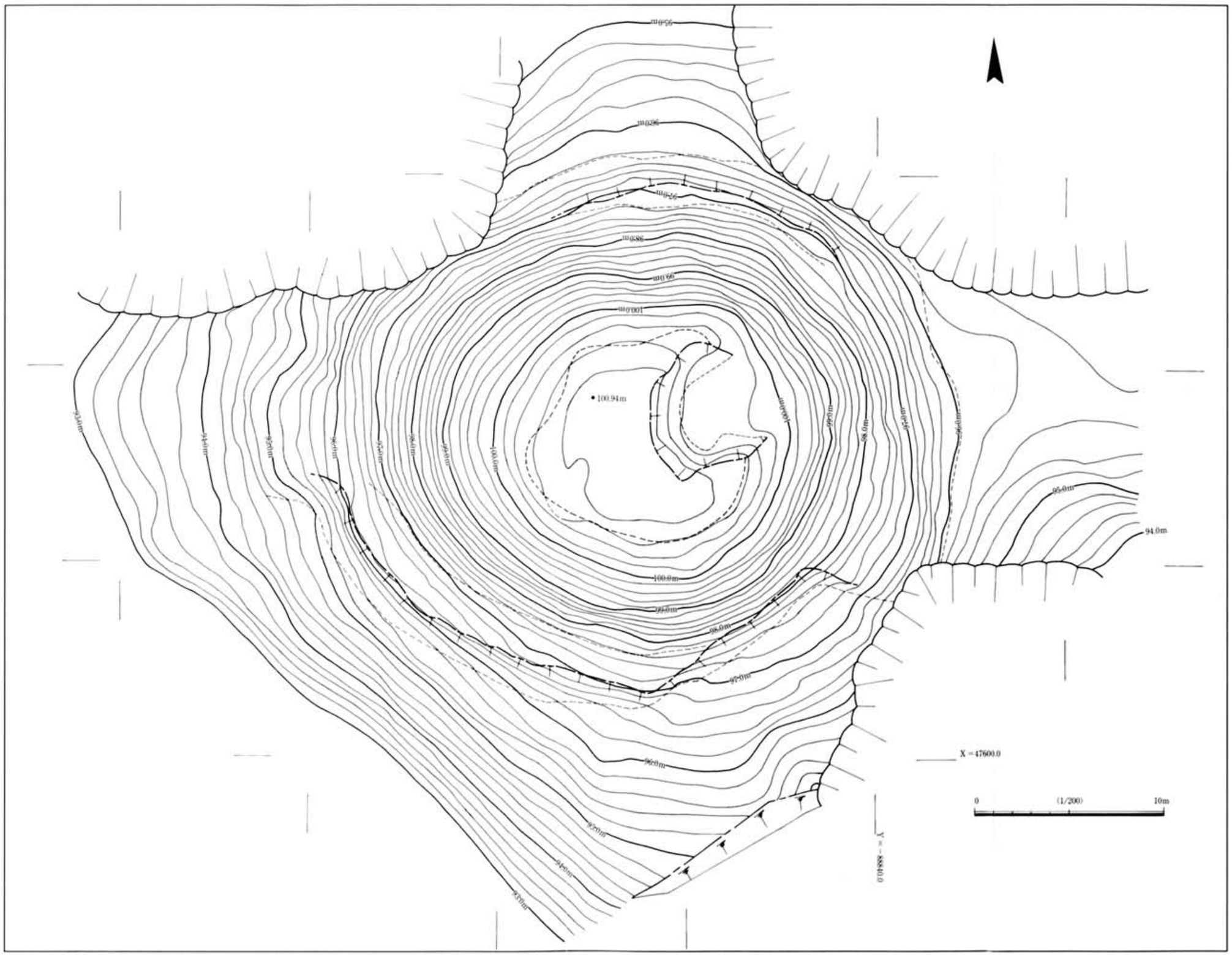


図39　小山田古墳墳丘測量図

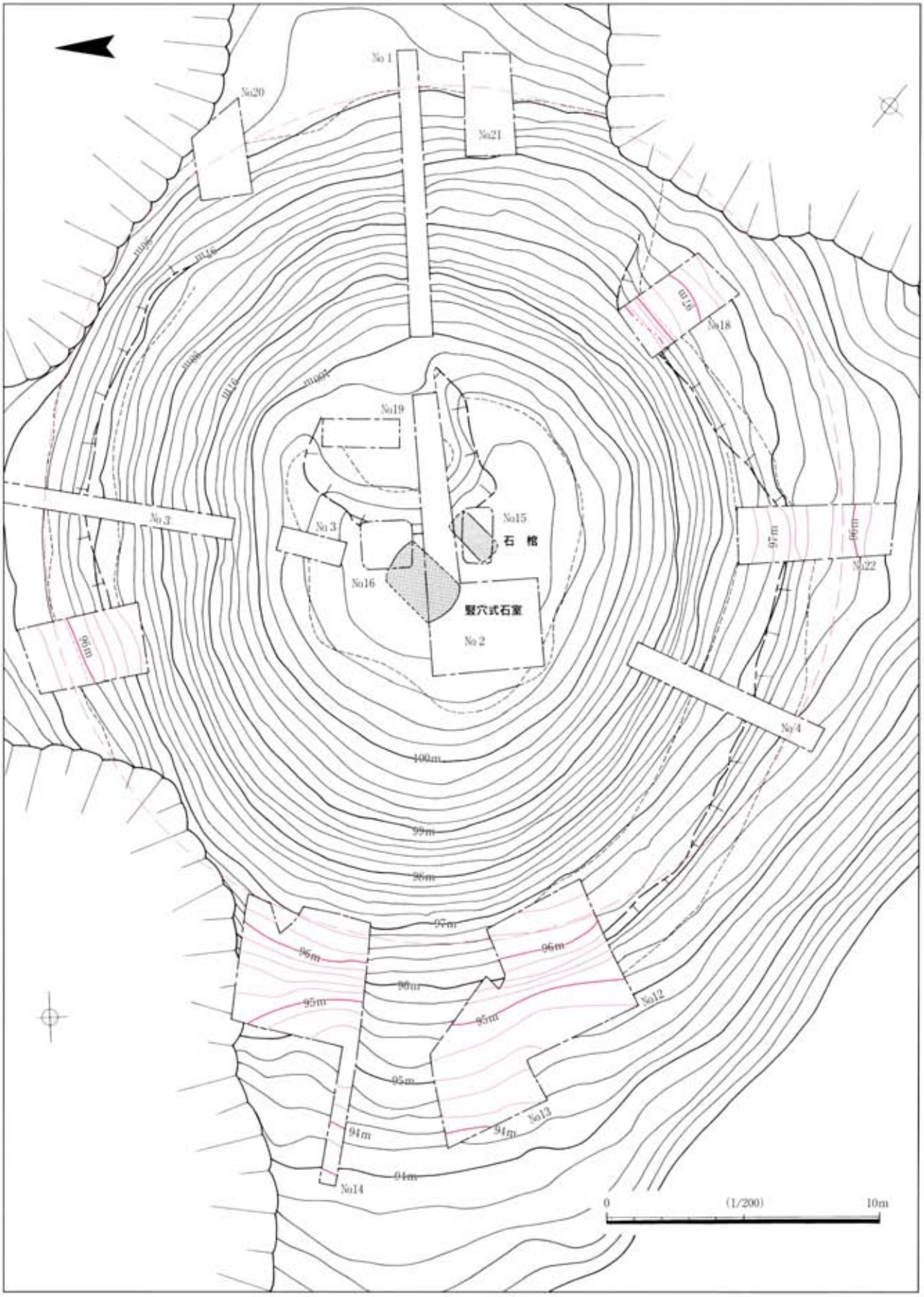


図40　小山田古墳墳丘トレンチ配置図

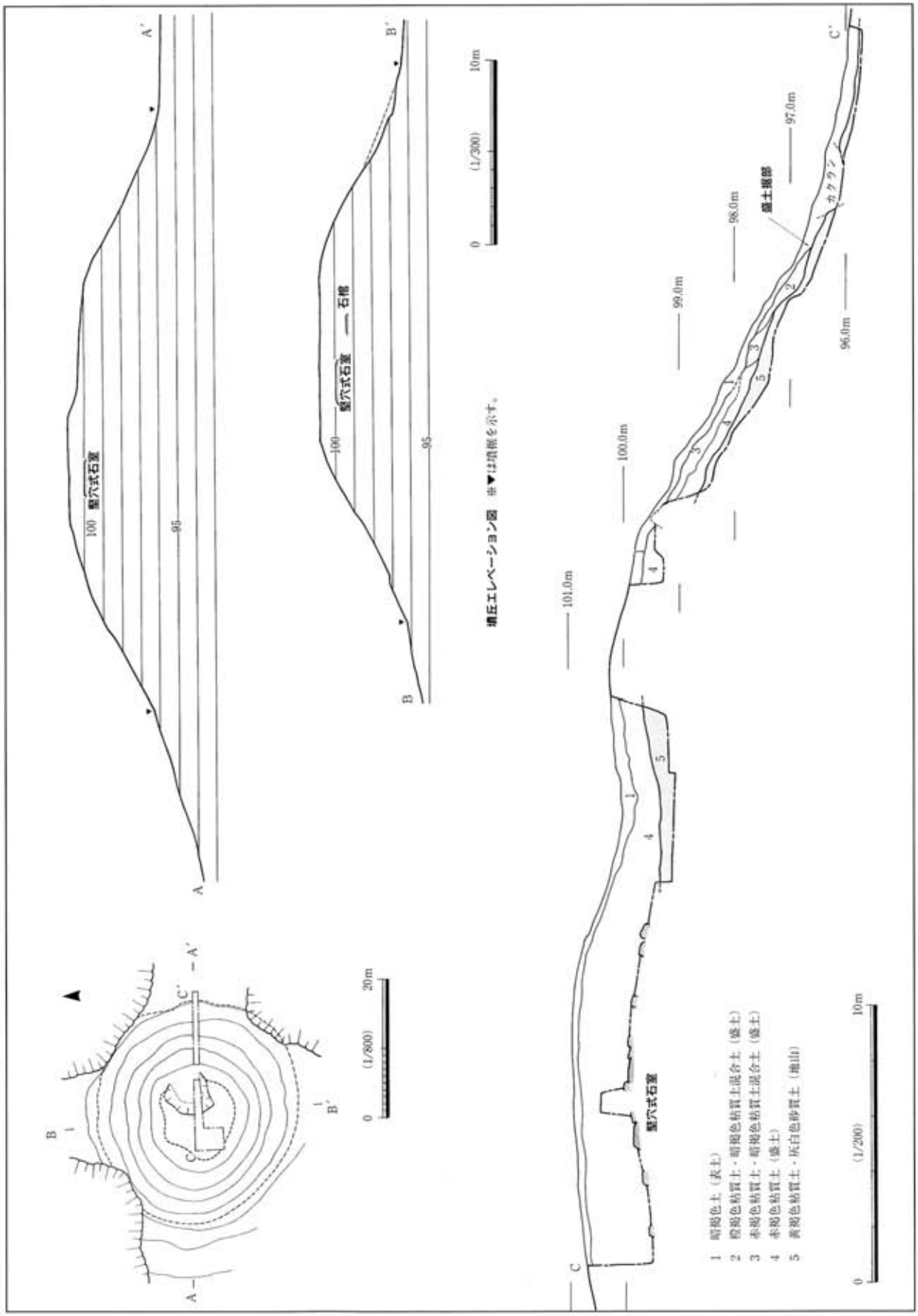


図41　小山田古墳墳丘断面図・土層図

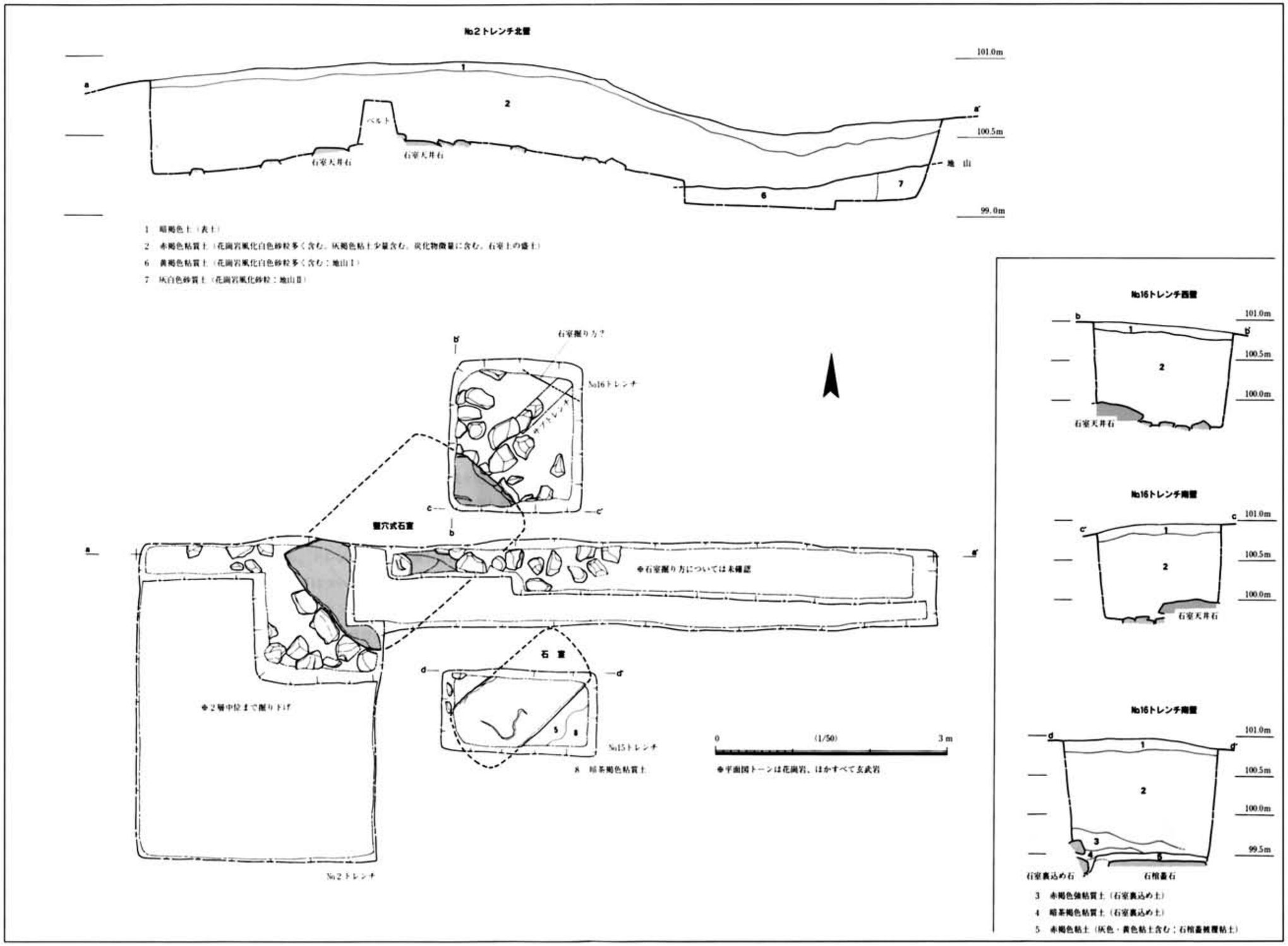


図42 小山田古墳墳頂部トレンチ平面図・土層図

１／1,000地形図上で観察したところ、古墳と考えられるマウンドから東側に延びるこの尾根がさらに左右に開いて続いていくことから、可能性はかなり低いながらもこの東側尾根を前方部とする前方後円墳であるとの解釈も考えられた。しかし、現地踏査、トレンチ調査及び詳細地形測量調査（1／200）を実施したところでは、この尾根を前方部とすることは考え難いと判断され、当初の予想どおりマウンド状の高まりを中心とした径30m程の範囲が古墳であることが確認された。

平成12年３月の調査では、まずこのマウンドが古墳であることを確かなものとするため、墳頂部にトレンチ（№２・３トレンチ）を設定し、主体部の有無及びその残存状況を調査した。また、本調査の実施も視野に入れ、盛土の状況を明らかにするため、マウンドの北側（№３トレンチ）、東側（№１トレンチ）、南西側（№３トレンチ）のトレンチ調査を実施した。前述したとおり、この調査では内部主体として石室が構築されていることが判明したが、時間的制約もあり、内部主体の規模・形態や墳形、及びそれから推定される本古墳の時期的な位置付けについてはなお不明であったため、平成12年６月から追加調査を実施した。追加調査では、まず墳丘平板測量調査（1／100）を行い、墳丘の現況測量図を作成した（図39）。この結果、墳形がほぼ円形であることは確認されたものの、西側墳裾付近に帆立貝式古墳の前方部のごとく、短くくびれて延びる箇所が認められたため、この箇所を中心にトレンチを設定した（№13・14トレンチ）。また墳裾部については、墳裾ラインの確認、あるいは後世の改変の状況等を把握するため、新たに№17・18・20～22トレンチを掘削した。なおこれらの墳裾部へのトレンチについては、確認調査段階での必要以上の掘削を控えるため、主に表土層のみを除去したが、いずれのトレンチでも表土直下より地山面が検出された。

追加調査では、主体部の形態・規模及び主体部が複数存在するのかどうか等を確認するために墳頂部へのトレンチ調査を再び実施した。調査にあたっては前回№２トレンチにおいて確認した石室天井石の規模を明らかとするため№16トレンチを設定したほか、№15・19トレンチを掘削し、その他の主体部の存在について調査した。ただ、墳頂部には数箇所に大きな樹根が残るほか、主体部までの深さが１m以上に達することから排土置場に苦慮し、また調査自体が保存協議に向けての緊急的なものであることから、トレンチの拡張に関しては最低限に留めている。以下に、平成11年度調査及び12年度の追加調査についての概要について項目毎に述べる。

（墳形・規模）　墳径最大約32mの円墳と考えられる。地形測量の結果、コンターはやや東西方向に長軸を持つ楕円形を描き、狭い尾根上という地形的な影響に起因するものと思われる。現状で墳丘裾部のラインについて明確に把握できるのは北側及び東側の裾部であり、トレンチ調査においても№17・20・21の各トレンチにおいて地山面の立ち上がりが検出された。ただこのうち、墳裾東側付近においては、蜜柑園造成時にか、僅かに墳丘斜面が削られているものと思われ、墳丘測量図でも標高97.0mより下位において若干コンターの乱れが見受けられる。一方、墳丘南側及び西側においては改変を被った痕跡が看取され、南東側の墳裾付近から南側、西側にかけて比高差0.6m程の段が巡る。さらにこの段より99.0m付近までの墳丘斜面のコンターが、墳丘北・東・西側のそれより間隔をやや狭めており、墳丘斜面を削った上で段切りがなされている様子が窺える。特にこの段部の上端には約３～５m間隔で石柱で立てられているが、この石柱は土地の境界を示すためのもので、これより南側までが蜜柑園であることを踏まえると、この段自体が蜜柑園造成に際して切られたものと推定される。このことは追加調査の際に№18・22トレンチを設定し表土を除去したところ、比較的新しい時期に地山を削平した痕跡が確認された点からも裏付けられている。また、№18・22トレンチにおいては墳丘南東側から南西側にかけての墳裾ラインについて検出を試みたが、地山面の明確な立ち上がりは確認できず、現状では墳裾については明らかではない。また、墳丘西側では削平は被っていないものの、明確な変化点を持たずに緩やかに傾斜して尾根筋へと連続して

いるため墳裾についてはわかりにくいが、ほぼ標高96.0mコンター付近が墳裾ラインとなるものと思われる。なお、前述したように墳裾付近西側の現況地形から帆立貝式古墳の可能性も考慮してトレンチ調査を実施したが(№13・14トレンチ)、比較的新しい時期に掘削を受けている痕跡が確認され、一見、くびれ状に見える段差のラインも、耕作等における後世の改変によるものと判明している。

一方、墳頂部は東西11.5m、南北10.5mの楕円形を呈する平坦面となっており、墳形は全体として比較的整った截頭円錐形と見ることができる。墳頂部の東寄りには東西6.0m、南北7.0m、深さ0.7mの落ち込みが見られ、現地調査着手時には、以前大雨の際に陥没したとの聞き取りであったが、後日人力によるカクラン坑であることが判明し、トレンチの壁面精査でも陥没の痕跡は認められなかった。なお、墳裾から墳頂平坦面までの高さ、いわゆる墳丘高は約5.0mである。

(周　溝)　確認調査の範囲では周溝は全く検出されていない。

(墳　丘)　墳丘の構築状況等を把握するために、№1・3・4トレンチを設定した。その結果、墳丘のほとんどが地山整形によることが明らかとなっている。墳頂部のトレンチ調査では、墳頂部から－約1.6m（標高約99.5m）の付近で花崗岩の風化土壌からなる地山面を確認しており、№1・3・4トレンチの調査では、この地山面が墳丘の法面とほぼ平行に墳裾に向かって傾斜している状況が把握された。盛土は墳頂部の石室上に厚さ約1m程が施され、墳丘法面では墳頂部から厚さを次第に減じながら墳裾に向かって伸びるが、ほぼ96.5～97.0mの付近で盛土はなくなり、表土直下が地山となる。一方、墳頂部に設定した№2トレンチの調査では、ほぼ墳頂部全体に赤褐色粘質土からなる盛土が約1m厚さをもって確認され、この盛土下より竪穴式石室の天井石を検出しているが、トレンチ壁面の精査では石室掘り方（墓壙）は確認出来なかった。これらのことから墳丘の構築法としては、もともと尾根の最高所であったところを地山整形し、平坦に整えた墳頂部の地山面からそのまま掘り込んで石室を構築、さらに石室上に盛土（覆土）を行い、その後墳丘法面について墳形を整える程度の盛土を施したものと推定される。また盛土も版築状に突き固めたものではなく積み方はラフで、地山整形の際の残土をそのまま盛っているように見え、粘土あるいは旧地表面の黒色腐食質土の混入は全く認められなかった。なお、墳丘トレンチ断面観察の結果、段築は確認されていない。

(外表施設)　現状では墳丘上に石材の散布は全く認められず、トレンチ調査では葺石・列石も検出されていない。また埴輪片も確認されておらず、墳丘の外表施設としては特に設けられてはいなかったようである。

(内部主体)　墳頂部に設定した№2・16トレンチで竪穴式石室の天井石と思われる石組が確認されている。石組は地表面から－1.0mより下位に位置しており、花崗岩3石からなる天井石が北東－南西方向を長軸に並べられている。確認調査では、当初№1トレンチの掘削時に花崗岩の大石が検出され、上面が平坦で幅広の形態をなすこと、花崗岩の周囲にそれを支えるように玄武岩質の石材が配置されていることなどから石室の天井石の可能性が考慮されたため、新たに追加調査の際、石室形態・規模を明らかとするため北東側に№16トレンチを設定した。№16トレンチでは、トレンチ南西隅において同様の花崗岩の大石が検出され、その方向性から№1トレンチで見られた天井石と一連のものであることが確認された。これらのことから、この花崗岩大石が竪穴式石室の天井石であり、花崗岩の周囲に配置された玄武岩石材は天井石を支える壁体の一部、あるいは壁体の控え積みの一部であると考えられる。

この天井石の主軸方位はほぼ北東－南西方向（N－45°－E）にとり、楕円形を呈する墳丘の長軸とほぼ45°変位している。天井石の長さは約2.8mを測り、幅については不明確なものの、おおよそ1.8m程度と見られる。3石の天井石は、確認された範囲では横長の石材を天井石の長軸と直交するように並べて配置されているようで、

上面はほぼ平たく、その厚さは0.2～0.3mと推定される。天井石石材は全体的に丸みを帯び、自然石を基本的に利用しているが、周縁部には部分的に剥離痕が確認でき、整形のための調整が施されている。この天井石の周囲では大きさ20～30cm程度の玄武岩礫が確認されており、南西側天井石では、天井石の側縁部と4石が接し、北東側天井石では3石程度が天井石側縁部の下位で天井石を支えて配置され、また中央の天井石では玄武岩礫が天井石の上に一部被さっているのが見てとれる。これら天井石と接するもののほかに、天井石を囲むように玄武岩礫が見られ、確認された範囲では天井石から約1～1.5mの範囲の周囲を玄武岩礫が取り巻いているものと推定される。これらの玄武岩礫は未加工であるもののその規格は0.2～0.4mと概ね似通っている。今回の確認調査では天井石及びこれらの玄武岩礫の上面の検出に留めたが、№16トレンチの調査で一部サブトレンチ調査を実施した

小山田古墳遠景（南より）

小山田古墳遠景（東より：左手奥は鏡山）

小山田古墳遠景（南西より）

小山田古墳全景（真上より：左下方が北）

図版14　小山田古墳①

小山田古墳近景（東より）

小山田古墳近景（西より）

小山田古墳近景（北より南東方向を臨む）

小山田古墳近景（北より南西方向を臨む）

No.18トレンチ（南東より）

No.12，13トレンチ（北西より）

No.12，13トレンチ（北西より）

No.2トレンチ（東より）

図版15　小山田古墳②

No.1トレンチ竪穴式石室上面の礫群

No.2トレンチ竪穴式石室（北西より）

No.2トレンチ竪穴式石室（南西より）

No.16トレンチ竪穴式石室（北より）

No.16トレンチ竪穴式石室（北東より）

No.15トレンチ石棺蓋石（南西より）

No.15トレンチ石棺蓋石（南より）

No.15トレンチ北壁（南より）

図版16　小山田古墳③

ところ、検出面の下位でも玄武岩礫が見られることから、これらの玄武岩礫は石室壁体の控え積みの一部と考えられる。ただし、天井石と間隔を空け、壁体との直接関連していないように見える礫もあり、その性格については今回の調査範囲では明確にできていない。なお、石室上の土層堆積状況については、赤褐色粘質土が表土下より天井石上まで見られ、天井石を覆うような粘土帯も全く検出されておらず、天井石架構後は同質土のみを盛土して石室覆土としているようである。

この竪穴式石室の墳丘平坦面上の位置が墳丘中心のやや北西寄りにあることから、その他の埋葬施設の有無を確認するために№15トレンチを設定したところ、地表面下 － 1.6mの地点で石棺の蓋石と思われる玄武岩の板石1枚が検出された。トレンチ掘り下げ時の状況としては、表土下で竪穴式石室覆土の赤褐色粘質土が確認され掘り下げを進めたが、№2・16トレンチで確認された石室検出面より下位でも土層はかわらず、さらに0.6m程掘り下げた位置で赤褐色粘土が検出された。この粘土はトレンチ平面のほぼ全面で検出され、その上面は水平で明らかに人為的な土層であり、厚さ5cm程度と薄く、その下より玄武岩板石がその上面を粘土に覆われるように置かれていた。板石はトレンチ底面のほぼ全面で確認され、その主軸方位を北東－南西方向にとるものと思われるが、長軸の両端部ともトレンチ外にあるため長さについては不明である。一方、板石の両側縁はかろうじてトレンチ内で確認でき、両側縁がほぼ並行であること、板石の幅が約0.95mであることが把握できた。またその表面では細かい調整痕が観察され、その平面形・厚さ共に相当に加工を施した蓋石であるものと考えられる。なお、調査にあたっては蓋石の外形を把握した段階までの掘り下げに留めたが、蓋石の周囲では地山は確認されておらず、石棺のひとまわり外周に掘り方（墓壙）があるものと推定される。なお、墳頂部での地山面はほぼ標高99.4m（№2トレンチ東寄りで確認）であり、石棺上面の高さとほぼ等しい。

このように墳丘頂部のトレンチ調査の結果、竪穴式石室と石棺の存在が確認されたが、両者が約1.0mの間隔をとって主軸を同じくして並ぶこと、また、両者の中心がほぼ墳丘の中心となることなどから、この石棺についても竪穴式石室と同じく本古墳の主体部であると考えられる。ただ石室・石棺の前後関係については、№15の北壁土層で観察したところ、石棺を覆う粘土上に石室壁体の裏込め土が伸びてきており、石棺を据え埋葬をした後に石室壁体の積み上げを行っていることが明らかとなっている。問題は古墳築造当初から石棺・石室の両者を計画的に配置していたのか、あるいは両者の埋設時期に時期差があるのかという点であるが、トレンチ壁面で観察した範囲では石室構築に伴う掘り方が墳頂部盛土を切って掘削されている様子は窺えず、当初から石棺・石室を同時に構築していたとみる方が蓋然性が高い。しかし、今回のトレンチ調査では十分な確認は出来ておらず、今後の調査でさらに検討が必要である。

（出土遺物）　出土遺物については№14トレンチ表土中より土師器細片を検出したのみである。

所　　見　今回の小山田古墳の確認調査結果について次のとおりまとめる。

① 墳形は楕円形状に東西方向に長い円墳で、最大径約32mを測り、墳丘高は約5mである。墳頂部には径約11.5mの平坦面を持ち、全体として整美な截頭円錐形をなしている。

② 周溝・段築はなく、葺石・埴輪等の外表施設も見られない。

③ 墳丘はほぼ地山整形により、盛土は墳頂部及び墳丘上半部に施される。

④ 内部主体として墳頂部のほぼ中央に北東－南西方向に主軸をとる竪穴式石室と石棺が並んで埋置されている。両者の構築にあたっては、石棺の蓋石を閉塞した後に竪穴式石室の壁体構築がなされており、石棺被葬者埋葬後に石室被葬者が葬られている。ただし、石室と石棺の構築は同時に行なわれた可能性が高い。

なお、本古墳の時期的な位置付けについては出土遺物に乏しいことから詳細不明であるが、内部主体に竪穴式

石室と石棺を用い、両者が方位を等しく一連の埋葬施設として配置されていることを考えると、4世紀後半から5世紀前半代の時期幅が想定される。この時期の玉島川・横田川流域の首長墓系譜としては、玉島川東岸域において4世紀後半～末の間に経塚山古墳、谷口古墳が、5世紀前半～中頃には横田川西岸域で横田下古墳が築造される。本古墳はグループとしては横田下古墳と同じく横田川西岸域に含まれ、横田下古墳が古式の横穴式石室であることからこれに先行するものと思われるが、経塚山古墳・谷口古墳との時期的関連は検討の必要がある。このうち、経塚山古墳は石室内法で長さ約5mの狭長な竪穴式石室を内部主体としており、天井石の長軸でも3mに満たない小山田古墳とは構造状の大きな違いがある。前者を畿内的な特色を持つ石室とすれば、後者は在地色の強い石室構造と見ることができ、単純に前後関係を当てはめて首長墓系譜を関連付けることは難しい。また谷口古墳の特徴的な石室構造は、在地的な埋葬施設の在り方とは明らかに異質であり、横口部を持つ石室構造という点のみで小山田古墳との前後関係を判断することは無理がある。よって現時点では小山田古墳の時期的な位置付けについては、横田下古墳より古く、経塚山古墳・谷口古墳とは概ね並行するが前後関係は不明といった曖昧な表現とせざるを得ない。

小山田古墳についての今回の調査は、農林事業との調整に伴う緊急的な内容確認調査に終始したが、その内容は径30m以上に及ぶ未盗掘の大型円墳であり、明らかに当該地域の首長墓系譜の中の一つに加えられるべきものである。東松浦地域の古墳時代前期・中期を考える上でも重要な資料であり、今後も重要遺跡確認調査の実施等を含め、その取扱いには注意を払っていく必要があろう。

謝辞）小山田古墳の調査にあたっては、佐賀県立博物館学芸課 蒲原宏行氏に指導・助言を頂いた。記して感謝致します。

(3) 厳木町

調査対象地区名　県営中山間地域総合整備事業 厳木地区（浪瀬地区）

調査対象地遺跡名　周 知 外

調査対象地所在地　東松浦郡厳木町大字浪瀬

調査対象面積　1.3ha

調査対象地区の立地　調査対象地は厳木町の西部、女山から北に派生する丘陵地の北側斜面にあたり、浪瀬川によって東西に開析された谷部を望む標高約90～120mの地点である。旧地形としては、南北に延びる二つの痩せ尾根に挟まれた、傾斜の緩やかな、より低い尾根であったと思われるが、蜜柑園造成によりかなり改変を受けている。対象地の中央には小河川が流れ、本来は小さな谷を挟んで東西共に丘陵が浪瀬川に向かって延びていたものと推定される。現況は蜜柑園のほか、水田・畑地が営まれている。

周辺の遺跡及び内容　対象地の西約200m付近には縄文時代の散布地である樫原遺跡が存在するが、同様に地形的改変を受け、遺跡の詳細については不明である。また、浪瀬の集落を挟んだ北側には白山（標高196m）がそびえ、山頂部を中心として中近世城郭の獅子城が立地している。獅子城は北波多村・相知町にまたがる岸岳城と同じく、中世山城的縄張りに近世的な石垣を伴う城として中近世城郭研究上重要視されており、平成3年に県史跡に指定されている。獅子城の麓にあたる現況浪瀬の集落付近では過去にほ場整備に伴う確認調査が実施された地区もあるが、城に関連する集落・屋敷等の存在については、今のところ、確認されていない。

調査方法及び内容　調査対象地のうち、比較的旧地形を残していると予想される地点に対して、試掘坑14本を設定し、人力により掘り下げを行なった。その結果、No14トレンチで小穴4個を検出し完掘したものの、遺物は出土しなかった。埋土の状態からはそれ程新しいものではなく近世以前に遡る可能性もあるが、残存状況は不良で、

図43　厳木町：浦川内地区トレンチ配置図

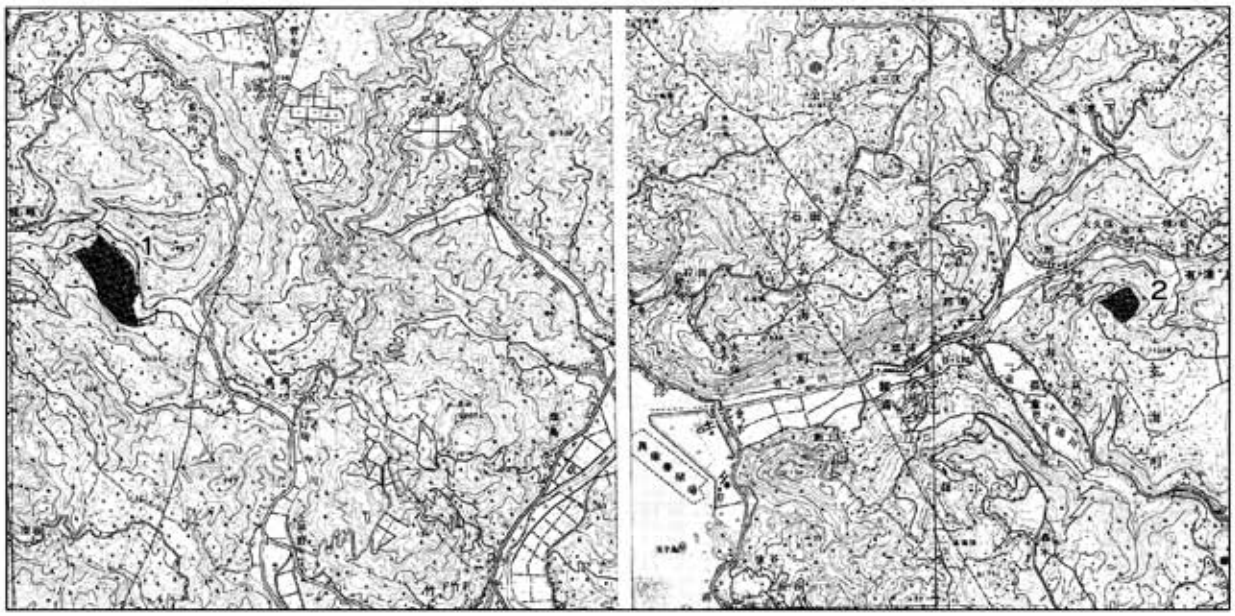


図44　佐賀上場地区調査地位置図（1　北波多村：釜蓋地区、2　玄海町：寺の上地区）[1/50,000]

またほかのトレンチでは同様な遺構は確認されておらず、その時期・性格については不明である。また、調査区全体でも出土遺物は少なく、№2トレンチで黒曜石が採集されたほかには、染付・瓦など近世以降の遺物が見られた。

所　　見　№5，7トレンチでは表土下に厚い造成土が見られ、人力では完掘し得なかったが、そのほかのほとんどのトレンチでは表土直下で橙褐色粘質土（基盤の玄武岩の風化土壌）が見られ、蜜柑園造成により旧地形が著しく改変されていることが明らかとなった。唯一、№13トレンチでは小穴を検出したが、出土遺物もなく遺構の時期については特定できなかった。また、そのほか採集される遺物も極めて少量であり、遺跡の存在についは確認できなかった。

調査対象地区名　　県営中山間地域総合整備事業 厳木地区（浦川内地区）

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　東松浦郡厳木町大字浦川内

調査対象面積　　1.9ha

調査対象地区の立地　調査対象地は厳木町のほぼ中央、天山から南に派生する丘陵地の北側斜面にあたり、浦川内川によって開析された谷部を西側に望む、標高約90～120mの地点である。旧地形としては、急斜面と川に挟まれた、東西に延びる傾斜の緩やかな尾根であったと思われるが、蜜柑園造成により、かなり改変を受けている。現況地形としては、北東から南西に向けて傾斜が下っており、調査対象地全体に蜜柑園及び水田・畑地が営まれている。

周辺の遺跡及び内容　対象地の西約200m付近には縄文時代の散布地である詰原遺跡が、また、南西400mには同じく縄文時代散布地の柳遺跡・松尾遺跡が存在するが、遺跡の詳細については不明である。

調査方法及び内容　調査対象地のうち、比較的旧地形を残していると予想される地点に対して、試掘坑16本を設定し、掘削機及び人力により掘り下げを行なった。その結果、№1トレンチでは厚さ約2.5mの造成土の下か橙褐色粘質土からなる基盤層が確認され、小穴5基を検出した。小穴の一部を掘り下げたものの出土遺物は見られず、

遺構の詳細な時期については不明であるが、埋土及び掘り方の状況から近世以前の可能性がある。また、№8では小穴・溝状遺構を検出したが、表土直下の削平された面に掘り込まれており、埋土が軟質であることからも近現代以降のものと思われる。そのほか、出土遺物として№8，13トレンチで黒曜石が採集されたほかには、近代以降の陶磁器が見られるのみであった。

所　　見　調査区南側の№1，2，4トレンチでは深さ約2.5m以上の造成土が確認された一方、№7トレンチをはじめとする調査区北側のそのほかのトレンチでは表土下で基盤層が確認され、造成により旧地表面及び自然堆積層についてはほとんど失われていることが明らかとなった。恐らく蜜柑園造成により調査区北側の土を削り、調査区南側の低い場所に盛土を施しているものと思われる。№1トレンチで確認された小穴については、トレンチ内の調査においてはその時期を特定できず、造成土がかなり厚いことから周辺部を拡張して追認することはできなかった。同じく厚い造成土を伴う№2トレンチでは、遺構は確認されなかったものの、基盤層上に旧表土が遺存しており、若干の遺跡の広がりがあることも予想される。工事計画では掘り下げが№1，2トレンチの基盤層まで及ぶものではないので今回は保存の措置がとられたが、今後とも周辺部での開発行為について注意を払う必要がある。

5．佐賀上場地区の調査

(1)　北波多村

調査対象地区名　県営畑地帯総合整備事業 上場Ⅲ期地区（釜蓋地区）

調査対象地遺跡名　周 知 外

調査対象地所在地　北波多村大字成渕字釜蓋

調査対象面積　8.0ha

調査対象地区の立地　北波多村の北西部、唐津市・伊万里市との町市境に近接し、上場台地が田中川（徳須恵川の支流）によって開析されることによって造られた狭い谷部に位置する。地形的には田中川の南西側丘陵部から川に向かって傾斜する部分にあたるが、旧地形としては丘陵側の急峻な斜面と田中川へ落込む谷部との間のテラス状の緩斜面と言える。調査対象とした範囲は標高約55～80mであり、田中川に近い場所でも川との比高差は30mを測る。現況は水田が中心であるが、畑地も部分的に見られる。近接する大きな集落はない。

周辺の遺跡及び内容　対象地に近接する遺跡はないが、南東約800mの同じく田中川西岸の丘陵上には縄文時代の散布地である池畑遺跡が位置している。これよりさらに田中川沿いに下った成渕の集落南東側の台地上には、竹木場遺跡をはじめ複数の縄文時代遺跡が広範囲に分布しているものの、調査対象地付近の埋蔵文化財の様相については明らかではない。

調査方法及び内容　対象地のうち、旧地形の傾斜がそれほど大きくないと思われる箇所を中心に試掘坑48本を設定した。調査にあたっては、対象地区内には水田・畑の段差が大きな箇所が見られたため、小型の掘削機及び人力により掘り下げを行なった。ほとんどのトレンチで耕作土直下から基盤層である黄褐色粘質土（黒色スコリアを含む）が確認され、遺構及び遺物包含層となるような自然堆積層は確認されなかった。出土遺物としては№29トレンチで黒曜石剥片、№15，22トレンチで近世陶磁器片を検出したのみであった。

所　　見　確認調査の結果より対象地全面が旧ほ場整備により大きく切り盛りが行なわれていることが予想され、遺跡の存在については明らかに出来なかった。

図45　北波多村：上場Ⅲ期地区（釜蓋地区）トレンチ配置図

(2) 玄海町

調査対象地区名　県営畑地帯総合整備事業 上場Ⅳ期地区（寺の上地区）

調査対象地遺跡名　寺の上遺跡

調査対象地所在地　東松浦郡玄海町大字寺の上

調査対象面積　0.52ha

調査対象地区の立地　玄海町の東部、有浦川と上村川のそれぞれに開析された谷部に挟まれた台地上標高130～136mの範囲に位置し、大きく見れば上場台地のほぼ中央に位置する。近接する集落は台地上には見られないが、台地北側を下った上村川南岸には松尾の集落が、またその北岸には高江城との関連が推定される「館」の集落が、また川を東遡した北岸には大久保・湯ノ木の集落が位置している。調査対象地の現況は果樹園及び山林である。

周辺の遺跡及び内容　調査対象地は旧石器時代～縄文時代散布地の寺の上遺跡の範囲に含まれ、同じ台地上の東側に隣接して同じく縄文時代散布地である小返答遺跡がある。また、上村川を挟んだ対岸の台地上には松浦党の一派有浦氏の居城「高江城」があり、平成９年度から玄海町教育委員会によって確認調査が継続して実施されている。

調査方法及び内容　調査対象地区のうち、蜜柑園となっていた地区全面について試掘坑９箇所を設定し、人力により掘り下げを行った。その結果、各トレンチで耕作土下より温石（おんじゃく：玄武岩の風化土壌からなる地山）あるいは地山の二次堆積による自然堆積層が確認されたが遺構・遺物については確認されなかった。

所　　見　対象地は河川を見下ろす台地上であり遺跡の存在が予想されたが、今回の調査では遺跡の存在については明らかにできなかった。

[2] 嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査

国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所の所管による、富士町内の嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財確認調査については、平成11年度から県教育委員会が調査主体となって実施している。平成11年度の確認調査の内容については、平成12年度刊行の「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書19」において附編として概略のみを報告したが、ここでは平成12年度実施分の調査内容と合わせて改めて述べる。

調査対象地区の自然的・歴史的環境　富士町は、佐賀県の中央部北側に位置する人口約5,100人の町で温泉地として著名である。町域は南北方向に長く、その北辺は福岡県との県境が設定されており、福岡市及び前原市と接している。また南辺は小城郡小城町及び三日月町、東辺は佐賀郡大和町及び神埼郡三瀬村、西辺は東松浦郡厳木町及び七山村と各々接していている。町の外周部には脊振山系を構成している羽金山（標高900.3m）、雷山（標高955.4m）、井原山（標高983.0m）らの山々が屏風のように連なっており、これらの峰々から派生している丘陵が町域の大部分を占めている。そしてこれらの山稜を開削しながら町域の中央部に向かって流れ込む浦川、神水川、大串川などの中小の河川が収束して嘉瀬川となり、町域の南東隅から大和町へ流出する間に、町域の6.4％にあたる耕作適地の大部分を形成しており、そこに人口の大部分が集中している。

これら河川によって形成された河岸段丘や丘陵の先端部には、旧石器時代から近世までの各時代の遺物、取り分け縄文時代、中世、近世の生活関連遺物が見られ遺跡の存在が予想されるが、発掘調査によって確認された遺跡はごく少数で、ほとんどが表面採集によるものである。以前から遺物が採集されている地点としては、大串神社付近遺跡（大字大串：石鏃・石斧・黒曜石剥片）、春日神社付近遺跡（大字大野：石鏃・黒曜石、サヌカイト剥片）、地蔵平遺跡（大字大野：石鏃：石匙）、相尾遺跡（大字上無津呂：磨製石斧）、葛ノ頭峠遺跡（大字市川：石鏃・石匙）、古湯遺跡（大字古湯：石剣？片・石斧）等の縄文時代遺跡が知られている。また、中世後期には古湯城・熊の川城などの山城が嘉瀬川を望む丘陵尾根上に造られ、神代氏と竜造寺氏の抗争の場となったが、その後藩政期には川上川（嘉瀬川の上流）を境に、東が佐賀藩山内郷、西が小城藩山内郷へと分けられた。また近世後期には大野の地に小城藩の代官所が置かれたとされる。埋蔵文化財の発掘調査については最近までほとんど実施される機会がなかったが、平成９年度に林道建設事業に伴って**貝野遺跡１区**（大字古湯）の発掘調査が行なわれ、縄文時代の集石遺構・遺物包含層、中世集落跡が検出されているほか、ダム建設及び関連事業の進捗に伴って発掘調査も増え、**九郎遺跡１区**（大字栗並：縄文時代前期の集石遺構、遺物包含層，平成７年度調査）、**大野遺跡１区**（大字大野：鎌倉～室町時代の集落跡，平成８年度調査）、**西畑瀬遺跡１区**（大字西畑瀬：古墳時代前期の小穴、中世～近世の集落跡，平成９年度調査）、**西畑瀬遺跡２区**（大字西畑瀬：弥生時代中期の甕埋納遺構及び中世～近世の集落跡，平成12年度調査）、**東畑瀬遺跡１区**（大字東畑瀬：縄文時代早期・晩期の遺物包含層，中世の集落跡、平成12年度調査）、**大野遺跡２区**（大字大野：縄文時代後期後半の遺物包含層、中世の集落跡，平成12年度調査）の各遺跡の調査が実施されている。

調査方法及び内容　確認調査は嘉瀬川ダム建設に伴う水没地区を中心として実施し、平成11年度は対象面積270haのうち、約90haを対象に、また12年度は約45haを対象に行なった。11年度は総数604本、12年度は総数397本の試掘坑（トレンチ）を設定し、調査にあたっては、掘削機を主に用い、掘削機が進入できない箇所については人力により実施した。以下に各地区毎の調査概要について述べる。

畑瀬地区　11・12年度合わせて計312本のトレンチを設定した。その結果、16箇所のトレンチで中世～近世にかけての集落跡に関連すると思われる土壙・小穴を確認したほか、中世の青磁・白磁・土師器、近世の陶磁器、及

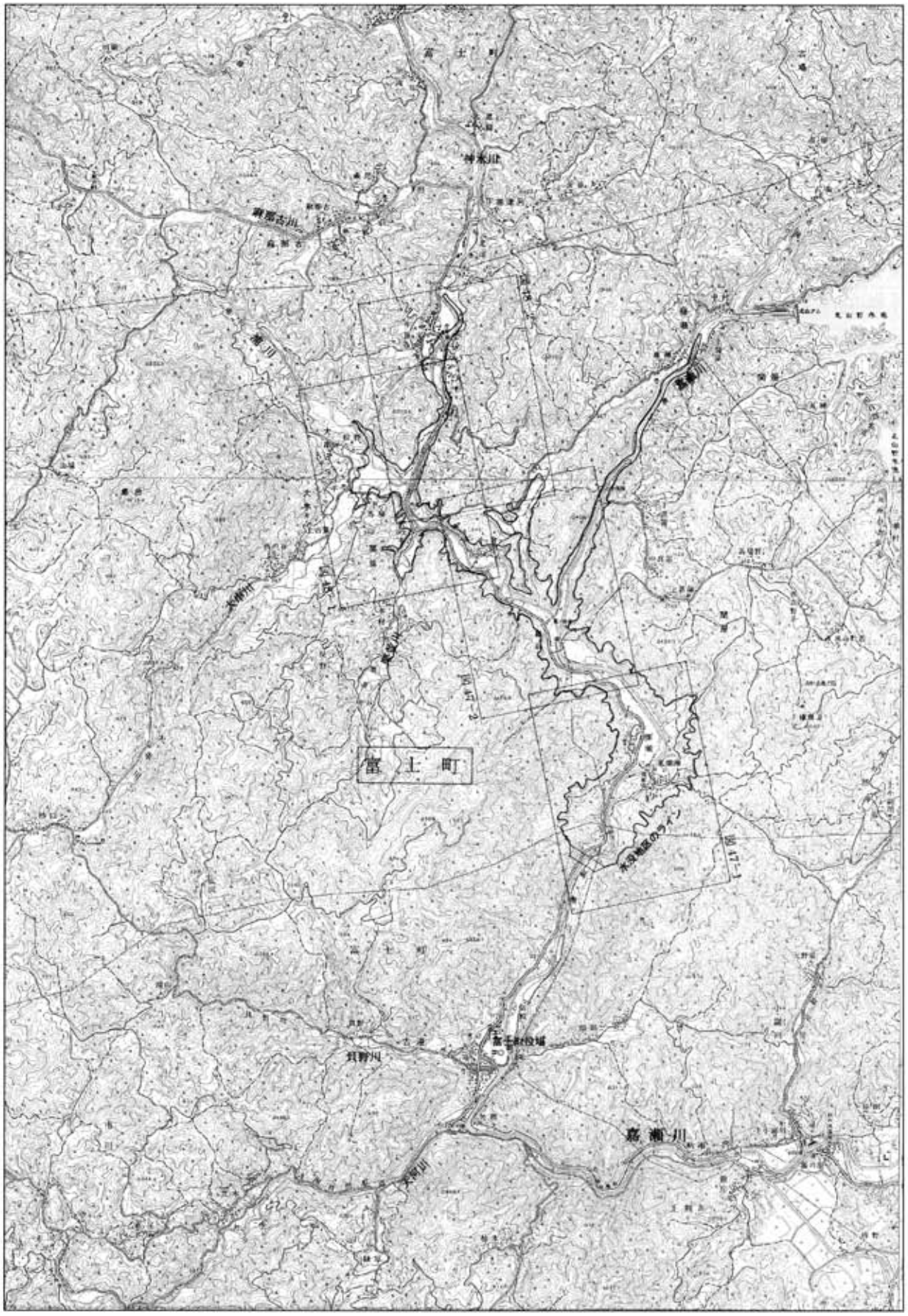
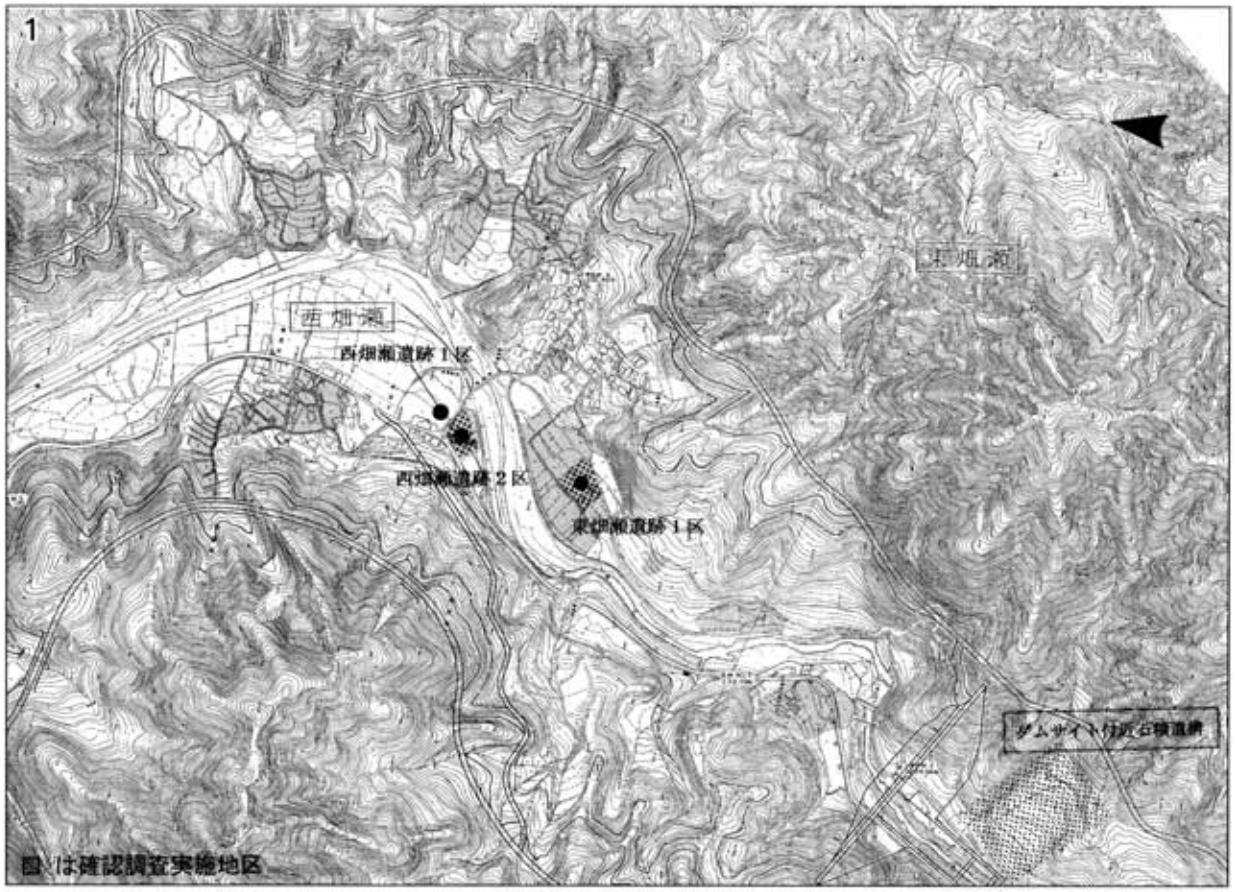


図46　嘉瀬川ダム建設予定地範囲図（1/50,000）



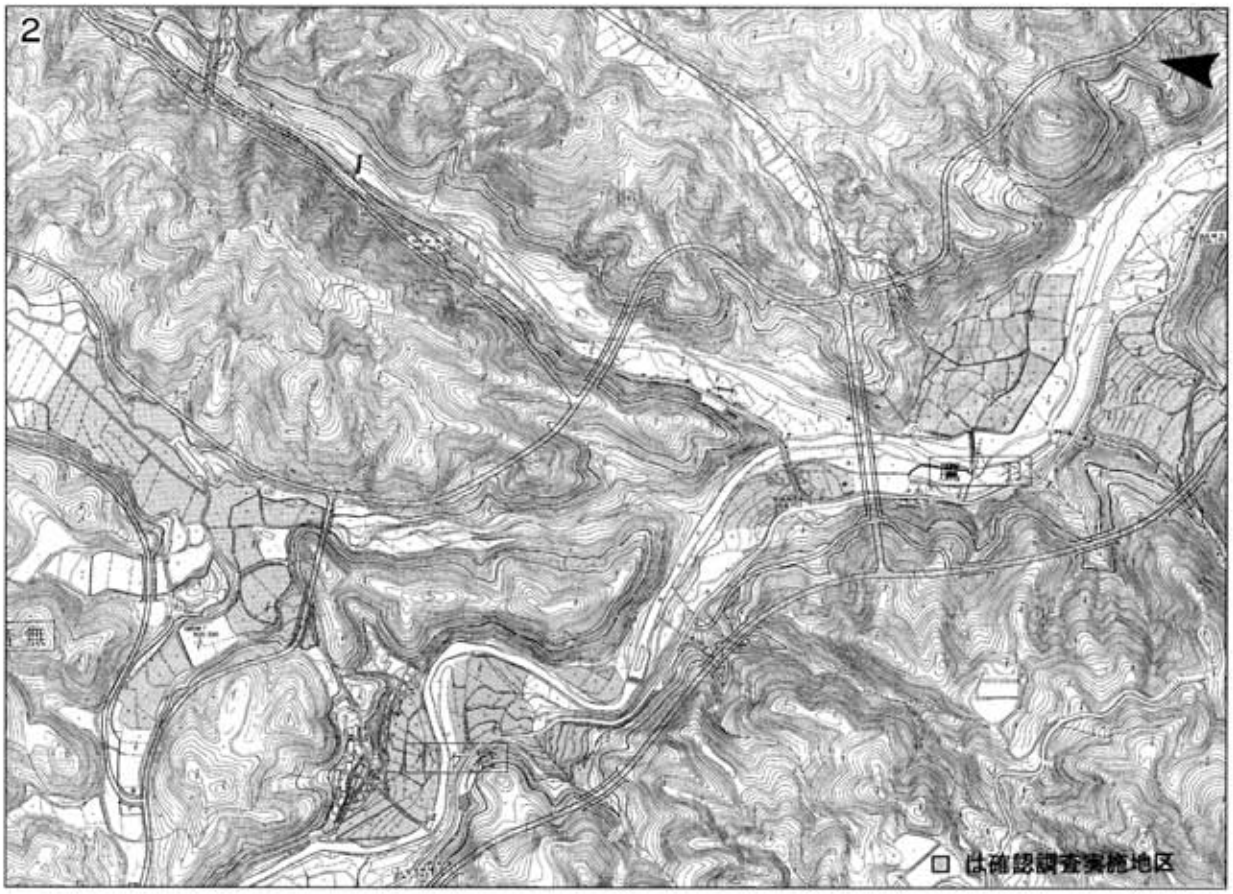
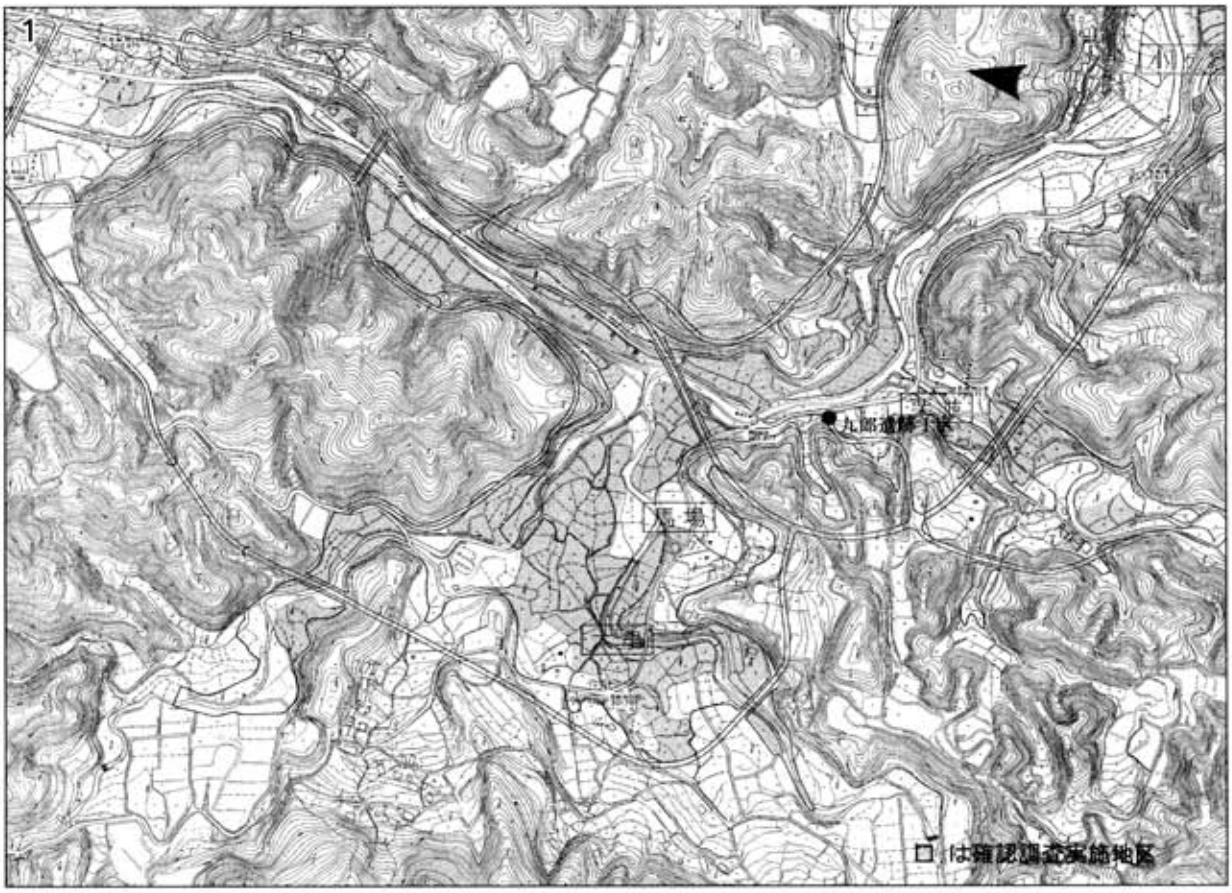


図47　嘉瀬川ダム建設予定地確認調査実施地区位置図1　(1/12,500)



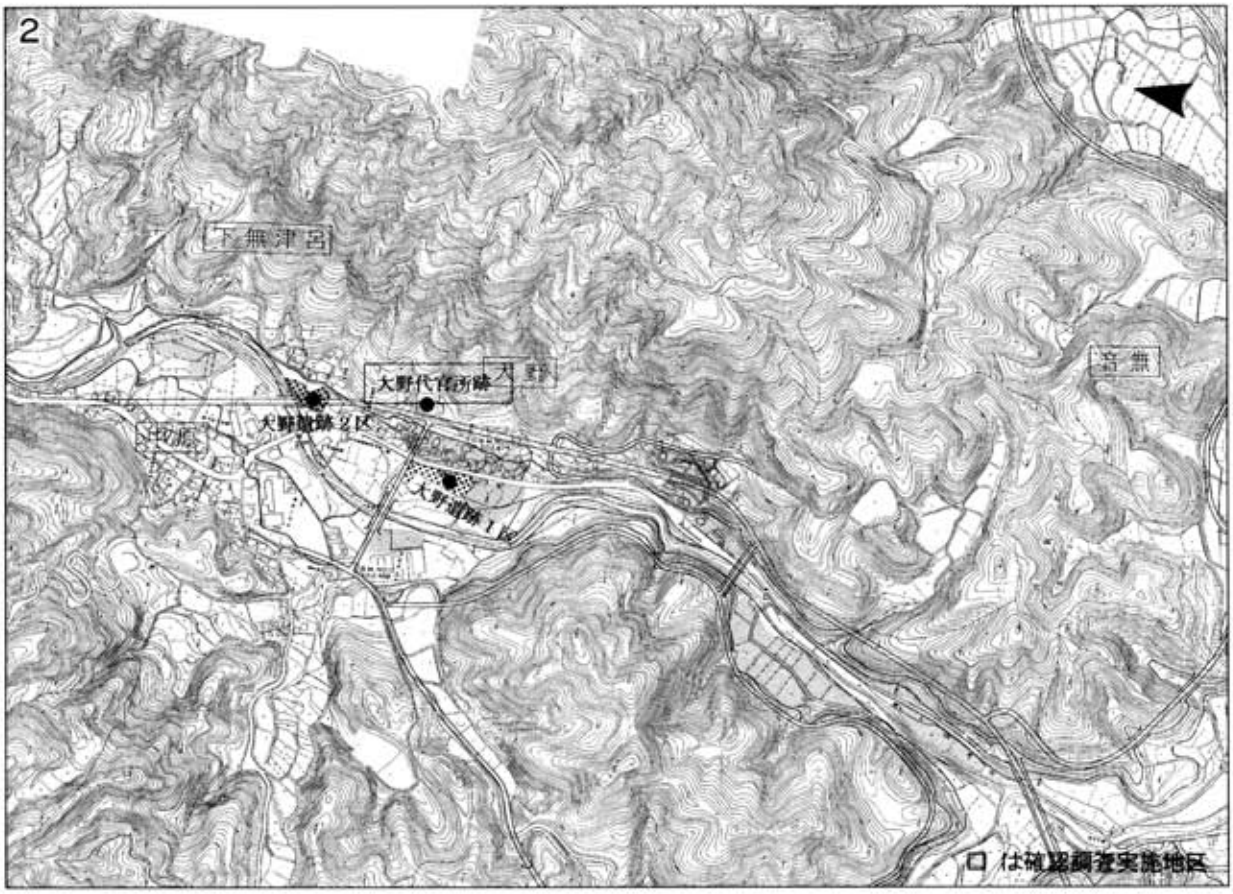


図48　嘉瀬川ダム建設予定地確認調査実施地区位置図２（1/12,500）

び黒曜石片、時期不明の鉄製品等を検出した。出土遺物の多くは、水田耕作土及び耕作地の造成土中に包含されており、広範囲の水田造成工事によって混入したものと思われるが、特に中世の遺物については、現集落の周辺にその使用者の活動拠点があったと推定され、それが江戸時代後期には既に消滅していたことが『小城畑瀬村図』の記載から窺える。なお、このうち西畑瀬遺跡30,000㎡について平成13年度に発掘調査を予定している。

鷹ノ羽・菖蒲地区　11年度に108本のトレンチを設定し、調査を行なった。その結果、近世陶磁器等の遺物を検出したものの、遺構については確認できなかった。

音無地区　11年度に88本のトレンチを設定し、調査を行なった。その結果、近世期等の遺物を検出したものの、遺構については確認できなかった。

栗並地区　11・12年度合わせて142本のトレンチを設定し、調査を行なった。このうち、12年度の調査では３箇所のトレンチで遺構を確認し、時期不明（中世？）の小穴を検出した。また、遺物は10箇所のトレンチで確認しており、縄文土器・中世の白磁・土師器、近世の磁器、黒曜石片等がみられた。おそらく栗並地区代替地東側段丘下の栗並川沿いの旧水田部においては、縄文時代の遺物包含層が残存していることが予想される。

小ケ倉地区　11・12年度に50本のトレンチを設定し、調査を行なった。現況の小ケ倉の集落付近は『大串村他図』に“小狩倉”、『大野村図』には“古賀クラ”として記載されており、当時の集落構成が現集落のそれとほぼ重複していることから、集落域全体の測量及び発掘調査が必要である。

大串・みさきばる地区　11・12年度合わせて125本のトレンチを設定し、調査を行なった。このうち、12年度の調査では４箇所のトレンチで遺構を確認し、中世の土壙及び小穴を検出している。また、遺物は４箇所のトレンチで確認しており、中世の土師器、近世の磁器等がみられた。遺構の分布状況から判断すると、中世集落跡の中心は大串川西岸の微高地上（標高304ｍ以上で水没地区外にあたる）に展開しているものと思われ、今後の振興事業等の開発には注意を要する。

大野・中原地区　11・12年度合わせて190本のトレンチを設定し、調査を行なった。このうち、11年度の調査では、大野地区において中原地区と神水川を隔てて接する中原橋付近で縄文時代早期の生活跡を確認した。また、12年度の調査では３箇所のトレンチで遺構が確認され、時期不明の小穴のほか、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層が検出された。また、遺物は30箇所のトレンチで確認しており、弥生土器・中世？の土師器、近世～近代の磁器、黒曜石片等がみられた。

特に平成７年度に発掘調査が実施された九郎遺跡１区の対岸にあたる地蔵平地区においては、丘陵部のほぼ全域からサヌカイト製石槍・黒曜石製細石核・剥片尖頭器・ナイフ形石器・サヌカイト剥片・黒曜石剥片・縄文土器等が出土しており、縄文時代の生活跡が広範囲に広がっていることが予想される。

なお、大野集落のほぼ中央には、大野代官所跡の存在が知られている。代官所跡の概要については「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書19」の中で触れたが、代官所跡の保存について、国道付替工事との調整が必要となったため、11年度に代官所跡の範囲について確認するために地形測量を委託により実施した（図49）。その後、嘉瀬川ダム工事事務所との協議の結果、道路の線形について計画変更を行い、代官所跡の本体については保存がなされることとなった。

ダムサイト付近石積遺構　12年度にダム本体（堤体）の建設予定地周辺を現地踏査したところ、これと隣接する関連工事区内に時期不明の石積遺構が広範囲に分布していることが明らかとなった。当該地区では東西約200ｍ、南北約120ｍの範囲で斜面が細かく段造成されて平坦面が造り出されており、石積遺構はこの段の谷側に面する法面に部分的にみられる。石積遺構は規模の大きいところで、長さ約50ｍに及び、高さも最大約3.1ｍを測る。

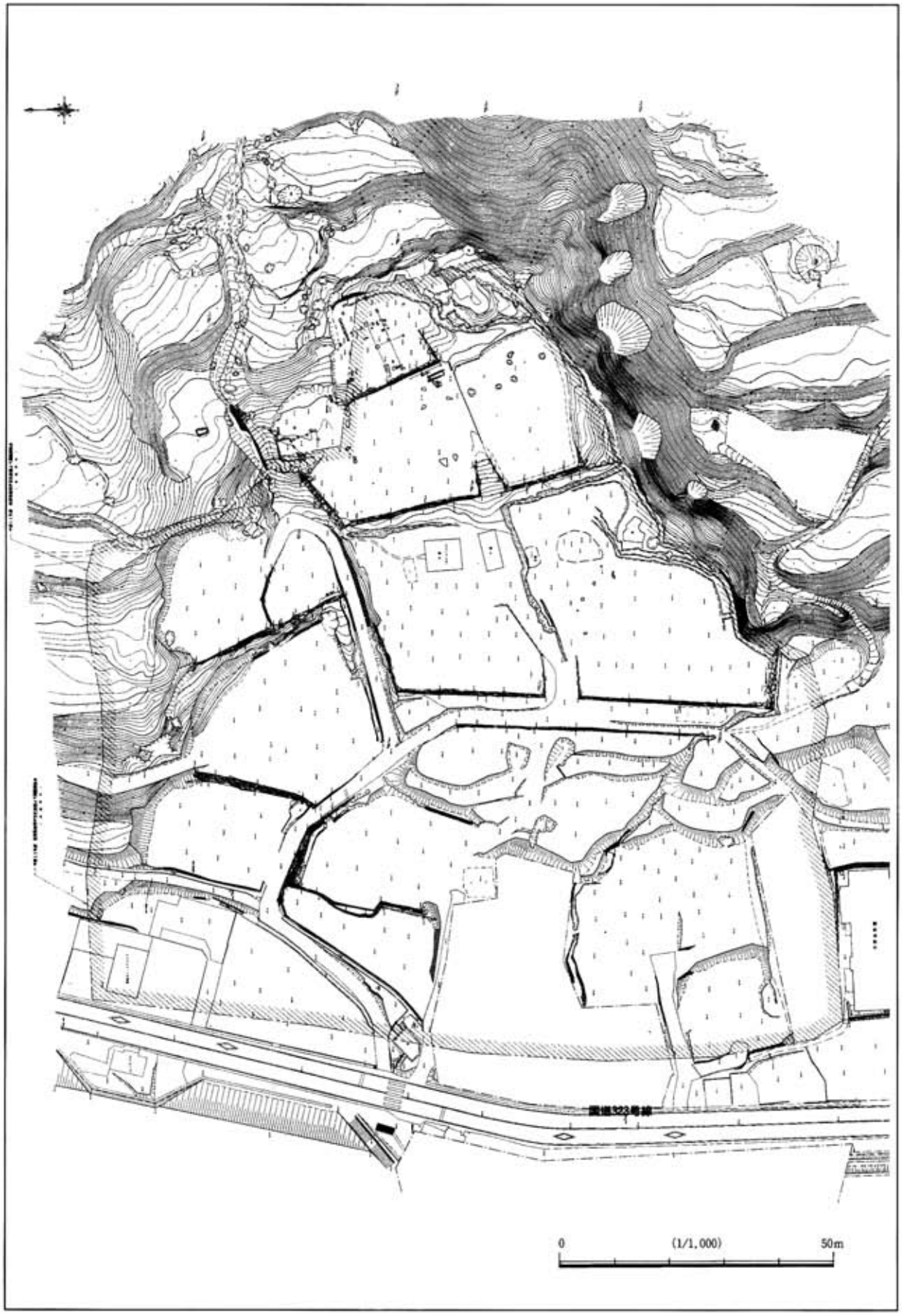


図49　大野代官所跡周辺地形測量図

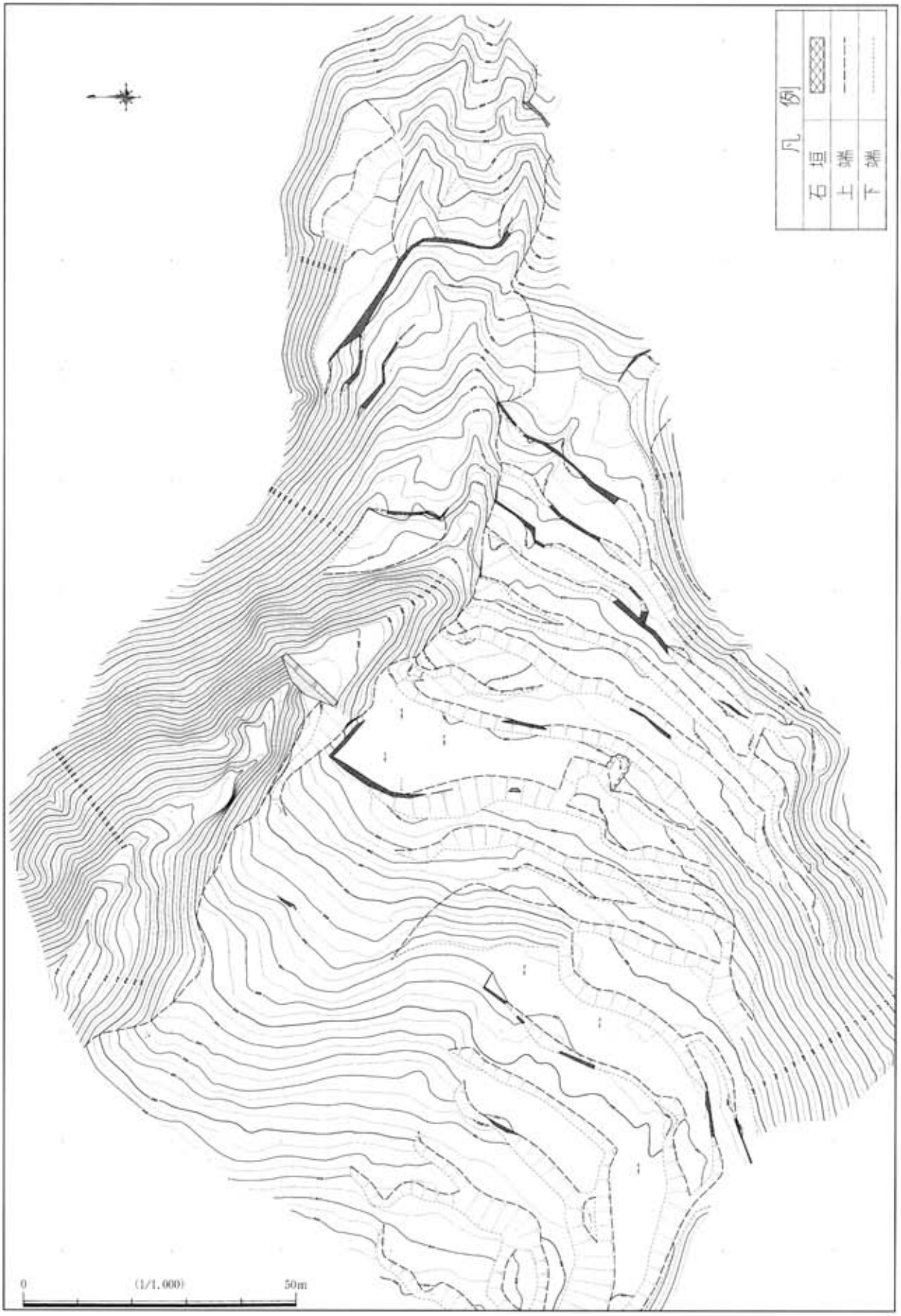


図50　ダムサイト付近石積遺構周辺地形測量図

造成により造り出された平坦面は、概ね南北に細長く狭い帯状を呈するが、中には東西幅約20m、南北約３m程の広い区画が造られている。石積みの積み方は概ね横方向に目地が通る布目くずしで、自然石をそのままではなくある程度割って用いているようであるが、矢穴については未確認である。今のところ、表面採集遺物もなく、試掘調査も実施していないため、石積遺構の時期については明らかではないが、石の積み方等から推定すると近世期まで遡る可能性が考えられる。よって、これらの石積遺構の範囲について早急に確認し、嘉瀬川ダム事務所との調整を図る必要が生じたことから、平成12年度に委託により周辺地形測量図の作成を行なった（図50）。今後、試掘調査等を実施することも考慮し、当該地区における工事計画が具体化した場合は保存等について協議を行って行く予定である。

所　　見　平成11・12年度に実施した確認調査における調査対象面積は合わせて約135haである。これは嘉瀬川ダム建設に伴う水没地区約270haのうち、要確認調査対象地区とした約180haの約75％にあたる。さらにこの確認調査によって発見された遺跡は約42haに及び、当初の予想どおり旧石器時代～縄文時代、中世、近世の遺跡を中心とするものの、新たに弥生時代中期、あるいは古墳時代前期の遺構・遺物も検出されている。おそらく、時代毎の多寡はあるものの、嘉瀬川に沿った小盆地状の平野部を中心として旧石器時代から近世にかけて生活が営まれていたものと考えられよう。それでも縄文時代及び中世の遺跡が最も多く分布して見られることは疑いなく、地区別に見れば縄文時代の遺跡は畑瀬，栗並，大野地区、また中世の遺跡は畑瀬，小ケ倉，大串・みさきばる，大野の各地区で確認されており、狭い侵食谷の中の限られた区域に生活域を求めたことから、自ずと各時代の遺構・遺物が重複して見られることも特徴と言える。今後、この確認調査結果を基に嘉瀬川ダム工事事務所と埋蔵文化財調査の実施について協議が進められることとなるが、対象地が水没地区に含まれることから現状保存の措置をとることのできる遺跡はかなり限られるものと予想される。

［3］その他公共事業に係る文化財確認調査

(1) 佐賀市

調査対象地区名　県営佐賀城公園造成工事施工地区

調査対象地遺跡名　佐賀城跡（本丸跡）

調査対象地所在地　佐賀市城内２丁目

調査対象面積　500㎡

調査対象地区の立地　佐賀市の南寄り、佐賀市街の中心地に含まれ、現在は佐賀県庁をはじめ、学校、博物館・美術館等が集中し、民家もかなり密集して建てられている。旧地形としては、有明海沿岸の沖積性低地にあたり、本丸跡付近での標高は約3.5mである。現在は平成５年度に赤松小学校が移転した後は歴史資料館建設予定地として更地の状態である。

遺跡の内容　佐賀城跡は、佐賀平野の低平地に築かれた近世期の城で、周囲を最も幅広の所で約40間の堀に囲まれた典型的な平城である。その前身は、天正年間に整備された龍造寺氏の村中城を拡張したもので、慶長13年（1608）から慶長16年まで鍋島直茂・勝茂親子の佐賀城総普請により完成した。本丸や二の丸の曲輪はこの時に新たに付け加えられたものと言われている。

佐賀城は大きな火災に二度遭っている。享保11年（1726）の火災では天守をはじめ、本丸・二の丸・三の丸のほとんどが焼失し、享保13年に二の丸、宝暦５年に三の丸が再建された。その際、本丸の再建は見送られ、二の丸が藩政の中心となった。天保６年（1835）再び火災に遭い、二の丸が焼失したため、10代藩主直正は本丸再建を表明し、「佐賀城御本丸差図」が作成された。この差図には、本丸御殿の諸建物が描かれており、平成５・６年度の佐賀市教育委員会の確認調査で良好な礎石が確認され、差図とほぼ一致することがわかっている[1]。

明治に入ると、佐賀城本丸跡は、県庁や裁判所、学校敷地として変遷しており、旧佐賀城本丸御殿の建物も昭和33年の御座間の移転を最後に本丸から姿を消している。現在、佐賀城に残る建物としては、国重要文化財の「佐賀城鯱の門及び続櫓」が残るのみである。なお、平成５・６年度の確認調査及び11年度の県教委による確認調査で本丸の歴史的意義が高まったため、平成13年３月に本丸と堀が県史跡となっている。

調査方法及び内容　今回の調査は、佐賀城公園造成との調整のため、平成５・６年度にその一部が確認された西側石垣の残存状況の確認のために行ったものである。西側石垣・土塁・櫓台・帯曲輪・堀を中心に確認を行い、一部石垣の下部構造の確認を行った。調査は、掘削土量が多いため重機（バックフォー）によって行い、また石垣前面敷地の幅が狭いため排土はダンプカーにより敷地内に運搬した。重機掘削後は、人力により遺構の検出及び精査を行った。以下に調査地点毎に述べる。

①西側石垣　南北に残る石垣前面を掘削し、石垣の残存状況を確認した。前面には帯曲輪が残っているため、石垣の残存が確認できた部分は帯曲輪の遺構面までは掘り下げなかった。南側櫓台にすり付く部分は旧校舎により破壊を受けているが、全体的には石垣が残っている。石垣は約106m、高さは平均すると１m前後で２段から３段程度、最も残りの良いところで４段が残っている。石垣北端部から約16mは本丸側も石垣であるが、それより南側は石積みを施さず、幅約14mの土塁（土羽）である。石垣裏栗は２m以上の幅があり、径20cm程度の大きめな丸石を用いている。

石垣は大半が粗割石の乱れ積みである。石材は安山岩系がほとんどであり、一部に花崗岩も混じっている。石材の大きさは、横１m内外、高さは0.8m内外、控えは0.8～1.0mある。石材には大型の矢を使用した割加工の跡

図51　その他公共事業に係る文化財確認調査実施地区（1/50,000）

1　県道中原三瀬線（上峰町）　2　県道川久保・鳥栖線（上峰町）　3　自衛隊目達原補給処（上峰町）
4　国道385号（東脊振村）　5　佐賀城公園造成（佐賀市）　6　県道鷹島肥前町（肥前町）

も見られるが、さらに割って使用していることから積み直したことが想定できる。また、石材には刻印を施しているものも多い。

石垣の根石の状況を確認するため二箇所を掘り下げた。根石の前面は根固めのため大きめの石で覆っており、強固にしている。根石の下には松材の胴木を置き、さらにその前面にも松杭を打っていることが明らかとなった。

②木樋　西側石垣の北端付近で木樋を確認した。当初は石垣前面で確認したため、さらに本丸側のトレンチを拡張したところ、本丸内部まで続いていることが判明した。この木樋は石垣の下を通っており、石垣は木樋を通す構造になっていることから、この石垣と同時期のものと考えられる。木樋は、板材を４枚組み合わせた箱式のもので、内法は幅約30㎝、高さが約25㎝、石垣西側部分は底板や側板がほぼ完全な形で残り、一部蓋板やそれを留める釘の一部も残っている。木樋の下には枕木状に横木を置き、不等沈下を防いでいる。底板や側板の継手も精巧に作られている。全長は約18m、石垣西側６ｍのところで三の丸との間の堀へと繋がる。本丸側も６ｍ程遺存するが、蓋石や側板の残りは悪い。なお、石垣を挟んで西側と東側では、底板上面で約15㎝の高低差があり、本丸側が高い。木樋の用途については、本丸と三の丸との間の堀に接続しているところから、排水施設として設置された可能性も高いが断定はできていない。

③帯曲輪　西側石垣前面の帯曲輪の幅を確定するために、３本のトレンチを設定した。その結果、前面から約６ｍで堀になることが確認できた。帯曲輪西側の堀からは新しい瓦類が出土している。また、帯曲輪の護岸は板材で補強し石積みは行っていないことや、通路面は砂利を敷き詰めていることなどがわかった。

⑤櫓台　櫓台については平成６年度の確認調査でほぼ全面を検出していたが、今回はさらに周囲を拡張し、全体の規模を確認することを目的とした。櫓台南面石垣は二重の構造になっており、前面石垣の上部には落石が覆い被さっていたことからこれらを時期差によるものと考えていたが、落石を除去して調査したところ、犬走りの可能性が高くなった。櫓台も西側石垣同様上部は破壊を受けており、高さ約１ｍ、２段程度が残っている。裏栗は幅約２ｍ程あり、西側石垣と比べ砂利が多く見られる。櫓台の中心部分は砂利と砂と粘土を交互に重ねて盛土しており、西側石垣の本丸側土塁と比べ丁寧な工法である。

石垣は、西面の一部と北面に粗割石による布積みが見られるが、大半は精加工石の乱れ積みである。精加工石材は、隣り合う石材の形状に現場合わせで加工を行なっており、ノミを用いて平滑に仕上げている。石材は、安山岩系と花崗岩系が半々であるが、角石はすべて花崗岩である。石材の大きさは、平石で横0.8m内外、高さ0.6m内外、控えは0.8～1.0mある。角石は算木積みであり、長辺が1.5m内外、短辺が0.8m内外、高さが0.5m内外である。

⑦その他　土塁の幅を確認するために設定したＢトレンチの東半分部で石組みの溝を検出した。長さは約10m、幅約0.3m、石材は赤石のゴボウ石であり、一部破損している。石の下には大量の瓦があり、瓦を使った造成面の上に溝は築かれている。この石組みの溝は西側石垣に直交しておらず用途は不明である。

所　　見　今回の調査では、①西側石垣・櫓台は全体的に残っており、残存する石垣を基に復元が可能なこと、②西側石垣・櫓台は石積み技法から数回の積み直しが認められること（積み直しの時期については、今後の検討課題である）、③木樋は佐賀城の中では初めての出土であり、また石垣の下に木樋を通す構造を確認できたことは、佐賀城の上下水道計画を考える上で貴重な資料になること、④土塁の規模について平成６年度の調査結果と整合できたこと、⑤帯曲輪は通路面もしっかりしており、幅について今回の調査で明らかにできたこと、等が成果として挙げられる。今後は遺構の保存、あるいは遺構を活かした公園計画となるよう、県土木部と調整を図っていくことにしている。

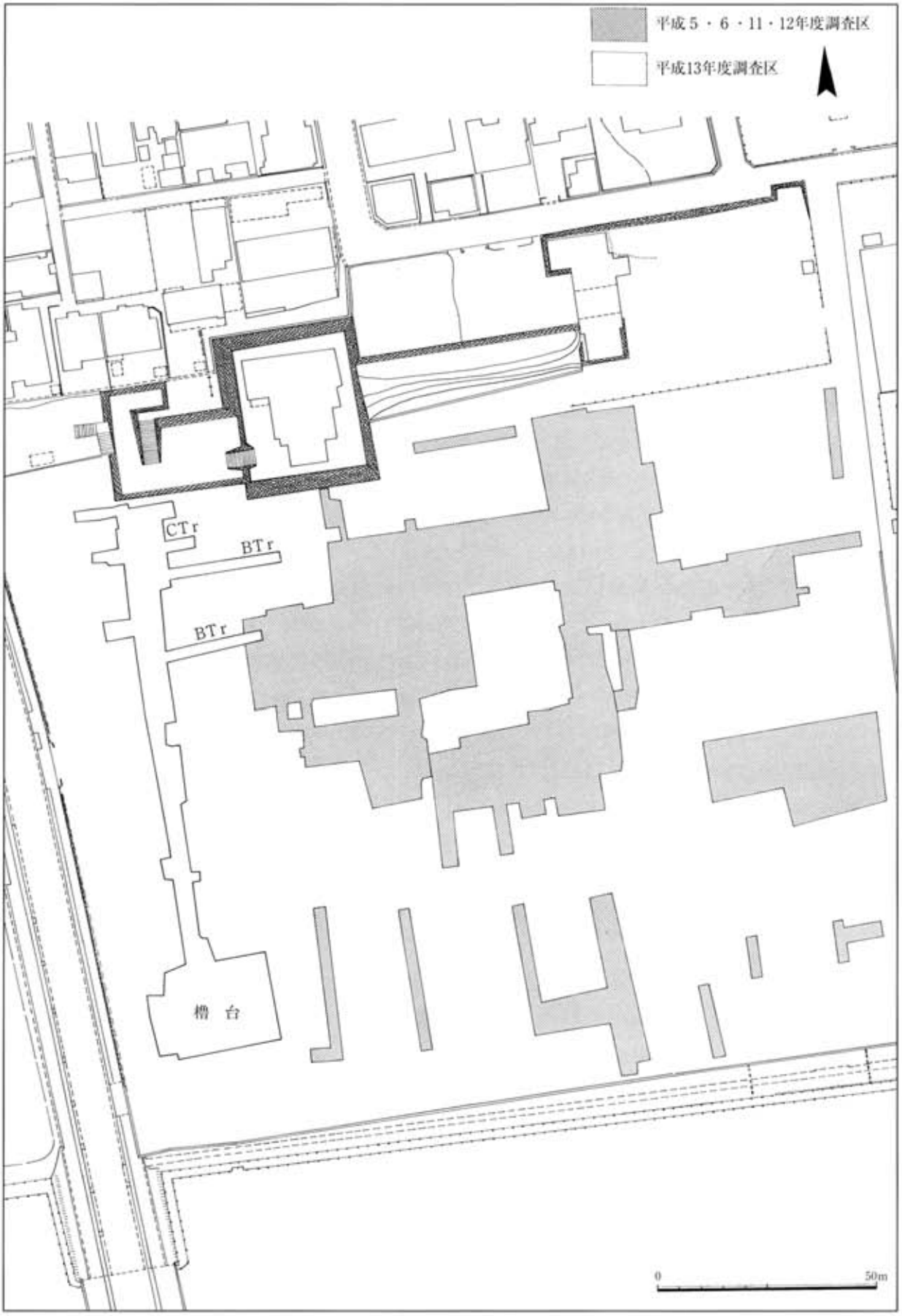


図52　佐賀市：佐賀城本丸跡トレンチ配置図

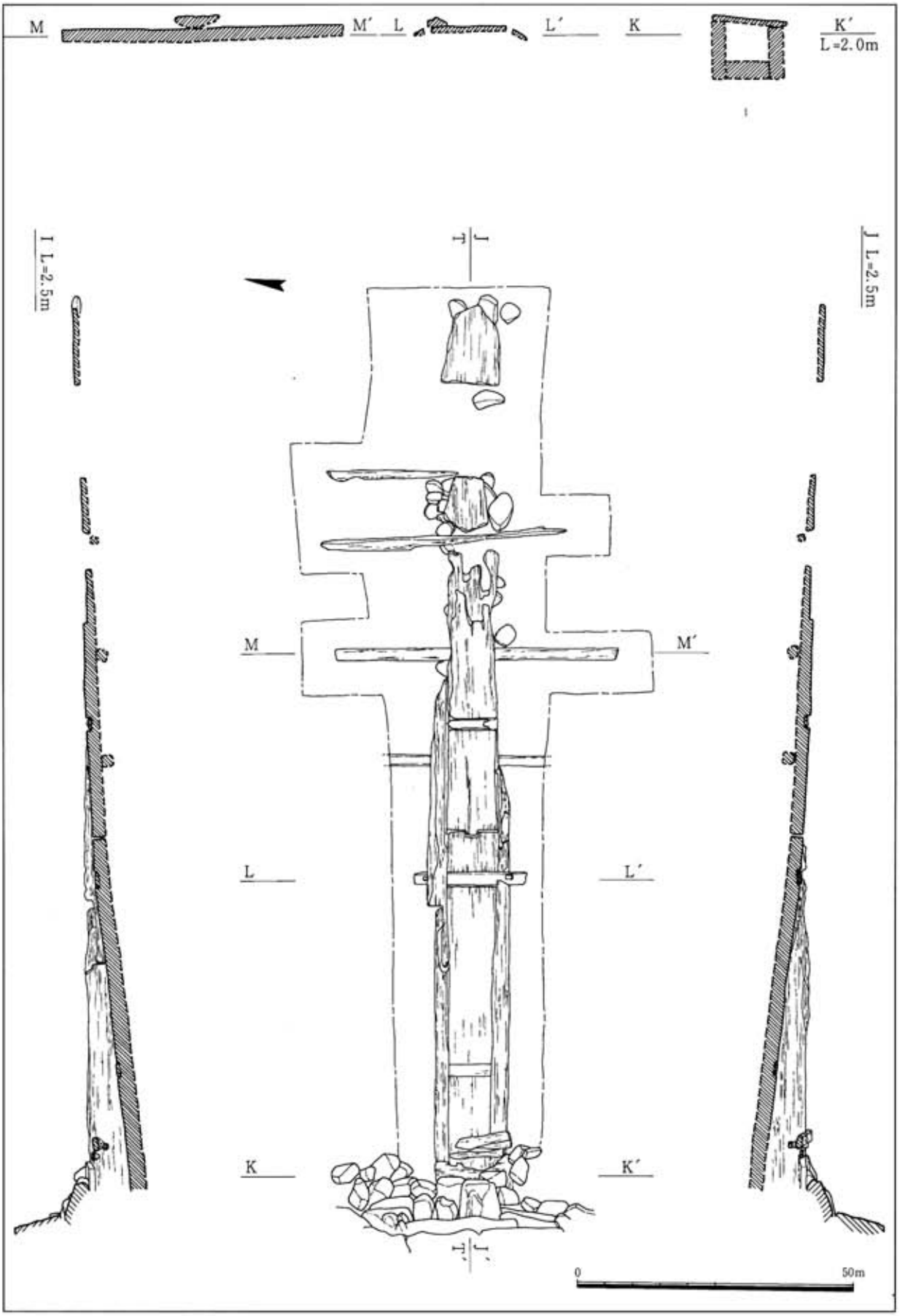


図53　佐賀城本丸跡西側石垣木樋1

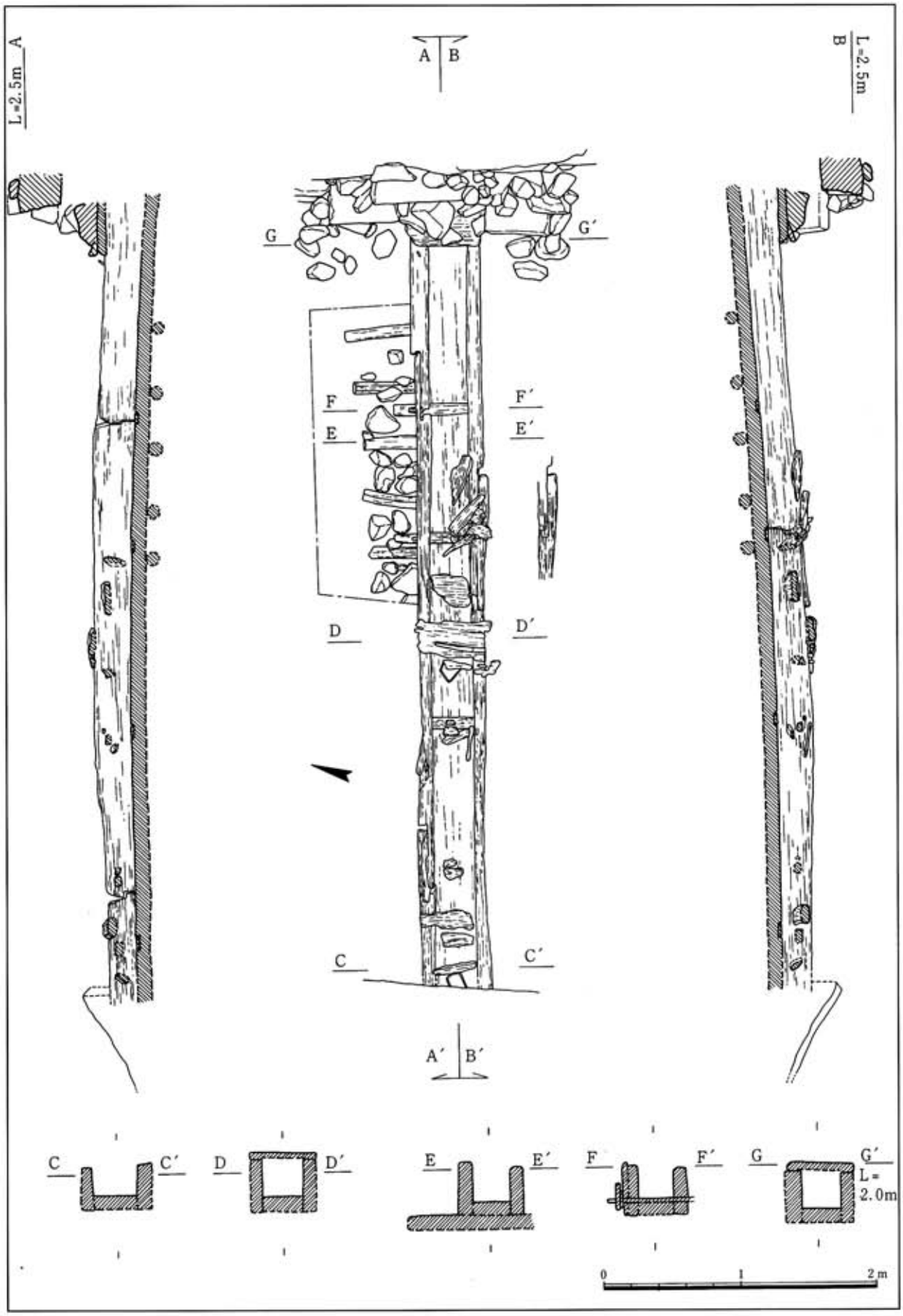


図54　佐賀城本丸跡西側石垣木樋2

本丸跡　西側石垣（西から）

本丸跡　西側石垣胴木（西から）

本丸跡　櫓台（北東から）

本丸跡・櫓台北面石垣西側隅角部（北から）

本丸跡　Aトレンチ（北西から）

本丸跡　Bトレンチ石組み溝（東から）

本丸跡　Bトレンチ石組み溝（北から）

本丸跡　Bトレンチ瓦層（西から）

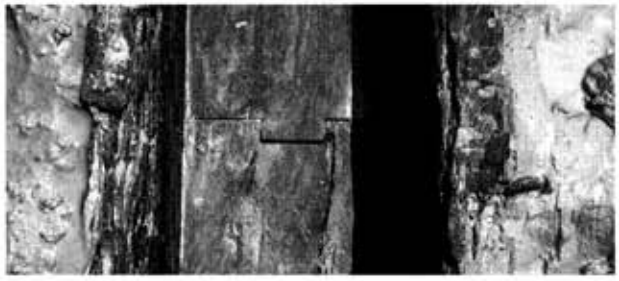
図版17　佐賀城本丸跡①

本丸跡木樋（石垣西側）出土状況（西から）

本丸跡木樋（石垣西側）及び石垣開口部（北西から）

本丸跡木樋（石垣西側）側板継手

本丸跡木樋（石垣西側）横木（北から）



本丸跡木樋（石垣西側）底板継手

本丸跡木樋（石垣西側）出土状況（西から）

本丸跡木樋（石垣東側）底板及び横木（北西から）

本丸跡木樋（石垣東側）横木（北から）

図版18　佐賀城本丸跡②

註１）佐賀市教育委員会「佐賀城跡―佐賀城本丸跡埋蔵文化財確認調査報告書―」佐賀市文化財調査報告書第76集　1996

(2)　上峰町

調査対象地区名　　県道佐賀川久保・鳥栖線拡幅工事施工地区

調査対象地遺跡名　　屋形原遺跡

調査対象地所在地　　三養基郡上峰町大字堤

調査対象面積　　0.48ha

調査対象地区の立地　上峰町の北西部、鎮西山（201m）南方にあたり、切通川上流西岸の東脊振村界に位置する独立丘陵から南に舌状に延びる低位丘陵（屋形原丘陵：標高30～32m付近）に位置する。県道川久保・鳥栖線はこの低位丘陵面を東西に横断する形となっている。現況屋形原集落に含まれ、県道を挟んだ北側には株式会社フランスベットの工場があり、広範囲にわたって造成がなされているため、旧地形についてはほとんど窺い知れない。

周辺の遺跡及び内容　対象地は屋形原遺跡に含まれ、縄文時代～奈良時代の集落跡とされているが、もともと「やかた」の由来については北方の鎮西山城主の居館跡がこの地にあったことに由来すると言う。調査対象地区の北方高位段丘上には屋形原古墳群が、切通川東岸の丘陵上には青柳古墳群、堤六本谷遺跡が、また南西の二塚山丘陵上には弥生時代から古墳時代の墳墓群として著名な二塚山遺跡群が分布している。

調査方法及び内容　工事は現況県道を長さ約130mにわたって南側に拡幅するもので、道路敷となる部分に対し、３箇所のトレンチ（長さ10m、幅１m）を設定した。掘り下げにあたっては掘削機を使用した。

いずれのトレンチでも表土である整地層を除去したところ、花崗岩の風化土壌が確認され、遺構・遺物については出土しなかった。

所　　見　調査対象地周辺は既存県道が屋形原丘陵を東西に横断する形で走る部分で、試掘箇所は、表層に県道沿線の宅地などの整地層直下より基盤層が検出され、旧地表面・自然堆積層については確認できなかった。このようなことから、当該地区は既存県道及び沿線開発等ですでに旧地形が大きく削平されているものと考えられる。

調査対象地区名　　県道中原・三瀬線拡幅工事施工地区

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　三養基郡上峰町大字堤

調査対象面積　　0.14ha

調査対象地区の立地　上峰町の北西部、鎮西山（201m）西麓にあたり、現況鳥越集落内に含まれる。地形的には鎮西山北西方に源を発する切通川による開析谷に位置し、標高は約45～59mである。

周辺の遺跡及び内容　対象地では周知の埋蔵文化財包蔵地は知られていないが、開析谷の両岸の山麓部及び高位段丘上には古墳時代後期を中心とした古墳群が点在する。

調査方法及び内容　工事は現況県道を長さ約300mにわたって拡幅するもので、拡幅部分に対して12箇所のトレンチを設定し、掘削機により掘り下げを行った。

調査の結果、耕作土下からは切通川の氾濫による砂層・砂礫層、あるいは花崗岩の風化土壌からなる基盤層が確認されたものの、遺構・遺物については検出されなかった。

所　　見　調査対象地周辺は切通川の氾濫原にあたり、絶えず河川の作用による砂礫の堆積にさらされていたも

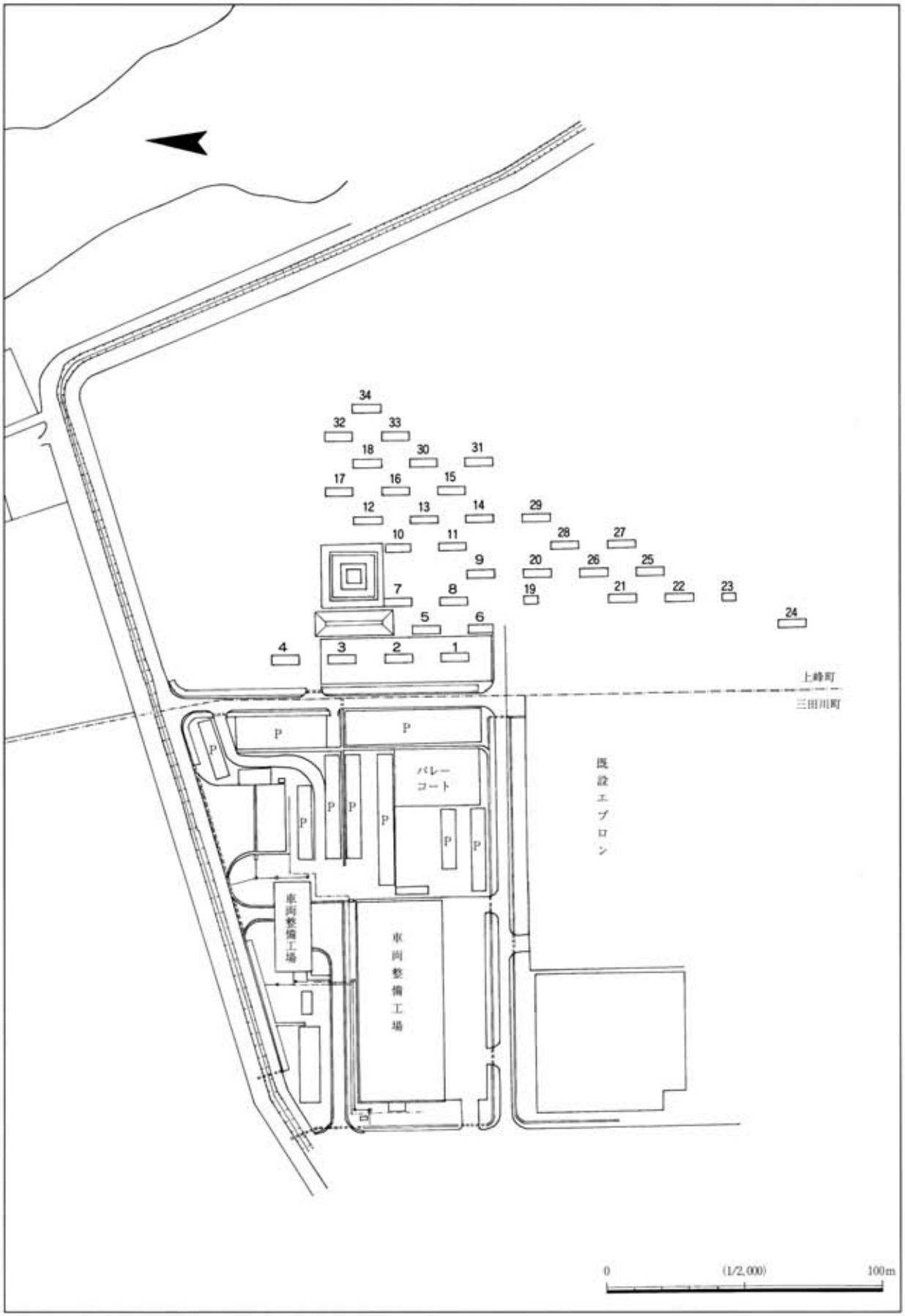


図55　上峰町：自衛隊目達原補給処トレンチ配置図

のと推定され、遺跡の存在する可能性は低いものと思われる。

調査対象地区名　陸上自衛隊目達原補給処整備工事施工地区

調査対象地遺跡名　目達原古墳群

調査対象地所在地　三養基郡上峰町大字坊所

調査対象面積　1.2ha

調査対象地区の立地　上峰町のほぼ南部、上峰町と三田川町にまたがる目達原段丘上（洪積世高位段丘上）の標高約17m付近に位置する。現在、段丘上の当該地付近は、戦時中は日本陸軍の飛行場として、また戦後は陸上自衛隊の補給処として平坦に造成がなされているが、かつては複数の丘陵や谷で構成された起伏に富んだ地形であったと考えられ、その名残は調査対象地区東側の外記溜池付近の谷状地形に見られる。

周辺の遺跡及び内容　対象地を含め、目達原段丘の国道34号以南の範囲が目達原古墳群の範囲に含まれる。目達原古墳群は墳長50m前後の前方後円墳４基（上のびゅう塚、大塚、塚山、稲荷塚古墳）、直径35mの大型円墳１基（古稲荷塚古墳）を中心として、その他小型の前方後円墳・円墳数基からなっている。目達原古墳群では５世紀初頭の瓢箪塚古墳（墳長約24mの前方後円墳）から、５世紀中頃の上のびゅう塚、５世紀後半の大塚、５世紀末の塚山と続き、６世紀前半の古稲荷塚、稲荷塚までのほぼ150年近くの系譜が窺われ、佐賀平野においては佐賀平野中部地域における西原古墳・西隈古墳・関行丸古墳などを中心とした同時期の古墳群と共に、佐賀平野を二分する首長墓系譜と見られる。現在は目達原飛行場建設等に伴い、上のびゅう塚古墳を除いてすべての古墳が湮滅している。今回の調査対象地に近接するものとしては、北側300m付近に大塚古墳、南側500mに古稲荷塚古墳が位置していたと想定されるほか、調査対象地と外記溜池を挟んだ東側丘陵上に位置する上のびゅう塚古墳は、国造本紀の竺志米多國造の墳墓に比定され、昭和18年より佐賀県唯一の陵墓参考地として管理されている。そのほか、目達原丘陵から南東へ派生する下津毛、坊所の各支丘上には、坊所一本谷遺跡、坊所五本谷遺跡、樫寺遺跡、坊所城跡など弥生時代から中世に及ぶ集落・墳墓遺跡が存在している。

調査方法及び内容　工事は補給処敷地の東側部分に関連施設を新たに建設するものであり、対象地全面に対し、トレンチ34箇所を設定した。トレンチの掘り下げにあたっては掘削機を使用したが、周辺でのヘリコプター離発着の関係でしばしば調査を中止する事態が生じた。トレンチは長さ10m、幅３mを基本に対象地に対してかなり高い密度で設定したが、多くのトレンチで造成土の下位から基盤層が確認され、遺構及び遺物包含層については検出されなかった。また、出土遺物も見られなかった。

所　　見　各試掘坑では表土・造成土下より基盤層が見られ、旧表土も全く確認されなかった。また、一部のトレンチでは旧日本軍以来の建物基礎、コンクリート廃材を含む盛土層等が検出されたことからたことから、対象地全面がかなり大規模に削平・掘削を被っていることが想像される。

(3)　東脊振村

調査対象地区名　国道385号拡幅工事施工地区

調査対象地遺跡名　三津前田遺跡

調査対象地所在地　神埼郡東脊振村大字三津

調査対象面積　650㎡

調査対象地区の立地　東脊振村の中央部、田手川によって形成された扇状地上、標高約20.5m付近に位置する。

田手川は調査対象地区の南側で東から西に向かって大きくカーブしながら流れ、これにより形成された川沿いの砂礫堆の上に現況では河原の集落が立地している。

周辺の遺跡及び内容　東脊振村は遺跡の分布密度がかなり高い地域であるが、調査対象地周辺では田手川の氾濫の影響を度々被っていたためか、遺跡の存在については知られていない。しかし、近年対象地から北に約500m離れた県道川久保・鳥栖線付近では新たに中ソリ遺跡（中世以降の遺物包含層・流路跡）の存在が知られている。その他、国道を挟んで西側に約500m離れた扇状地上では弥生時代中期を中心とした集落跡である西前田遺跡が、また田手川を挟んだ対岸の中位段丘上には弥生時代の大規模な環濠集落である松原遺跡が立地している。

調査方法及び内容　工事は現況県道を東側水田部に拡幅し、合わせて水路の切り替えを行なうものである。調査にあたっては、長さ８ｍ、幅２ｍの試掘坑４箇所を設定し、掘削機により掘り下げを行った。

調査の結果、耕作土及びほ場整備の盛土の下位から田手川の堆積作用による粘質土層及び砂層・砂礫層が検出された。この層上で精査を行なったところ、杭列や溝状遺構が確認されたため、水田遺構の可能性も踏まえ、引き続いて掘り下げを実施した。その結果、調査区が狭いこともあり、水田遺構を裏付ける区画や畦畔・水路等については検出されなかったが、上述の杭列・溝跡の存在から水周りに関連する遺構と思われ、立地から推定して水田遺構の可能性が考えられる。層中からは弥生時代から古墳時代にかけての弥生土器・土師器・片が少量出土しているが、いずれも小破片であり、これらの杭・溝跡の時期決定までには至っていない。なお、調査対象地は周知外であったが、今回の調査結果を踏まえて新たに遺跡名を「三津前田遺跡」とした。

所　　見　古墳時代以降の水田関連施設の可能性が考えられるものの、調査対象地内では遺構の性格・時期について確証は得られなかった。当該地については確認調査の範囲で記録を行い、平成13年度に実施予定である今回調査対象地南側隣接地において再び確認調査を実施し、遺跡の性格について明らかにしたい。

(4)　肥前町

調査対象地区名　　一般県道鷹島肥前線離島振興事業地区（鷹島架橋建設予定地区）

調査対象地遺跡名　　周 知 外

調査対象地所在地　　東松浦郡肥前町大字星賀乙

調査対象面積　　0.37ha

調査対象地区の立地　調査対象地は肥前町の西端付近、伊万里湾に突き出したリアス式海岸地帯性の半島にあたり、小さく西側に延びる「大ケ崎」と呼称される岬の付け根付近に位置する。地形的には岬の脊にあたる平地部分から海岸に向かって落込む肩部付近にあたり、現況は山林である。当該地付近の海岸は沈降海岸特有の急峻な斜面となっており、対象地は海岸との距離が間近ながら、その標高差は50mを測る。大ケ崎の対岸には、日比水道を挟んで約1.2km離れて長崎県に含まれる鷹島があり、島南東部の神崎海岸では元軍の「管軍総把印」が採集されるなど、元寇関係の遺物が海底に沈んでいる可能性も指摘されている。

周辺の遺跡及び内容　対象地周辺では周知の埋蔵文化財包蔵地は知られていないが、半島内部の脊の部分には旧石器時代～縄文時代の散布地が多く点在している。また、北側の星賀港を挟んだ対岸にあたる星賀地区の岬上には南北１km、東西700mに及ぶ近世以前の城塞群（岩森山、堂家山、権現山）の存在が確認されており、踏査等の結果、複数の中世山城と、豊臣期の文禄・慶長期の石垣技術を伴う城郭とが密集・重複していることが明らかとなっている。また、大ケ崎の南側、入り江を挟んで対峙する「ヤケザキ」と称される岬上では曲輪・土塁・横堀等の中世の遺構が確認されている。

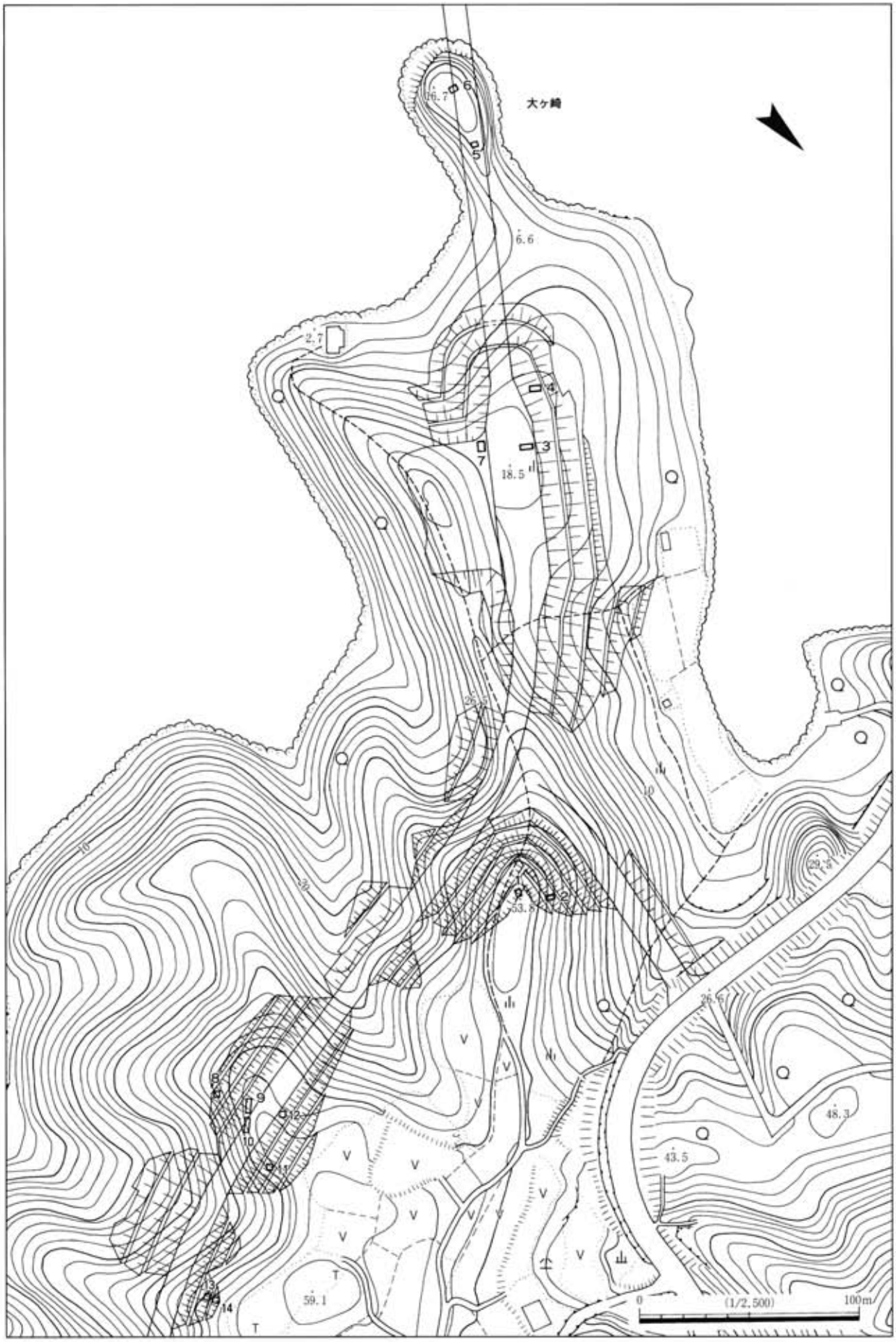


図56　肥前町：県道鷹島肥前線トレンチ配置図

調査方法及び内容　工事は大ケ崎と対岸の鷹島にかけて全長約1.2kmの橋梁をかけて佐賀県と長崎県をつなぐもので、調査対象としたのは入野から星賀に続く町道と並行に走る、橋梁を結ぶ連絡道路部分にあたる。踏査段階では当該地で堀切・竪堀状の遺構が確認されたことから確認調査対象とした。このほか、大ケ崎の先端近くの尾根上では僅かな平坦地が確認されたため確認調査が必要と判断されたが、当該地については肥前町の町内遺跡確認調査事業（国庫補助事業）に基づき、調査が実施されている。

調査対象地は谷部を挟んで東西に分かれており、東側に２箇所、西側に５箇所のトレンチを設定した。掘り下げは掘削機の進入が困難なことから、すべて人力により行なった。その結果、いずれのトレンチでも表土下、あるいは若干の自然堆積層を挟んで黄褐色粘質土からなる基盤層が確認されたが、遺構については確認できなかった。また、出土遺物としては№10トレンチにおいて陶器片１点が採集されたのみである。また、堀切・竪堀かと見られた遺構も道である可能性が高いと思われる。なお、この他大ケ崎の尾根上から岬の突端にかけての三箇所において遺跡が存在する可能性が考えられたため、肥前町の町内遺跡確認調査事業により№１～７トレンチを設定し、調査を実施した。その結果、いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は確認されなかった。

所　　見　大ケ崎周辺の岬上の状況からも中世以降の城塞関連の遺構が発見される可能性が想定されたが、調査対象地周辺では確認されなかった。今後も周辺での関連工事について注意を払う必要があると共に、橋梁工事にあたっては、橋脚設置部分の海底における元寇関連遺跡・遺物の存在についても考慮する必要があると思われる。

Ⅲ．まとめ

平成12年度佐賀県内遺跡確認調査事業に基づく確認調査結果について下記にまとめる。

【農林業基盤整備事業】農林業基盤整備事業では、佐賀東部地区では中原町・東脊振村・脊振村・神埼町、佐賀西部地区では佐賀市・多久市・小城町、佐賀南部地区では太良町、佐賀北部地区では相知町・浜玉町・厳木町・北波多村、佐賀上場地区では北波多村・玄海町の各地で確認調査を実施した。

このうち佐賀東部地区では、東脊振村の九千部山横断線に伴う確認調査では筑前街道と関連すると思われる「尾立の坂」とされる古道について地形測量・トレンチ調査を実施した。その結果、街道と直接結びつく資料は得られなかったものの、古墳時代及び中世の土器が検出され、古くから道として利用されていた可能性を示す成果が得られた。同じく東脊振村の県営かん排事業佐賀東部地区では、墳長50mに及ぶ古墳時代後期の前方後円墳の存在が明らかとなり、佐賀平野における古墳時代の首長墓系譜を考える上でも、新たな資料が得られた。特に周溝からは、多数の円筒埴輪やいくつかの形象埴輪が出土しており、発掘調査による出土資料が少ない佐賀平野における埴輪の様相について、多くの知見を与える資料と言える。今回確認された遺構については、協議の結果、一部遺構の削平を余儀なくされたものの、設計変更により保存の措置を取ることが出来た。

佐賀西部地区では、佐賀市の県営ほ場整備「金立東部」地区の確認調査では、約128,000㎡に及ぶ弥生～中世にかけての遺跡の広がりが確認され、当該地における高い遺跡分布密度を示す結果となった。このうち、設計変更等による保存が困難な部分については、平成13～15年度に佐賀市教育委員会により本調査を実施する予定である。また、小城町では国営佐賀西部導水路に伴い確認調査が実施され、弥生時代～中世にかけての集落跡が広範囲に分布していることが明らかとなった。当該地については、平成13年度に小城町教育委員会により本調査を計画しており、隣接する三日月町においても同事業に伴う発掘調査が予定されているなど、同様に遺跡の分布密度の高い地域である。

佐賀北部地区では県営畑地帯総合整備事業「ひれふり地区」に伴う確認調査で、小山田古墳の墳丘測量調査・トレンチ調査を実施した。本古墳は平成11年度の確認調査において新たに発見された未盗掘の大型円墳であり、墳径32m、内部主体に竪穴式石室と石棺が用いられていることが明らかとなった。東松浦地域の首長墓変遷を考える上での重要な新資料であり、その保存について協議を重ねたが、最終的に事業対象地から外れたことで、当面の保存は図られることとなった。その他、相知町の農免農道「帆柱地区」では、近代以降の炭窯について、実測及び写真撮影による記録作成を行った。こういった、新しい時期の炭窯についての調査例は、昨今増えつつあるが、現在のところ、その時代性故に確認調査の延長による緊急的な調査に終始している。

農林業基盤整備事業については、事業自体が面工事の減少により、確認調査の実施件数も減る傾向にあり、また、遺跡が確認された場合においても、農林部局との細かな調整により、保存の措置がとられるケースも増えてきている。特に、今回確認された、東脊振村石動四本松遺跡ＳＴ217前方後円墳（県営かんがい排水事業）、浜玉町小山田古墳（県営畑地帯総合整備事業）については、佐賀県下の古墳時代を考える上でも重要な遺跡であり、関係者各位には保存についての深い配慮を頂いた。今後も、重要遺跡の保存について早急な措置がとれるよう、文化財保護部局においても、早い段階からの踏査・試掘について実施に努める必要がある。

【嘉瀬川ダム建設事業】　嘉瀬川ダム建設事業に伴う確認調査については、平成11・12年度に実施した調査結果について概要を報告した。平成11年度は嘉瀬川ダムの開発対象面積404haのうち、水没地を中心とした約90haを、また12年度は約44.8haを調査対象に確認調査を行った。その結果、旧石器時代～縄文時代、中世、近世を中心とする遺跡約42haの広がりを確認した。この中には、今まで存在がほとんど知られていなかった、弥生時代中期及び古墳時代前期の遺跡も検出されており、調査例が少なく実態が明らかでなかった山間部の様相について新たなデータが得られている。一方、大野代官所跡やダムサイト付近石組遺構など、近世以降の石垣・石積を用いて大規模に展開する遺跡についても、ダム工事との関連から一部調査が必要な状況が見られ、こういった近世以降の遺跡についての保存、あるいは調査といった取扱いについて、開発側との十分な協議が必要となってきている。

今回、確認された遺跡の多くは、水没地域に含まれるため、そのほとんどが発掘調査の対象となり、保存については難しい状況にあるが、出来るだけ保存の措置が図れるよう、細かな調整を重ねる必要がある。

【その他公共事業】農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業以外の国・県主体の公共事業について、平成12年度は、上峰町で県道鳥栖・川久保線改良工事（0.48ha）、県道富士・中原三瀬線改良工事（0.14ha）、自衛隊目達原補給処内における施設建設（1.2ha）の３地区において、東脊振村で国道385号拡幅工事（650㎡）について、佐賀市で佐賀城公園造成（500㎡）について、また肥前町では鷹島肥前線橋梁工事（0.37ha）に伴いそれぞれ確認調査を行った。

東脊振村における国道385号拡幅工事に伴う調査では弥生～古墳時代にかけての溝跡・杭列等からなる水田関連遺構が検出され、約2.0haに及ぶ遺跡の広がりが確認された（三津前田遺跡）。また、佐賀市の佐賀城公園造成に伴う内容確認調査では佐賀城本丸跡西側石垣下部構造について調査を実施した。その結果、石垣下部より新たに木樋や胴木を検出した他、土塁の規模や櫓台の構造についてのデータが得られ、今後の佐賀城公園計画との調整を図る上でも重要な成果が得られた。

Ⅳ．附　編

－平成12年度農林業基盤整備事業に発掘調査の概要－

表３　平成12年度農林業基盤整備事業等に伴う発掘調査一覧表

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	調査面積	調査主体者	調査担当者
1	鷹取山遺跡５・６区	三養基郡中原町大字原古賀字丸山	1,000㎡	中原町教育委員会	太田・野田
	遺跡の概要	中世山城跡関連の通路・土壙・小穴・曲輪状の段			
2	石土井遺跡（３・４・５区）	佐賀市金立町大字薬師丸字石土井	3,550㎡	佐賀市教育委員会	三代
	石土井遺跡（６区）	〃	260㎡	〃	〃
	遺跡の概要	弥生時代～近世の集落跡、中世の溝跡			
3	上九郎遺跡（２区）	佐賀市金立町大字薬師丸字上九郎	2,050㎡	佐賀市教育委員会	前田
	遺跡の概要	弥生時代～古墳時代の集落			
4	八ツ溝遺跡	多久市多久町字八ツ溝	3,000㎡	多久市教育委員会	岩永
	遺跡の概要	縄文時代の遺物包含層、古墳時代の自然流路跡			
5	小木原遺跡	伊万里市二里町大里字小木原	520㎡	伊万里市教育委員会	島内
	遺跡の概要	旧石器時代の遺物包含層			
6	大岩西遺跡Ａ・Ｂ区	東松浦郡浜玉町大字横田下字大岩	7,800㎡	浜玉町教育委員会	中尾・永田
	遺跡の概要	古墳時代前期～中期の墳墓群			
7	川頭遺跡	唐津市半田字川頭	2,000㎡	唐津市教育委員会	内田・草場
	遺跡の概要	中世～近世の土壙墓・甕棺墓			

1　鷹取山（たかとりやま）遺跡５･６区（ＴＴＹ－５･６）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字丸山

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成12年６月～平成13年３月

調査面積

1,000㎡

図57　鷹取山遺跡５･６区位置図（1/25,000）

遺跡の概要

本遺跡は鷹取山の中腹標高約250ｍの地点に位置し、調査区は５区と６区に分かれている。

鷹取山遺跡５区は、平成11年度に実施した鷹取山遺跡４区の北側、尾根と尾根の間の谷部に位置する。今回の調査で検出された遺構には、土壙、小穴、溝状遺構がある。また、尾根の一部を成形して造られたと見られる高まりが検出された。この高まりは、谷を塞ぐような形で存在していることから、谷からの侵入者に対する防御的な意味を持つ可能性がある。高まりの上面は平坦に成形されている。高まりの北側には、溝状遺構が検出されており、通路として使用されていた可能性もある。今回の調査では遺物は出土しなかった。

鷹取山遺跡６区は、５区と大きな谷を挟んだ尾根上に位置する。尾根の幅は約８ｍほどで、非常に狭い尾根である。今回の調査では、谷から山頂へと続く通路及び、人工的に造られたとみられる平坦面が検出された。遺物は出土しなかった。

今回の調査では、谷部から尾根にかけての山城の通路が確認され、実態が良くわかっていない中世山城のあり方を研究する上で重要な成果が得られた。

鷹取山遺跡５区調査区全景

鷹取山遺跡５区遺構検出状況

鷹取山遺跡５区高まり部

鷹取山遺跡６区調査区全景

鷹取山遺跡６区通路状遺構

鷹取山遺跡６区平坦面

図版19　鷹取山遺跡５・６区

2　石土井遺跡３・４・５・６区
（ＩＳＤ－３・４・５・６）

遺跡の所在地

佐賀市金立町大字薬師丸字石土井

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成12年７月～平成13年２月

調査面積

3,810㎡

図58　石土井遺跡３・４・５・６区位置図（1/25,000）

遺跡の概要

石土井遺跡は金立地区の東部域に位置し、地形的には金立山南麓部から舌状に広がる洪積丘陵の南端に近い標高4.5～6.2m部分に位置する。地勢的には丘陵上は畑地、低い面は水田として利用されていた。

石土井遺跡はそれぞれ３区～６区の４箇所に分散している。３区～５区は農業基盤整備事業に伴う調査であり、６区は県営地盤沈下対策事業に伴う調査である。

３区では掘立柱建物14棟・井戸３基・土壙52基・溝３条・周溝状遺構１基・その他小穴多数を検出した。掘立柱建物は弥生時代のものが主体で、１間×１間もしくは１間×２間である。他の掘立柱建物は古墳時代～古代に属すると推定される。井戸３基はいずれも弥生時代中期後半の所産で、それぞれから土器資料が多数出土した。　土壙の大半は弥生時代中期後半に属し、廃棄された土器多数が出土した。土壙の中には古墳時代前期のものが２基存在し、１基からは木製の臼が出土した。もう１基では多数の土器（土師器）や石錘が廃棄されている状況が確認された。周溝状遺構は１基を全掘した。溝はいずれも中世の所産で、調査区西部で検出した。陶磁器多数が出土している。

４区は調査区内の北部が洪積丘陵部にあたるが、ほとんどは暗灰色粘質土を基盤とする低地部に位置している。遺構はこの丘陵部に集中し、ここで竪穴住居１軒、掘立柱建物６棟、井戸２基、土壙等を検出した。竪穴住居は遺構の西半部を確認したが、遺存状態は悪く、少ない出土遺物から判断すると、弥生時代後期に属すると判断される。井戸２基は共に近接した場所に掘削されており、弥生時代中期後半代の土器を主体とする遺物を多数出土した。

５区は６区の東方に位置する調査区で、焼原川の西岸域に位置する。掘立柱建物１棟・土壙21基・溝12条・不明遺構２基・その他小穴多数を検出したが、遺存状態はあまり良くなかった。年代的には弥生時代中期後半～後期が主体であるが、溝はほとんどが近世の所産である。地形的には４区・６区と同じ丘陵上に位置するが、川に近い調査区の東部は地形的に低くなっており、当地区は４区・６区で確認した弥生の集落の東辺縁部にあたる部分と考えられる。

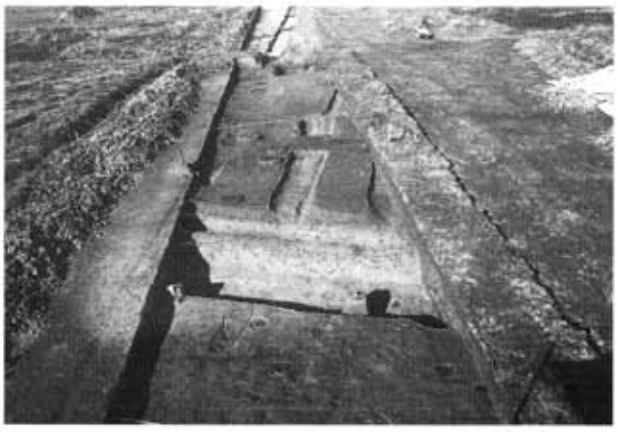
６区の掘立柱建物もほぼ上の時期に重なる時期の遺構である。調査区西側の低地部では弥生時代後期に属する溝や土壙を検出した。また、柱穴らしい掘り方の遺構も多数確認しており、当該期に居住と密接に関係した土地利用がなされていた地域であったと考えられる。

調査の結果から、石土井遺跡の遺構は、北方の村徳永遺跡から続く同じ舌状丘陵上の集落跡の一部と捉えることができ、今回の調査区はその集落跡の南端にあたるものと考えられる。

石土井遺跡３区遺構検出状況

石土井遺跡３区ＳＥ3007井戸跡遺物出土状況

石土井遺跡４区井戸跡・掘立柱建物跡等



石土井遺跡５区溝跡

石土井遺跡６区遺構検出状況

石土井遺跡６区ＳＫ6017土壙遺物出土状況

図版20　石土井遺跡３・４・５・６区

3　上九郎（かみくろう）遺跡２区（ＫＫＲ－２）

遺跡の所在地

佐賀市金立町大字薬師丸字上九郎

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成12年10月～平成13年１月

調査面積

2,050㎡

図59　上九郎遺跡２区位置図（1/25,000）

遺跡の概要

上九郎遺跡は、標高７ｍ前後の洪積台地上に立地する。遺跡の周辺は都市化が進んでいなくて、田園地帯がひろがる農村地帯である。農業基盤整備事業に伴い、平成10年度から発掘調査を進めている。

今回の調査対象地は、調査区名は平成10年度に引き続き２区とした。東西方向の幹線水路部分で、南北13m、東西150mほどである。厚さ30～50cmの耕作土直下に現れる暗褐色土～黄褐色土が基盤面で、西から東へ緩やかに傾斜し、東端では無遺物の堆積層を確認した。遺構は、基盤面に黒褐色土・暗褐色土が落込んだ状態で検出され、その判別は比較的容易であった。

調査の結果、上九郎遺跡２区は、弥生時代前期、弥生時代中期末～後期、古墳時代前期を中心とする集落の一部であることが明らかとなった。主要な遺構は、掘立柱建物11棟以上、井戸４基、土壙36基、溝３条、小穴多数を検出した。主な出土遺物は、弥生土器、石製品、土製品、土師器、須恵器である。この他、近代所産の粘土採掘坑と思われる掘り込みを多数検出した。

弥生時代前期の遺構は、調査区の中央部に集中する。主に土壙が検出され、うち大型の1基は貯蔵穴ではないかと考えられる。

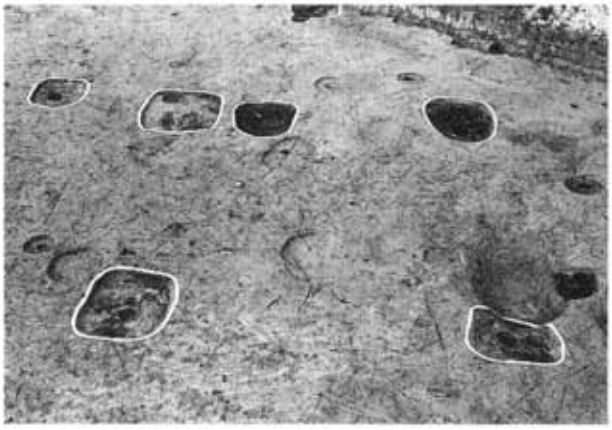
弥生時代中期末～後期の遺構は、調査区全体に広がるが、調査区西側の方が密度が高い。主として掘立柱建物・井戸・土壙を検出した。掘立柱建物は、調査区西側に集中し、全て地形線に沿って西偏する。建物のうち１棟は大型の木製礎板を伴っていた。井戸からは、一括投棄の弥生土器と共に多量の木製品が出土した。

古墳時代前期の遺構は、調査区の東西端に離れて分布する。主として井戸・土壙を検出したほか、一部の遺構からは古式の須恵器が出土した。

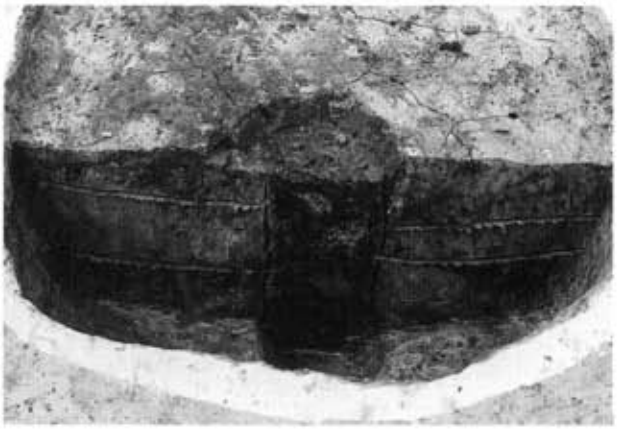
平成10年度の調査では弥生時代及び中世の遺構が確認されていたが、今回の調査ではさらに古墳時代前期の遺構が確認され、各時代にわたって集落が営まれていたことが明らかとなった。

上九郎遺跡２区全景

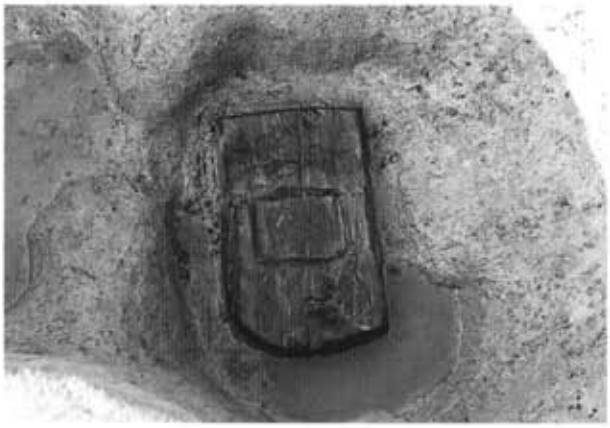
ＳＫ2001土壙遺物出土状況



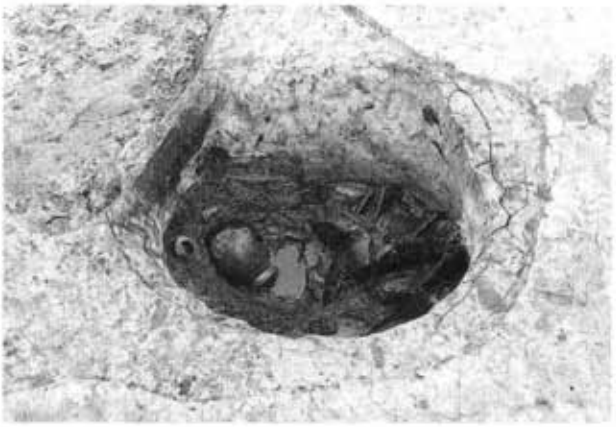
ＳＢ2050掘立柱建物跡



ＳＢ2049掘立柱建物跡柱穴柱痕検出状況



ＳＢ2082掘立柱建物跡柱穴礎盤検出状況



ＳＥ2067井戸跡遺物出土状況

図版21　上九郎遺跡２区

4　八ツ溝遺跡（ＹＴＭ）

遺跡の所在地

多久市多久町八ツ溝

調査主体者

多久市教育委員会

調査期間

平成12年５月～平成13年１月

調査面積

3,000㎡

図60　八ツ溝遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

八ツ溝遺跡は牛津川上流の河川低地に立地し、標高は22m前後である。この河川低地には九州横断道開発に伴い発掘調査された撰分遺跡がある。遺跡からは弥生時代中期～近世にかけての遺構・遺物が主に出土している。撰分遺跡から南東約250m先には、多量のサヌカイト製の尖頭器が出土することで知られる三年山遺跡と茶園原遺跡がある。今回の調査は平成９年度からの継続調査の４年目にあたり、過去三年間の調査で、多量の木製品や水田関連遺構、縄文時代の遺跡等が発見された。

調査区は昨年同様、撰分遺跡の隣接地にあたり、今回は20～21区の調査を実施した。20区は自然流路が調査の対象となった。流路の中から石組遺構と古式土師器が多く出土し、ほぼ完形品も含まれる。遺構と出土した土器との関係は明確でないが、他の時期の遺物がほとんど見られないことから同一時期を考えておきたい。石組遺構は、面を揃えて円形に配置されており、水を汲み上げるための施設と考えられる。平成10年度の調査でもこの時期の住居跡が鼓形器台・二重口縁壺などと共に発見されており、この集落に伴う遺構と考えられる。21区は縄文時代の遺物包含層が確認された。土器が細片のため時期は明確ではないが、石器から縄文後期と考えられる。

今年度の調査で、４年にわたる八ツ溝地区の発掘調査は終了した。詳細な報告は本報告書に譲るが、成果として、

１）縄文時代（主に後期）の遺跡が広範囲に点在すること、２）撰分遺跡の広がりが把握できたこと、３）水田関連遺構の発見、４）八ツ溝地区には埋没した小河川が多く存在し、農具等の木製品が多く埋没していることが判明したこと、５）多久市では弥生前期の遺跡が少ないが、八ツ溝地区でも同時期の遺構・遺物が発見できず、この時期の不活発さが確認できた、等を挙げることができよう。逆に、八ツ溝地区の調査を通して浮かびあがった問題としては、１）多久市の弥生前期の様相、２）調査区から多く出土したサヌカイトの剥片の所属時期について等が挙げられる※。

註※）多久市がサヌカイトの大規模な原産地という地理的な条件からか、縄文時代・弥生時代の遺構をはじめ、古墳時代の住居跡からも多く剥片が出土した。それらの剥片が「流れ込み」か遺構に伴うものかの検討を行なう必要があると思われる。

自然流路跡
石組遺構検出状況

自然流路跡
古墳時代土師器甕
出土状況

図版22　ハツ溝遺跡

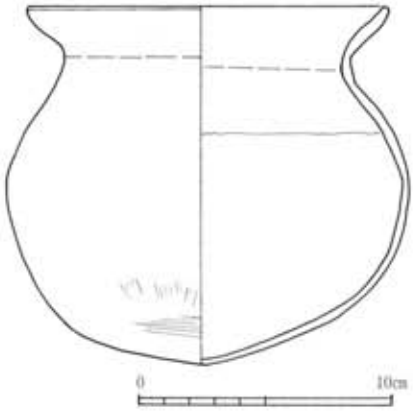


図61　ハツ溝遺跡出土遺物（古墳時代土師器甕）

5　小木原（こぎわら）遺跡（KOG）

遺跡の所在地

伊万里市二里町大里字小木原

調査主体者

伊万里市教育委員会

調査期間

平成12年９月～平成12年12月

平成13年４月～平成13年６月

調査面積

520㎡

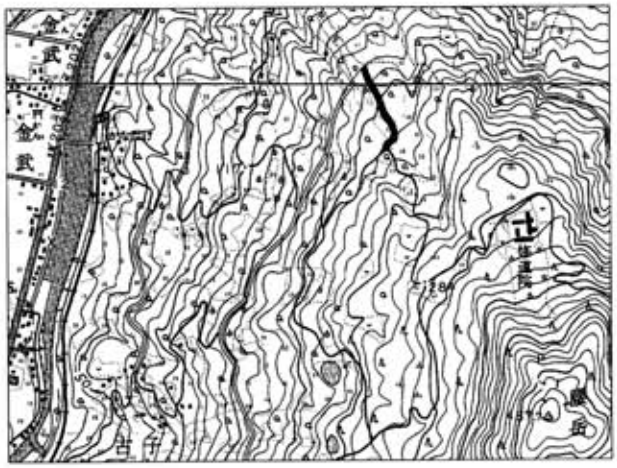


図62　小木原遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

小木原遺跡は、腰岳の北側中腹、標高約200m地点に位置している。調査区は、北側に向かって緩やかに傾斜する丘陵する丘陵の西端に位置しており、西側には谷が形成されている。腰岳には黒曜石の原石が散布しており、山全体が、腰岳遺跡群として周知されている。特に、腰岳の標高200m地点は多量に散布している。

調査は平成12年度農林所管関係事業の協議で、ふるさと林道建設事業小木原線の事業が挙がり、平成12年２月17日～22日にかけて確認調査を実施した。その結果、全長300mの計画地中程の100m、約520㎡の範囲で黒曜石の石器を含有する遺物包含層を確認したため、平成12年度から二カ年にかけて本調査を実施することになった。

１次調査は平成12年度に約230㎡、２次調査は平成13年度に約290㎡を調査した。１、２次調査とも遺構は検出されなかったが、遺物包含層が厚さ約50cm程検出された。

１次調査では、約4,500点の石器が出土した。黒曜石の不定形剥片、チップが4,000点強出土した。その他は、使用痕剥片、２次加工剥片、コア、ナイフ形石器、台形様石器、スクレイパー等が若干出土している。また、サヌカイト製の不定形剥片が１点出土した。

遺物はＢ２区周辺、Ｄ11区周辺、Ｃ14区周辺の３箇所で集中して出土した。Ｄ11区周辺では拳大の原石、台形様石器、コア、縦長剥片、不定形剥片、チップが出土した。ナイフ形石器は調査区の南端と北端で出土し、台形様石器は調査区の中程で出土した。

２次調査では、約3,200点出土した。１次調査と同様に、不定形剥片、チップが大半を占めている。その他では、コア、原石、縦長剥片が出土しているが、ナイフ型石器等の出土はなかった。

Ａ・Ｂ30～35区で遺物の集中域を１箇所確認した。原石を中心に剥片、チップが多量に出土した。１次調査の集中域に比べて範囲が広がった。

調査の結果、総出土点数約7,700点のうち、7,200点は不定形剥片、チップといった石器の加工の際にできる石器で構成されていた。コアは、約120点出土しているのに対し、台形様石器、ナイフ形石器などの出土は非常に少なかった。このことから、この遺跡でツールの素材となる剥片やツールを製作し、製品はほとんど持ち帰ったと考えられることから、旧石器時代の石器製作跡と考えている。腰岳では縄文時代の生産地遺跡として鈴桶遺跡が周知されているが、旧石器時代の生産地遺跡は未発見であった。本遺跡の発見は、大きな成果であると思われる。

第１次調査区完掘状況（南から）

第１次調査区完掘状況（北から）

第１次調査区完掘状況（西から）

第２次調査区完掘状況（南から）

第２次調査区完掘状況（北東から）

第２次調査区集中域西側土層断面

図版23　小木原遺跡

6　大岩西遺跡（おおいわにし）A区・B区（HOW－A・B）

遺跡の所在地

東松浦郡浜玉町大字横田下字大岩

調査主体者

浜玉町教育委員会

調査期間

平成12年５月～平成13年３月

調査面積

8,000㎡

図63　大岩西遺跡Ａ・Ｂ区位置図（1/25,000）

遺跡の概要

大岩西遺跡は鏡山西側の天山山系から派生した、標高80m程度の丘陵地に立地する古墳時代の墳墓を主とした遺跡である。周辺は数本の丘陵が北側の玄海灘に向かって延びており、それから幾つもの小丘陵が複雑に張り出している。その中でも当該遺跡は最大丘陵の最上部に位置する。本遺跡の周辺には、同一丘陵上端部及び中段部に月岡遺跡や国史跡「横田下古墳」に代表される古墳時代の遺跡が多数点在する。

調査はＡ・Ｂの２地区に分けて計約8,000㎡について実施した。Ａ区の調査では過去の土砂採取の際に前壁を破壊され、永年放置されていた竪穴式石室１基と壺棺１基を検出した。石室は尾根の頂部ではなく南側の斜面にあり、明確な墳丘は形成されていなかったが、上部の斜面を削りその土を低い方に盛土し墳丘状の形を呈していた。調査の結果、床に川砂を敷いた石室内より鉄剣１・刀子１・鉄鏃１が出土した。また、墳丘状の盛土を取り巻く周溝状の遺構から高坏、坩が良好な状態で出土した。

Ｂ地区の調査では、尾根の頂部にあたかも列状に並んだように、竪穴式石室２基、箱式石棺５基、石蓋土壙墓３基が検出された。箱式石棺５基の内、４基は粘土で目張りを施し、非常に密閉度が高く流入土も少なかった。ＳＴ－０４０からは、ガラス玉・勾玉・管玉が合計で百数十個出土した。ＳＴ－０７０、ＳＴ－０８０は今回調査を行なった丘陵の最頂部に位置し、特に残存状況が良く、この内ＳＴ－０７０では赤色顔料を塗布した棺内より、ほぼ完全な形で人骨１体が出土した。また、ＳＴ－０８０からは人骨1体、石釧・貝釧・管玉が出土した。この石棺は規模・石材等が他と比較すると大きく、墓壙内に多数の裏込石を施し石棺墓を造っている。構造的に裏込石が直接に石棺の側壁等を支えるために多数必要だったとは考え難く、墓域としての意識が強いように思われる。石棺墓・石蓋土壙墓は主軸を丘陵頂部に直交させて造っていたが、小口積の竪穴式石室ＳＴ－０２０は丘陵の先端部に主軸を尾根と平行にして造っていた。

以上のように、今回の調査で古墳時代の墳墓を多数検出したが、多くの遺構の上面が後世の何らかの改変により削平されているものが多く、また孟宗竹が繁茂しており、明確な盛土が検出できた遺構は少ない。出土遺物に関して、ＳＴ－０８０出土の貝釧は左手に通った状態で出土した。石釧は左手首部にあり身に付けていたかは定かではないが、腕輪としての取扱いがされていた。町内では、国史跡「谷口古墳」で過去に11個の石釧が出土しており、畿内を中心とした大和圏内での出土例のように1つの石室から複数の出土が確認されている。今回出土の石釧がその中の一つに形状が酷似しており、当地方の首長クラスの支配体制を探る上で貴重な資料となるかと思われる。なお、これらの遺跡が営まれたのは、概ね４世紀末～５世紀前半をその時期と考えている。

大岩西遺跡Ｂ地区全景（西より）

大岩西遺跡Ｂ地区ＳＴ-040（南より）

大岩西遺跡Ｂ地区ＳＴ-020（南より）

ＳＴ-020天井石除去後（南より）

Ｂ地区ＳＴ-080（：左），-070（東より）

ＳＴ-080棺内遺物出土状況（南より）

大岩西遺跡Ｂ地区ＳＴ-070（北より）

大岩西遺跡Ａ地区ＳＴ-010（右が北）

図版24　大岩西遺跡Ａ・Ｂ区

7　川頭（かわがしら）遺跡（ＫＡＧ）

遺跡の所在地

唐津市半田字川頭

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

平成12年７月～平成13年２月

調査面積

2,000㎡

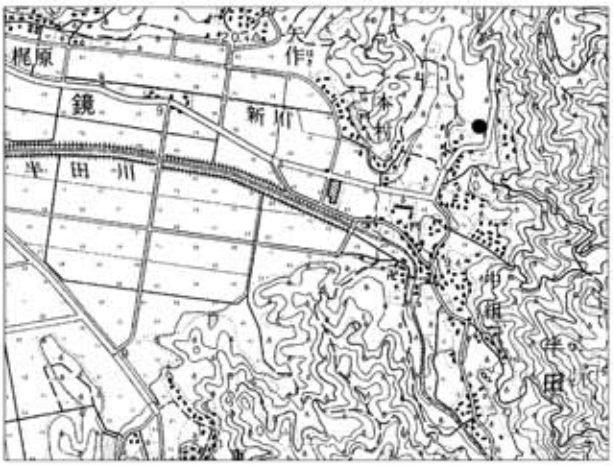


図64　川頭遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

川頭遺跡は、唐津市東端の半田地区に位置し、背振山系から延びる丘陵西端に位置する。谷部を挟んで西側には鶏ノ尾遺跡、同古墳群、北側には一昨年度調査を行なった外原遺跡、さらに南側低丘陵上の現集落部分には、今年度40基以上もの甕棺墓を検出した天神ノ元遺跡が立地する。

調査は平成10年度に行った確認調査の結果を踏まえて、工事予定地内において土壙墓と思われる遺構を確認していたことから、近世墓のうち、寄墓の際の破壊を免れたものの存在を想定していた。また、近世墓が立地する箇所が地図上では円墳状に盛り上がった形状をしているものの、確認調査の際には竹が密生しており、なおかつ現存する近世墓を破壊する恐れもあり、古墳の有無を判断することが困難であったため、今回の調査では古墳の存在まで視野に入れて調査を行なった。

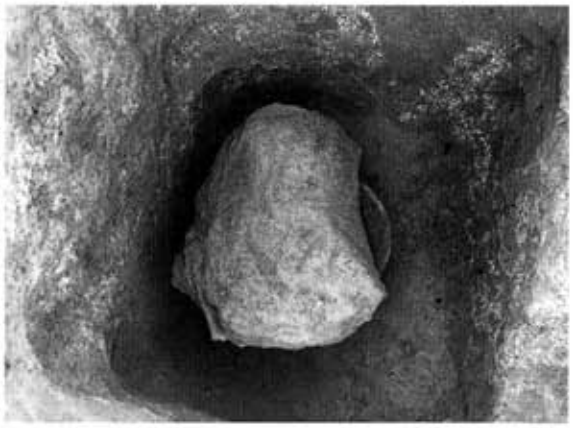
調査の結果、近世墓のうち、比較的浅い箇所に埋葬されたものは寄墓の際に破壊されているものの、全体的に深い位置に埋葬されているものが多く、中には現地表面から３ｍを越す深さに甕を埋置するものもあった。円墳状の盛土部分は、精査の結果、ほぼ方形に近い形状をしており、近世墓群に付帯するものと思われる。また、近世墓群の東側において幅２ｍ程の溝状のごく浅い落ち込みが確認され、玉縁の口縁を持つ白磁をはじめとする中世の遺物が多く出土したため、周囲に建物が存在していた可能性を考慮し入念に精査を行なったが、検出には至らなかった。

調査区の南側部分は前述したとおり、ミカン園となっていたため、樹間のごく限られた箇所にトレンチを入れざるを得なかったものの、形状的には中世の土壙墓と思われる遺構を確認し、現地形がごく緩やかに西側へ落込む緩斜面で旧状を残している模様であったため、樹木伐採後により広範囲な調査を行なうこととした。

調査の結果、予想以上にミカン園操業時の撹乱が激しく、確認調査時に検出した土壙の他に小穴を含め比較的小さな遺構を検出したものの、時代を決定し得る明確な遺構の検出には至らなかった。

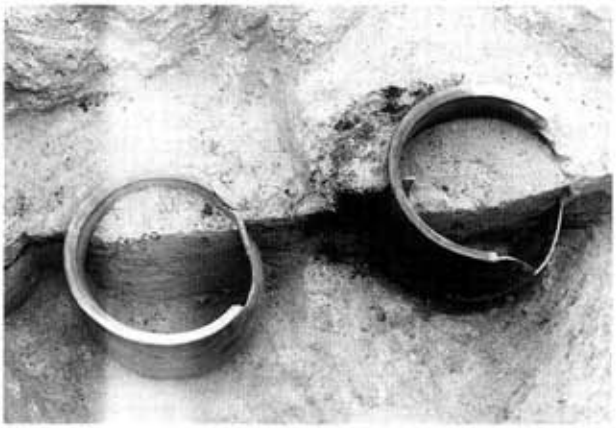
今回の調査の結果、次のことが判明した。近世墓の被葬者は、墓石が外されていたため墓石と各墓との照合は出来なかったが、いずれも半田地区の庄屋を務めた「麻生家」の人々と思われ、半田の集落を見渡せる地点の区画された墓域に埋葬されている。近世墓の中には墓石の周囲に炭を充填するものや、石蓋を有する甕棺や木蓋を有したと思われる甕棺、深さ３ｍを超える同一の掘方の中に近接して埋葬される甕棺墓等様々な形態がみられる。今後これらの情報を整理し、さらに墓石に刻まれた文字の解読を進めることで唐津地区の近世の埋葬に関する貴重な情報を得ることができると思われる。

川頭遺跡全景



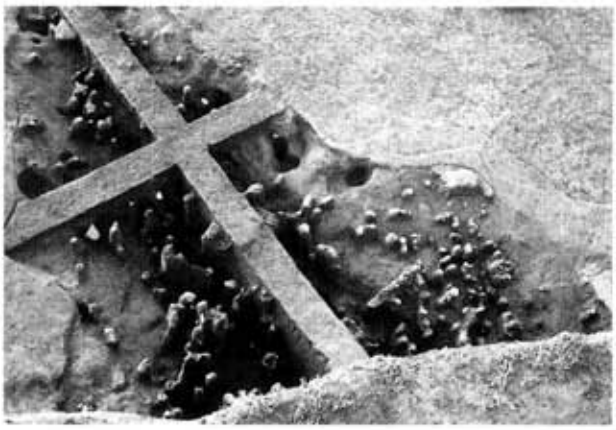
ＳＫ38近世墓石蓋検出状況

ＳＫ36近世墓半裁掘状況



ＳＫ22・23近世墓裁状況

ＳＫ21近世墓人骨出土状況



落ち込み内遺物状況

図版25　川頭遺跡

佐賀県文化財調査報告書第151集

佐賀県内遺跡確認調査報告書20

平成14年３月

発行・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目1-59
ＴＥＬ　0952（24）2111

印　　刷　山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5
ＴＥＬ　0955（22）5188